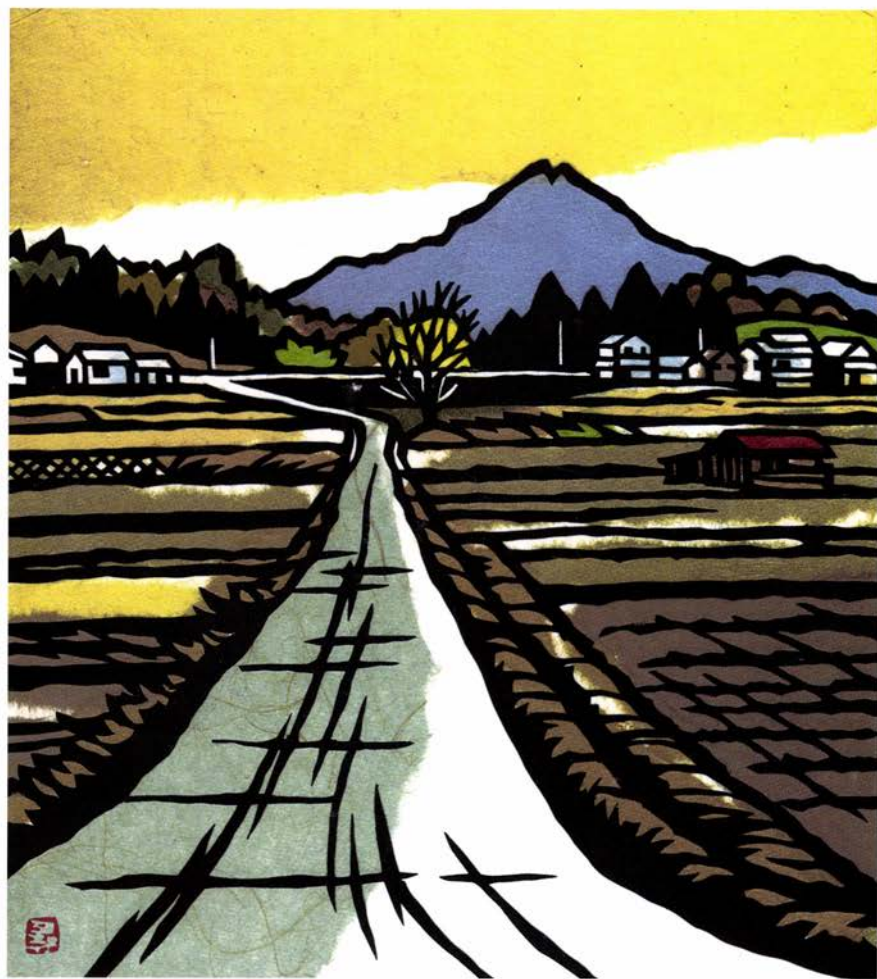


川柳塔

昭和四十一年一月九日 第三種郵便物認可
平成二十五年十月一日発行（毎月一日発行）
創刊大正十三年 通卷一〇三七号



日川協加盟

No.1037

平成二十五年度 六賞発表

十月号

第19回 川柳塔まつり

と き 平成25年10月12日(土)

午前11時開場・午後1時開会

と ころ ホテル・アウリーナ大阪 4階 金剛の間(中・西)

大阪市天王寺区石ヶ辻町19-12 電話 06-6772-1441
(近鉄上本町・地下鉄谷町九丁目下車)

《 同 人 総 会 ・ 議 事 》 午前10時より

平成24年度事業経過報告・同決算報告・会計監査報告

平成25年度事業計画・同予算案・役員人事・その他

《 各賞表彰式・記念句会 》

表 彰 式 路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞・檸檬賞・一路賞・各地柳壇賞

おはなし 「津軽発おもしろ景色スペシャル」 川柳塔社 高瀬霜石氏

兼 題 「広 い」 島根石橋芳山選

「ささやく」 青森松山芳生選

「テンポ」 和歌山木本朱夏選

「机」 大阪太田昭選

「忘れる」 大阪河内月子選

事前投句 「樹」(締切りました) 川柳塔社 主幹 小島蘭幸選

◎各題2句・勝手ながら欠席投句は拝辞させていただきます

出句締切 正 午(午後4時半終了予定) ※各題の「天位」に賞呈

◎会 費 2,000円(当日頂きます) ※記念品 呈

ご昼食は各自でお済ませください

《 懇 親 宴 》

と き 平成25年10月12日(土) 午後5時～7時

と ころ ホテルアウリーナ大阪 3階 葛城の間

☆会 費 7,000円(会席料理) 先着申込み 120名様

☆宿 泊 ホテル・アウリーナ大阪 8,000円(朝食付き)

*懇親宴・宿泊のご送金(句会費除く)は同封の振込用紙でお願い致します。

主 催 川 柳 塔 社

大阪市天王寺区大道1丁目14番17号201
〒543-0052 ☎・FAX 06-6779-3490
振 替 0 0 9 8 0 - 4 - 2 9 8 4 7 9

暑氣払い

小島 蘭 幸

八月某日、広島の柳友から、暑氣払いの案内を頂きました。郵政川柳・中国ブロックでは、会員の親睦を深めるために、毎年、不定期ですが各地で会合を開催しているのです。

今年の暑氣払いの内容は、お好み焼き、カラオケルーム、ナイター観戦です。暑氣払い当日、私は少し早目に自宅を出て、県立美術館で開催されているゴッホ展を鑑賞しました。

世界で最も名の知られた画家の一人、フィンセント・ファン・ゴッホの日本初公開36点、自画像8点、その圧倒的な迫力に私は、作品の前で立ち尽くすばかりでした。

自画像のどの眼も明日へ向いている 蘭幸

午後一時、お好み村の中にある、お好み焼き文ちゃんには、会員11名が集合しました。ビールで乾杯、お好み焼きを食べながら、飲みながらのおしゃべりは正に、至福のひとつでした。

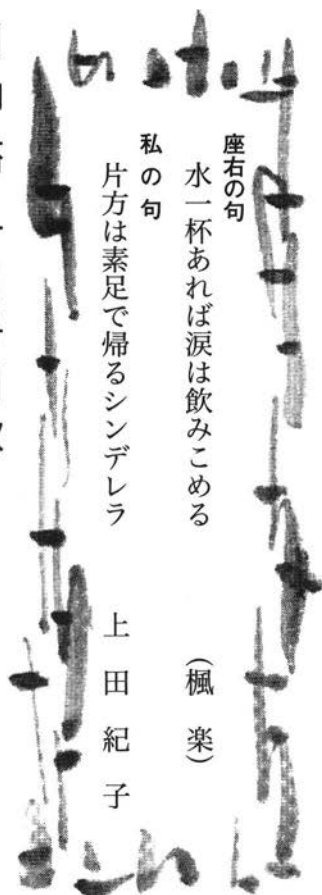
二次会のカラオケルームには、7名が出席、ここではカラオケは使用せず、コーヒーを飲みながら、川柳を語り合いました。私は、リズムの大切さ、披露の間の取り方と先日開催された柳都全国大会の事を話しました。

ナイターまで少し時間がありましたので、近くのデパートで開催されていたザ・ビートルズ展を鑑賞しました。懐かしい曲を聞きながら、初めてレコーディングした時の録音機材、来日の際にジョン・レノンが着用していたハッピー、直筆の手紙、幼少時代の写真、映画のポスター等を見る事が出来ました。ビートルズがデビューしてからもう50年になるので、

ビートルズを古いと思つことはない 蘭幸

暑氣払いの最後は8名でナイター観戦を楽しみました。初めてのクライマックスシリーズ進出へ向けて、カープファン一丸になったの応援、スタジアムは赤一色でした。目標へ向かって一つになることの美しさがそこにありました。

ゴッホ、お好み焼き、カラオケルーム、ビートルズ、カープに元気をいっぱい頂いた一日でした。そして何よりも、中国ブロックの皆さんに元気をいただいたことを喜びました。



座右の句

水一杯あれば涙は飲みこめる

(楓 楽)

私の句

片方は素足で帰るシンデレラ

上田 紀子

川柳塔 十月号 目次

題字・中島生々庵／表紙きり絵・前田 尋「都介野岳」

■巻頭言 暑氣払い

マスコミ川柳の功罪

川柳塔(同人吟)

川柳塔の川柳讃歌¹⁰⁶

自選集

温故知新

水煙抄

新川柳鑑賞²⁰

西尾 葉句抄

平成二十五年年度

路郎賞・川柳塔賞・愛染帖賞
檸檬抄・一路賞・各地柳壇賞

英語 de Senryu²²

俳風柳多留一二篇研究 4

江戸を楽しむ¹⁰

追悼のことは 吉村一風さんを偲んで

小島 蘭 幸 … (1)

三宅 保州 … (2)

小島 蘭 幸選 … (4)

木津川 計 … (45)

川上大輪選 … (50)

麻生 路郎 … (72)

吉村 侑久代 … (74)

小栗 清 吾 … (86)

初山 隆盛 … (87)

マスコミ川柳の功罪

三宅 保州

某生命保険会社が毎年募集している「サラリーマン川柳」は、毎年数万句もの応募があり、そのうちの選者百選に対する人気投票数は十数万人にも及んでいます。その今年の第一位は「いい夫婦今じゃどうでもいい夫婦」という句でした。以前にも「いい家内十年たつたらおつかない」という句が一位に選ばれています。

いわゆるマスコミ川柳、サラリーマン川柳、企業川柳等において「川柳ブーム」と言われるほど流行していることは、文芸としての川柳であればよいのですが、その多くが駄洒落や語呂合わせ等の言語遊戯的な句で占められているのは、いささか憂慮すべき傾向ではないでしょうか。これらの低俗な「川柳」と称するものは、過去の川柳の歴史の中でも江戸末期から明治時代の約百年間にかけて大流行し後に「狂句百年の負債」と言われました。それを憂いた川柳家たちが「新川柳

愛染帖		新家完司選	(88)
檸檬抄「渋い」		大内朝子共選	(92)
一路集「経 験」		江見見清選	(95)
「敷く」		大石あすなろ選	(96)
「がっちり」		近藤 正選	(97)
『麻生路郎読本』余滴 (17)		柴原道夫	(98)
民族の詩歌 (16)		三好專平	(102)
■句集紹介「鴛鴦の足あと」石谷忠良・美恵子著		倉益一瑤	(103)
初歩教室「籍・箱」		太田 昭	(104)
川柳塔鑑賞		山岡富美子	(106)
水煙抄鑑賞		升成 好	(108)
せんりゅう飛行船 (34)		新家完司	(109)
九月本社句会		青砥たかこ	(110)
句会燦燦			(114)
各地柳壇(佳句地十選／山田耕治・瀬戸まさよ)			(115)
十月各地句会案内			(128)
柳界展望			(130)
■編集後記(ひとこと／山野寿之)		朱夏・まつお	(132)

座右の句
私の句

旅人のめざしてくれる樹になろう

(公弘)

トツプから落ちてても命だけはある 田中一眸

期」と称する本来の文芸としての川柳の時代を形作り、爾来約百年間現代に至るまで、真の川柳時代が構築されて来たことはご承知のことと存じます。

狂句の時代の一例を挙げますと、「雪隠の屋根は大かた屁の字なり」(柳多留の狂句調)という類の狂句がばっこしました。現代の低俗な川柳の流行は、「狂句時代の再来」として危惧するのは大げさすぎるのでしょうか。先人達が血の滲む苦勞をされて、文芸としての川柳が認識されてきた折りから、マスメディアにおいて狂句まがいの川柳と称するものが流行していることは慚愧に耐えません。一面、マスコミ等でも川柳家が選者をさしている場合は狂句が少ないのはご同慶の至りです。

我々、川柳人・結社も挙げて真の川柳の普及啓発に尽力したいものです。

なお、前掲の狂句まがいの「夫婦」を詠んだ句に対しては、かくあるべき夫婦を詠んだ佳句として、当社路郎賞受賞の奥田みつ子氏の「ああ夫婦おんなじ時に胃が痛む」をこれぞ文芸としての川柳の模範であると誇示したいものです。



小島蘭幸選

高知市 小川 てるみ

笑顔っていいな鏡に褒められる
まな板の傷にも主婦の自負がある
程ほどの面子が老いの杖になる
歳月は魔法だ傷も自然治癒
年功序列おおかだつたよき時代
山頂の風にいのちが背伸びする

鳥取県 斉尾 くにこ

ひまわりの娘の側でひなたぼこ
うけうりじや愛も言葉も届かない
描き終えてほっとひとりの展示会
大欠伸するたび無くすものの色
熱い息うぶげのどこか触れました
人見知り深海ザメの君がいい

鳥取県 細田 裕花

邪心なく一本締めの手を叩く
脳細胞の隙間に花を植えている
トロピカルファッションが好き夏休み

夕涼みビールの泡が冗舌だ
シニア料金うきうきと行くパラダイス
爆発をしてから立場逆になり

堺市 澤井 敏治

円空のこころに浸る北の旅
隣国の軍靴が響き寝つかれず
知覧摩文仁忘れ平成の平和
後期高齢年寄りらしくなるまいぞ
やっと喜寿人生ドラマまだ未完
甘えまい雑魚は雑魚なり夢を抱く

鳥取市 森山 盛桜

古里で胡乱な者と言えはボク
信念の記名が何度有つたらう
包括をされる事には慣れている
ただ二人なのに合意に至らない
三分の一ずつ三人で詫びる
偏差値の誤差の範囲で生きている

倉吉市 牧野芳光

雨の日は錆びた刀を研いでいる

くたびれたか迷惑メールこなくなる

過疎の夜星が流れる音がする

頭の中の雑念を見てほしい

亡くなった人と話をして過ごす

コウモリが炙り出されて飛ぶ猛暑

橿原市 居谷真理子

美しい女だ本を読んでいる

皮むけば案外つまらない林檎

土用波今日は言わせてもらいます

はかなげな人強靱な尾びれ持つ

これ以上泣いたら嘘がまじりだす

ありがとうワタシ元気でいてくれて

篠山市 酒井真由

花火待つ闇ひっそりと逢うている

威勢よく花火を上げた男だが

花火見る約東午後の飢えすこし

モード誌を風がめくりぬ海の上

うたた寝の夢に亡きひとばかり来て

夢にひらくヒマラヤの青い罌粟

大阪市 津村志華子

怯むまいとまだまだ意欲持っている

お見舞の手紙書くのは難かしい

人さんに支えられつつ来た長寿

強かに生きて失くした淑やかさ
のんびりと自分自身を守らねば
すつぴんの母は心も飾らない

大阪市 谷口義

機嫌よく遊んでるのも仕事です

地震速報まずはズボン履き替える

もう誰も叱らないからこの程度

再放送再放送蟬時雨

ひまわりはアキレス腱で立っている

それ以上言えば女がすたります

大阪市 古今堂蕉子

酒癖は悪い陽気になりすぎる

君の手で心で書いた文を待つ

笑顔で弾むマリ届けますかしこ

八合目人生ここからが躍如

紆余曲折やつと自分らしくなる

アリバイをくずす完璧なアリバイ

米子市 吉田陽子

夜間診療無事故放免に生き直す

あの世へは行進曲で渡りたし

神様の情か二つある臓器

知恵袋あけると汗が溢れ出す

輪を保つ折れる勇気がうんという

散歩道季節先取りする五感

枚方市 寺川弘一

喜怒哀楽のどのボタンでも出る涙

在宅介護他人事だから言えること
熱帯夜ホントは寝相いいのです
残り物に福ありましてまだ夫婦

この世では裁判官が閻魔さま

池田市 栗田久子

遺言に軽い言葉は書いてない

ただの水だが銘柄も値段も違う

無味無臭青酸カリは飲み易い

尼崎市 山田耕治

軽くても財布はいつも持っている

自販機を並べ峠の茶屋無人

あつさりとオーケー老母を呼ぶ話

叱る人もう誰もない夜爪摘む

卒業の写真は皆痩せている

キッチン奥で足音聞き分ける

豊中市 藤井則彦

玉手箱断ることにしておこう

毒舌の声に溢れる人間味

精一杯生きてきたかと見る鏡

アイディアは行きつ戻りつして浮かぶ

正誤表付けては外すうちに喜寿

僕はまだねじれてるのが生きる甲斐

奈良市 大久保眞澄

操ってほしいお方が一人いる

三ツ星へこっそり塩を持っていく

アベノミクス夜な夜な札を刷っている

イケズしてされてやつぱり人が好き

相手に悔いを持たせるのは情け
少しずつやがてはつきり合う歩調
晩年のここらあたりに返り点
攻められるまだ愛情があるらしい
招かれて名誉招くもまた名誉
水たまり避け世渡りもうまくなる

藤井寺市 鴨谷瑠美子

聴きたいな想い出よりも古い歌

美学哲学うっかり欠伸してしまふ

指切りの指も退屈しています

燃えたぎることが終生なかったか

昨日捨てた方が大事な物だった

秋の便りで攻めてゆこうかしら一度

大阪市 榎本舞夢

相手いるからこそ朝も起きられる

することも智慧も二人でひとり前

好奇心持つてる内は元気です

いつまでも付合ひ出来る果報者

新しくルール作って八十路

暑さ凌ぎフラッと行けるハルカスに

さいたま市 星野 育子

猛暑に豪雨関東は水不足

想定外も集団的自衛権

まるで他人事借金一兆余円

バスツアー夫婦以外弾む会話

バリアフリーにして外で転ぶ癖

東京都 岸野 あやめ

初心者のおしくじり宥め秋の空

読みかけの本を閉じて眠れない

食欲のほかはすべてが片付いた

マンションに住んで枯らした花の鉢

指折って自分の歳をまた数え

東京都 まえで とよこ

はじめてきた朝顔市にひとの渦

あさがおの苗にも日本産のふだ

大声でよき苗を買うおもしろさ

あさがおとふうせんかずら絡む朝

あさがおの咲きつづくころ終戦日

横浜市 小野 句多留

原発は思考回路を破壊する

女子高生活気持ち込む地区センター

電気切れ脚立の上でままならぬ

七十五過ぎて男女に出る段差

連敗が続いてワタシまで落ち目（中日ファン）

横浜市 菊地 政勝

老化とはこういうものか膝痛む

老いたれど遊び心を飼っている

隣との会話はいつもゴミ置き場

少量の試食へ不満だけ残り

師の技を盗み頭で組み立てる

富山市 島 ひかる

天と地を結ぶ恵みの雨となる

青春の秘密着にうまい酒

街で転び山ですっかり癒される

荒立てる声に凶星だなどと思う

見栄張り見栄張る人を嘲笑う

可児市 板山 まみ子

目覚めたら先ず一回目ドッコイシヨ

猛暑には家でゴロゴロベストなり

挨拶は暑い以外に無い猛暑

先の事考えてます少しだけ

考えはまとまらないが腹は減り

大山市 金子 美千代

選挙カーだあれも来ないここに住む

参院選終りジエジエと蝉が鳴く

いただいているのに家族葬ばかり

用意万端小心者の私

ぐうたらに暮す決心した猛暑

犬山市 関本 かつ子

助手席の犬もかなりのお年寄
反戦のアニメに子等の真摯な目
一日の留守にハミング出る掃除
どう見ても格好悪いオスブレイ
夏雲を仰いで友の三回忌

犬山市 吉田 幸子

ゴム緩むように加齢と急き立てる
高山での酸素不足に歯が立たぬ
足元の一步一步にある試練
負けん気がある当分はボケ防止
目の前に出ると賤しい甘い菓子

愛知県 早川 遡行

約束はしない忘れてしまうから
すぐ逃げられるよう前向きに駐車
一步二歩三步が思い切れません
好きな時好きな時間にまたどうぞ
煩そうてかなわん妻の信号機

京都市 高島 啓子

曇りなく拭く作戦を練る眼鏡
小さい嘘角をまあるくしてくれる
たいがいのことを夫には話す
元氣そうに見えているだけでよい
きれいごとでは齡はとれません

京都市 坪井 孝一

真実は心にしまふ余裕ない
騙されてあれでよかった好きな人
ふるさとの足裏にある秋の海
微笑みを好意とすぐに変えるボク
おーい雲幸せ色はどの辺だ

京都市 西村 益子

顔の汗亡母の真似して首タオル
ご褒美にビール枝豆熱帯夜
立秋もピンと来ないねこの猛暑
外出は最小限に熱中症
あつさりもこつても好き肥えるはず

京都市 藤井 文代

絵空ごとでも得することは信じてる
拳下げるきつかけ外す間の悪さ
五体どこも意識いかぬがこれ達者
嫌なことこの妙薬にする忘れぐせ
気候異変四季の感覚溶けてゆく

京都市 梶本 宏子

賸物と判ったダイヤ逝つてから
人が来ると俄然張り切る犬という
薄情な男にこころかける蘭
単身赴任まんざらでない縄のれん
よくこねて練つて育てた第一子

京都市 三宅満子

大阪市 阿野壽美子

夏草と球児の元氣もらいたい
仮面被り自分の素顔忘れそう
歳時記で涼しい言葉探す避暑
訳もなく赤飯炊いて氣が晴れる
早起きも蟬の元氣に負けている

亀岡市 井上森生

難病の強さ長さを悩んでも
ガンバレと孫たちお守り買いに行く
さあここで祈り私に出来ること
悪病のモグラ叩きのウラを行く
大病もツバメ返して乗り越える

長岡京市 山田葉子

きついプランこなしテンションあげている
髭生えた孫とは距離が出来ている
踊らねば 履いてしまった赤い靴
もういやだマリオネットの糸が切れ
折り紙で記憶の糸を辿つてる

八幡市 今井万紗子

野暮ですがいつもの人という安堵
姫鏡亡母に似てきたそこかしこ
時々姫を演じて達者です
織姫から今年は逢えぬメールくる
うちの姫誰に似たのかいい喉だ

欲しい服無理して買って値を隠す
程程に緩めて締める難しさ

買い過ぎて賞味期限に急がされ
アドバイス辛口過ぎて考える
久し振り無難に容姿誉めている

大阪市 池上清治

ボタン押すだけでおかずが揃う夢
一番に間違いないが後ろから
食欲の塊八十年も生き
簡単に五分診療はいお次
琴奨菊腹で押すだけでは勝てぬ

大阪市 岩崎公誠

福耳と言われふんと聞き流す
五時起きへ蟬のコーラス応援歌
ひとり生きるその決断が揺れている
ハルカスの窓下古ビル伏せている
秋の音求め森へと聴きにゆく

大阪市 井丸昌紀

息詰めていると時計が動かない
近いうちにと名前も何も聞かぬまま
マニユアルの通り気配りされてもね
まだひとつ帰る港があつたはず
口だけは負けない母の小さい背

大阪市 江島谷 勝 弘

天邪鬼やつかいものの私です
何事も淡泊なので惑わない
口ベタで間の悪いこと悪いこと
漫画見てニタニタしてるいい大人
少数派自慢する人嫌いだな

大阪市 榎 本 日の出

バラの花に元気をもらう老熟女
盗聴器みたいな人と仲が良い
許されて許す心を教わった
叱られて愛の深さがじんと来る
人間で良かったアリは休まない

大阪市 大 川 桃 花

きつちりとしすぎ友から距離おかれ
歯並びの良さも役者の素質かも
川柳に何だかんだと恩がある
プランターのトマトで足りる独り夏
思ひ出は皆セピア色こけし棚

大阪市 奥 村 五 月

泥船も覚悟の女に捨てられる
晴ればれと体罰もなく甲子園
遺伝かな三代つづく貧乏神
化粧などせぬが戸籍は女です
八十路坂恋は不発も夢はある

大阪市 笠 嶋 恵 美

全身の空気入れ換えタカラヅカ
御利益のふしぎ転院先決まる
孫よりも親が来て来てピアノ聴く
美のちから機嫌治まる美術館
薬より気分転換花に聞く

大阪市 神夏磯 典 子

すみっこのやさしい風が聞いてくれ
蝉の声だけが大きい無言劇
八方美人顔が足りなくなりました
栗ごはんすべて忘れることにする
有頂天ゆるいカーブに差しかかる

大阪市 川 端 一 歩

疲れたら好きな画集を見て癒す
平均の寿命ですと急かされる
古書市を終え大文字友の忌よ
個展行く太く大きく書く名前
充電の読書と放電のお酒

大阪市 熊 代 菜 月

泣き笑い妻と私の歴史です
バイキングメタボ忘れてまた参加
五分の虫五分の力で生きている
愚痴話出来る友あるしあわせさ
初デイト三十分前の武者ぶるい

大阪市 近藤 正

未来にもはだしのゲンは受け継がれ
歴史あるなにわを潰す都構想
はや五年城に根付いた杉の碑
フクシマの事故処理さえもままならず
霧が晴れ裏まで見える永田町

大阪市 佐藤 忠 昭

何時の間に町内会の古顔に
古顔が町を仕切って暗い町
爺ちゃんの古いお話聞き飽きた
悪友が喜寿の祝いに来いと言う
旅の友古いリュックにワンカップ

大阪市 坂 裕 之

金魚鉢メタボが増えて狭そうに
水槽のメダカの顔が皆同じ
負けるのが嫌いな質で走り出す
聞く耳を持たぬ相手はほんとかな
突っ張っているつもりですお兄ちゃん

大阪市 澤 田 定 子

着地してほっと安堵の航空機
盆踊り勇気を出して輪の中へ
老夫婦言った言わぬとゆずらない
地下道を抜け陽と地図で位置を知る
土を踏む全身汗の大暑かな

大阪市 田 浦 實

敬老バスで街の動きを読んでいる
おばちゃんのモードが街に活気くれ
ガード下の人情酒場足が向く
糟糠の妻の強さが頼もしい
南無阿弥陀仏七回唱え前を向く

大阪市 津 守 なぎさ

熱中症予防の水にある工夫
観劇の余韻と揺れる終電車
イメージが変つて嫁にゆく娘
ささやきが大きくなつて年を知る
あした挽ぐゴーやはきめている平和

大阪市 寺 井 弘 子

過去忘れ未来を語る大ジョッキ
義理人情昭和においたお付き合い
新妻の朝の輝きノーメイク
詰め放題欲の深さを見せる技
鈍行で今の自分をたしなめる

大阪市 原 田 すみ子

ローテーション守ればついてくる元氣
昼下り猫に学んで風の道
氣負うもの減らせば影も薄くなり
似たことで苦勞したのにまた苦勞
千羽鶴背負う大きな願い事

大阪市 板東倫子

こんな大雨見たことないと気象庁

雨量百ミリ気温四十度の中で生き

住み難い日本へも来る渡り鳥

勝てば好き負けても好きなタイガース

夢持てぬ若者たちを責められぬ

大阪市 平嶋美智子

努力一筋社長になった友がいる

紙一重の数値で元氣保つて

ちぎり絵の色合い探す新聞紙

二十四色並べ無心にぬり絵する

米一筋の彼がリタイヤすると言う

大阪市 伏見雅明

記念日をときどき忘れ叱られる

綱渡り今日も演じる町工場

コンビニはわが家のでかい冷蔵庫

タレントを真似て個性のない化粧

正論にこだわって過ぎて輪が軋む

大阪市 升成好

萎んでも朽ちてはいない好奇心

嬉しくて同じ歩幅で歩けない

紋白蝶あの青虫が君なのか

慶弔の慶の袋が動かない

友として酒恋人としてワイン

大阪市 松尾柳右子

夏の雨地面少しだけぬらしたの

娘の電話心が和む午後三時

齒科通い美味しく食べる夢を見る

鉛筆を削る心は無心です

幸せに感謝している七十路坂

大阪市 山崎君子

紫の朝顔一つさびしげに

白髪抜き子と幸せの日曜日

PLの花火今年はさびしくて

部屋中を花に囲まれ幸せを

胡蝶蘭久し振り咲く美しく

大阪市 山本加お里

時代には乗れずデジタル音痴です

生き様で歴史を変えた過去の人

介護するたまに息抜き遊びます

隠してもお天道様は見えています

ボケ防止竜宮城にあこがれる

大阪市 吉内タカ子

これ程に脳トレ散歩気晴らしに

残り火を大事に守るこの暑さ

核体験世界に知らずゲン漫画

メール依存ママよ頑張れ未来の子

風鈴の涼しさに酔う一人膳

堺市 大久保 のん子

賭けた道進めばきつと虹も立つ
生きぬいた日日愛おしむ日記帳
誰よりも私を知っている鏡
若い血をまた呼び戻すボーリング
足るを知る心の中にある恵み

堺市 奥 時 雄

目が合つて嫌な顔した知らぬ人
猛暑でも手当変らぬガードマン
遠雷に祭り太鼓が乗ってくる
税務署はなんで綱紀をゆるめない
ただ酒のせいで厄介背負い込む

堺市 荻野 像 山

直ぐ落ちる私を誰も口説かない
本当の味はやつぱり一人酒
脱輪に腕の緩みを気付かされ
定年退職大黒柱濡落葉
老い先は見当つかぬケセラセラ

堺市 柿 花 和 夫

踏ん切りがついて家業を継ぐと言う
慶弔も有線にのる漁師町
帰らない覚悟ではげし滝の水
はずみで結婚納得して離婚
他国の不幸を寝転んで見ている

堺市 加 島 由 一

十六のころろわくわく古希愉快
来し方に浸る独りの花火の夜
息子の嫁はあの娘がいいなギャル神輿
落ち武者が飛び込んできた終電車
風鈴の声銀河から木霊する

堺市 栗 原 道 夫

寝転べば畳の縁も夏休み
爪を切りながらまじめな話する
イヤホンガイドがずつしり重い展示室
金魚すくいをじつと見ている妹よ
水族館のクラゲに癒される父か

堺市 源 田 八 千 代

薫風師に共感しきり島一つ
春夏秋冬古語になりそう近未来
ゲリラ雨と酷暑地球の憤怒かも
白粉花もハイビスカスもバイタリティー
夏ばてをせんよう祈る尉と姥

堺市 齋 藤 さくら

坊さんのお経がいつもより早い
夫より長生きしそう歯が丈夫
三食を美味しく食べるだけ元氣
暑いですなあと挨拶すぐ終わり
誘われて暑さしのぎの映画館

堺市 遠山唯教

心配してくれる子供に意地を張る
勿体ないと旅に生活感が出る
体力のカバー制球力でする
活性化すると乱雑になる部屋
病む友が増えて気になるこの猛暑

堺市 内藤憲彦

かあちゃんの気持が匂う栗ごはん
いつまでも若くはないがチャレンジャー
歳重ねゆつくり歩く夫婦傘
オブラート一枚かけて本音言う
姑に文句言いつつ味つなぐ

堺市 西村りつえ

夏疲れ母の体質そのままに
しずしずと秋には上がる消費税
前向きな空想楽し待ち合わせ
好き嫌い言わぬ夫で箸つけず
いやな夏でもまだ生きる欲深さ

堺市 村上玄也

木にしがみつくように蟬の抜け殻
火傷せぬ位置で成り行き見定める
怒らせて本音吐かせる術もある
ストレスをためては爪を噛んでいる
煎じ薬飲んでるような下戸の酒

堺市 矢倉五月

空腹は料理のベスト調味料
当てにされ任せ徹夜してしまう
カルピスを無口になった孫と飲む
天辺で静かにはずすサンGLラス
今日一日またおしやべりができました

大阪狭山市 矢野梓

古里を届けてくれる甲子園
国訛ひびくアルプス甲子園
虎勝った日だけ夫婦の会話増え
年毎にお盆親しくなってくる
柔らかいタオル選ってる老いの風呂

泉佐野市 山本蛙城

十月入社会計年度も変えようか
十月の満月に子と手を伸ばす
馬肥ゆる秋には無駄なダイエット
月影に命限りの虫が啼く
赤い羽根塵も積もるという話

和泉市 横山捷也

マスクした看護師美人のはずである
言い負ける事にも慣れて早い床
針千本飲まそう遊びに來ない孫
老い二人日が陰ってから動き出す
夢いくつ捨てて後期高齢者

茨木市 島田 誠一

五十年扇の要今も妻

開襟のシャツに扇子がなつかしい

道つけた先代の遺志担う汗

一票に脱原発を担わせる

手際良い姑へ嫁の車間距離

茨木市 藤井 正雄

洗顔だけで化粧になっっている若さ

すっぱんに遍歴がある深い皺

母さんの小さい下駄履く里の庭

古き良き時代時どき出す写真

父の遺志どおりに海の見える墓

交野市 森本 弘風

八月に思うことあり暑い汗

石垣で機銃掃射を避けた夏

バラックで夜空の花火焼夷弾

戦争で全て諦め負けました

戦争を知らない子らの防衛論

河内長野市 植村 喜代

ふと思う戦時中に焼けた物

どうしてか人の寄る方に行きたがる

冷や汗出て一人朝まで考える

孫や子に送られ集まるクラス会

この電話足の変りもしてくれる

河内長野市 梶原 弘光

暑氣払い早くしないと夏閉まる

例の場所を通じる友の希少価値

強化ガラスにしました心挫けぬよう

リーダーシップ茨の道に鍵がある

定年日以来の靴とナンバまで

河内長野市 木見谷 孝代

書いて消し芯も言葉も丸くなる

椅子に身を投げてぐったりする猛暑

この土地の色に染まって輪になじむ

温暖化ゲリラ豪雨が渇水か

大皿を囲みわいわい国訛り

河内長野市 黒岩 靖博

八十路の初夏ギネスを替えたエベレスト

血糖値同じ食事で高い妻

はよう茂れゴーヤよ陽射し攻めて来る

嘘千回言えば真実摩訶不思議

欲を捨て幸せですと今感謝

河内長野市 坂上 淳司

ゲリラ雨に酷暑日本は亜熱帯

被災地も容赦はしないゲリラ雨

作付けの変更迫る四十度

品薄の鰻が詫びている土用

汚染水想定外とは言わせない

河内長野市 谷 久美子

過ぎ去れば脱原発も力無く
エンピツのメモ書き義母のありがとう
とんがった鉛筆妥協無く折れる
火種乗せ地球が乾く多事多難
自分流朱に混じっても白通す

河内長野市 松岡 篤

炎天下庭で君臨するとかげ
太るのは一日痩せるのに十日
物捜す時間よ減れと自己嫌悪
まな板の音に代わってチンの音
心からお詫びの仕方慣れたもの

河内長野市 水谷 正子

言葉でも背中に通る深い傷
傷心を癒してくれる父母の墓
ポジティブに生きよう米寿祝われる
美しい人汗なんかかきはれへん
駄目虎を応援してる缶ビール

河内長野市 村上 直樹

いつ誰がどこへどうする汚染水
祈りつつ改憲論を真つ二つ
オムレツふわり今日はご機嫌よさそうだ
写経して充たすところの飢え渴き
干からびてもなお天を指す痩せ蛙

河内長野市 山岡 富美子

美しいのもすぐ割れるのも罪である
積んどくがいまに雪崩になる予感
仕掛け花火一期一会を演じ切る
梅干しをサブリメントにして凌ぐ
時間外なのにスマホが呼んでいる

河内長野市 山室 光弘

初盆に帰っておいで逝つた妻
里がえりしたまま妻は戻らない
アベノミクスたしかに賽は投げられた
スツキリとダイエツトして知性出す
ひからびた脳で何とか生きている

岸和田市 岩佐 ダン吉

あこがれの人はいつでも少数派
一直線に生きたし今日も空仰ぐ
直線になると意気地のない私
ありがとう汗がチャンスをくれている
森を出て慎み欠けてきたヒト科

岸和田市 堤 楷代

氷柱をたてて隣で眠りたい
もの想いする暇もなく汗をふき
短パンを愛用してる八十の嫗
太陽が恐くて外に出られない
買物もほどほどにして横になり

岸和田市 森 元 ふみよ

裸族さえ仰天しそううちの夫
暑さ呆け一人に二枚書く見舞
あれやそれこんな調子で今日も暮れ
爺の友孫の自慢をさげて来た
冷蔵庫好きなイクラが大化石

岸和田市 雪 本 珠 子

人情味あつた昭和が遠くなる
蹟いたおかげで見えた青い空
頑固だが人の気持は汲んでいる
万歩計つけて一日家に居る
一病を手懐けながら今日も暮れ

吹田市 太 田 昭

ロボットと背中合わせに寝る猛暑
勝ちどきを聞いてテレビをOFFにする
歳重ね惚けて昨日を折りたたむ
充電の価値に戸惑う誕生日
杖をつき助走の頃を思い出す

吹田市 大 谷 篤 子

ホーホ蛭たしかに父と母の顔
恙なく会の要でいる安堵
棘のある言葉静かに呑み込んだ
転ばぬように石ころばかり目に入る
一心に愛した亡夫にある祈り

吹田市 木 下 敏 子

ゆらゆらと残り火燃やす墨を磨る
ちぐはぐな生き方をして丸く老い
楽しんで百まで生きる足鍛え
地獄耳また雑音をキャッチする
早過ぎる移り変りにまた転び

吹田市 須 磨 活 恵

眠れない体内時計狂ったか
残金ゼロ後は野となれ山となれ
もう何も怖いものなし喜寿の坂
渡る世に情の花が咲くよすが
人込みでハスカイ歩きするスマホ

吹田市 瀬 戸 まさよ

敗戦日蟬大合唱だけ記憶
無人島なぜ採めますの不思議です
過疎地です何もできない盆休み
短か過ぎシニアの批判気も付かず
ビル乱立あああそこです大阪城

吹田市 野 下 之 男

これこそが無理難題よ火災瓶
男性に奮起せよとの文学賞
ベビーまで賭けにされてるおおらかさ
初蟬は遠慮しがちに鳴いている
さすらいで良い事探すあげ羽蝶

吹田市 山 本 希久子

秋のしつぽ見えて風鈴ほつとする

下り坂の景色も捨てたものじゃない

簡単なカタカナ語にもけつまずく

灰汁抜けてきた恥をさらしているうちに

エスカレーター愛どこまでもすれ違う

四條畷市 吉 岡 修

蛸壺で極楽の夢見てたのに

子供の目の高さで見たら丸かった

どこをどうすればハートの揺れ止まる

創業の哲学今もそのまんま

AKBみんなおんなじ顔してる

高石市 浅 野 房 子

寄らば大樹されど雷には弱い

野分き吹く心を癒す術は無い

おわら風の盆なつかしい人あの世

どなたかな庭の雑草抜いてある

メカ音痴分らぬ事に手は出さぬ

高槻市 指 宿 千枝子

盆が来る猛暑酷暑に盆が来る

達筆も乱筆も読みづらいです

日本語を忘れぬように辞書開き

好奇心いっぱいあつてまだ死ぬぬ

お日さまと風と気ままにしています

高槻市 片 山 かずお

年寄りへアベノミクスが牙をむく

愛しい人の名前は美しく響く

赤ちゃんに頬擦りミルク香に咽せる

カロリー計算やつているのにまだ太る

大笑い終われば顔に出た愁い

高槻市 島 田 千鶴子

盆踊り鎮守の森が眠れない

脳回路停止している熱帯夜

背伸びする事を忘れてから老いる

瓦礫処理済んで雑草天下取る

歌手の名か曲名なのかややこしい

高槻市 初 代 正 彦

おいそれと弱音吐かぬも妻の意地

この酷暑エコの掛け声何処へやら

まだ若いと一念発起走り出す

ほめ言葉探す苦勞もボケ防止

お値打ち品を凶太く選ぶ歳の功

高槻市 杉 本 義 昭

鉄棒をくるり回れば青い空

ライバルが心の揺れを隠してる

プライドを捨てて余白を埋めに行く

穿つてゐあいつはやはり宇宙人

もちつつじぎのうと違う顔をする

高槻市 左右田 泰雄

囁きの波紋が人を迷わせる
割り切れぬ思いがからむ別れぎわ
平行線水と油のからみ合い
ほお杖をついてぼんやり丸い背な
照れやだが話を外らすのがうまい

高槻市 富田 美義

脳味噌の目減りに気付く老いの日々
竜巻が忘れたヒント置いてゆく
躍り場で時々行く手確かめる
お土産にふんわり乗った嘘一つ
食う前の一瞬が好き水羊羹

高槻市 富田 保子

ポイ捨てのゴミを拾うも気持良し
お土産は買えない旅と言って出る
うす味にすると持ち味生きてくる
いきいきとした日本を夢に見る
ぶぶ漬けにとかく京都の裏表

高槻市 峯村 勲弘

サバテンの花に自分史重ね見る
コンチキン銚の流れにロマン追う
おだやかな海でトラフは出番待つ
下拵え工夫が光る京料理
少しでも広く住もうとピアノ売る

高槻市 安田 忠子

憧れた一人住まいに縁が無く
ひよんな事で不思議なご縁良い仲間
アジア人の塊に会う繁華街
バスツアーグループ毎に大はしやぎ
高一が髭剃り貸して言い出した

豊中市 池田 純子

追いかけて追いかけて孫と夏
宵つ張り遣伝子継いでいるらしい
よかよかとあの人も暖かい
いいお顔撮ってるママもいとお顔
パソコンでお袋の味プロの味

豊中市 江見 見清

ありがとうと言うならデカイ声がいい
太枠だけ埋めればいいと契約書
言い訳はせずに思いつきり涙
一夜干し潮の香りも味とする
病室を出るふつと大きく息を吐く

豊中市 松尾 美智代

頑張るのとはくやしい思いから
調子少しはずすと演歌味が出る
口うるさい夫もだまるオムライス
怠け癖いつか報いがくる恐さ
血液型で性格は決めないで

豊中市 松村 里江

情報を少し流して様子見る

埋み火を燃やすスイッチ入れられる

花束に好き好き好きのメッセージ

いらちだが順番待ちは厳守する

融通の利かぬ人やが別れない

豊中市 水野 黒兎

逆風を味方につける回れ右

古稀過ぎてチャンで呼び合う里がある

もう川に桃の流れぬ過疎の里

ジャカジャカと朝からジャズの蟬時雨

物腰はソフトで芯のある女将

富田林市 片岡 智恵子

出生前検査命の重き課せられる

四半世紀はや平成の走馬灯

小さい嘘ませて打つ手を考える

老いたかな昔話がさえてくる

スカーフでくるむ小さな乱を抱く

富田林市 中井 アキ

泥かぶる覚悟と知ったのは後日

シナリオに逆らいながら貫いた

耳朶の奥万歳三唱幽かなり

ほほえみを返す節度は持っている

懺悔するほどではないがシュレッター

富田林市 中崎 深雪

早朝から蟬の合唱攻めてくる

焼けた舗道に蟬の骸がコロコロと

耳を澄ませば読経のごとき蟬の声

寒い方がずつとましたどと熱帯夜

五七五ひねってみるも熱帯夜

富田林市 山野 寿之

満たされぬ五欲の器抱いたまま

大福を見ればいつでも五等分

いちにちの手持無沙汰を文庫本

焼酎が旨い息災ありがとう

確約のあしたへ美味しい美味しい酒

寝屋川市 籠島 恵子

過去を問うチャンスはあつたなと思う

お互いにスローテンポを笑いあう

イメージで立てば背筋が伸びている

棚の荷を整理娘に気付かれる

顎が出る心の隙をついて出る

寝屋川市 富山 ルイ子

暑さに負け携帯休む一ヶ月

家族旅行タイミングよく利子取れる

三十種を食べる癌にならぬため

四畳半に一日座るよい身分

三度の食事掃除洗濯お殿様

平松 かすみ

内緒です点滴引いてお手洗い

点滴九日病人になりました

相部屋の三婆不思議顔見知り

点滴が無ければ快適な暑中

ポリープを見付けてくれて気が重い

森 茜

果てしなく望めば人間見失なう

音たてて歩いて行つた淋しい背

麦秋は明るく寂しさをまとう

北の窓開けるとなだれこむ夕陽

ひとりごととぼとぼと花びらの滴

山本 三郎

同着のゴール判定待つ長さ

手をつなぎ一番ピリでゴールイン

ぐつと耐え野心は出番待っている

顔見知り犬が尻尾を振って吠え

ちらしでは安い玉子を皿にし

宇都宮 ちづる

クーラーの部屋で無口の老い二人

氷柱をハグして寝たい熱帯夜

墓参り熱中症になる掃除

クーラーの部屋で作句が夢の中

お隣の工事で窓を閉める夏

徳山 みつこ

野菜高庭の胡瓜よありがとう

いただきますの私はきつといい顔だ

選挙戦不法侵入するマイク

落ちつけば私の遺書も更新だ

おがらたかずとも亡夫はまだ家に

永田 章司

盆の入り酷暑で延期墓参り

断捨離の苦手のふたり戦中派

浴衣には団扇の風が良く似合う

アベノミクス家計の色を赤く染め

生きるには中途半端も時に良い

三好 専平

よく噛んで食べるとまづいものはない

再稼働の見込みはないと脳が拗ね

サスペンス殺す動機をみんな持ち

南極にホテル建てたい旅ブーム

奇跡です八十年も生きています

吉村 久仁雄

同行二人夜は独りの酒がしい

大時化に妻の港に逃げ帰る

利己心が爆ぜる元気もない猛暑

学ぶほど無知蒙昧の僕がいる

耐震検査ビビリの僕を見透かされ

東大阪市 笠井欣子

盆法事にぎやかでしたネ仏様
墓参りすませ冷えてるレストラン
盆法会心の引き出し一つ増え
故郷を忍び亡夫の生家まで
生きること大事にしよう後少し

東大阪市 北村賢子

以心伝心案じてた野良会いに来る
胎児包むころゆとりのマタニティー
鹿威しある豪邸で焼くめざし
一杯の酒強化ガラスになるハート
身の丈をゆうゆう生きたデスマスク

東大阪市 佐々木満作

物入りであるがただいま三世帯
年金の目減りに追撃ちの苛税
戸惑いを隠せぬ突然の告知
終電車頭を垂れている平和
罪ひとつワイングラスに封じ込む

東大阪市 米田水昇

青空にひょうたんゆれる院の庭
濃紫ブーゲンビリアにとげのあり
同じこと何度もくり返すホームの人
この地球津波洪水どうなるの
原爆忌思いは深く胸を打つ

枚方市 安達忠央

腹決めて押す連帯の保証印
どこまでの無理をするかのさじ加減
本降りとかんかん照りの梅雨だった
この辺で空気を読んで妥協する
生い立ちを聞いてまわりが暖かい

枚方市 海老池洋

蟬ほどに叫んでみたい日の孤独
充電の時間をくれた長い雨
腕時計も暇持て余す定年後
生き様を残す亡父の道具箱
剥製のトラも千里を駆けたから

枚方市 小林わこ

心のままに動いたハンドル油切れ
母の手のじつとしている時はなく
動きまわる子らを追っかけてきた夏
日傘くるくるそんな風情はない猛暑
少女時は一瞬もはや蛍の灯

枚方市 丹後屋肇

要支援ヘルパーさんの煮転がし
黒髪に活けて置きたい薔薇の花
月光仮面力キ氷屋で順を待つ
愛情と好意きつちり区別する
アウトレット孫より派手な色を買う

枚方市 二宮 紫鳳

打ち水に涼を求めて友來たる
幸せの時が流れるうちわ風
浴衣袖ぬらして孫の金魚つり
朝顔が咲いて隣が近くなり
夏バテも夏やせもなく老い二人

枚方市 二宮 山久

真白なチラシをうめて作句する
ライバルの溢れる闘志やる気出る
幸せを人に見せたいスリガラス
趣味多才老後ゆうゆう生きている
ジョークではすませぬ話に腰をすえ

藤井寺市 伊藤 アヤ子

赤とんぼもう飛んでいる甲子園
あの丘を越えれば亡母の墓がある
毎日の猛暑続きで草臥れる
喜ぶ顔が見たいからジジとババ
転んだら起きれないのが私です

藤井寺市 太田 扶美代

キューリ刻む音まだ現役のリズム
蛭籠兄は想い出だけとなる
順番をずうっと待っている蕾
暑中葉書にお礼とお詫びエトセトラ
今が華今が華だと老いがきた

藤井寺市 鈴木 いさお

頑固ですがわからず屋ではありません
八十になっても献血はしたい
どの街に骨埋めようか根なし草
全てを任せ妻の後からついてゆく
プロポーズ軽い眩暈の中で聞く

藤井寺市 高田 美代子

夏を越すただそれだけヘドツコイショ
負け戦ころに戦火いまもある
三百日程を軋んで生きている
何処までもヒト科でいたいから努力
オスブレイに八尾飛行場小さ過ぎ

藤井寺市 津田 シルク

汚い空気なぜに吸いにくバスポート
オスブレイ折紙の顔して飛來
亡夫の化身猫がセールス追い払う
良い汗でした久方ぶりの大掃除
仲よくするコツを覚えた我が病

藤井寺市 増井 ヨシ枝

空家でも父母の想い出たんとある
ご近所に済みませんねと蟬時雨
手の平で羽化した揚羽飛び立たぬ
赤トンボ一匹みつけ小さな秋
家族葬地区の会館ギブアップ

藤井寺市 俣野 登志子

寡黙な夫喋り出したらエンドレス
新鮮な風孫がときどき連れてくる
バラの棘ほどの刺激があり元氣
あの人と組めば諍い起こしそう
氣取る人居ない仲間で盛り上がり

藤井寺市 吉田 喜代子

キッチン窓におはようゴーヤの芽
恵みの雨も神の怒りか恐ろしい
夏山の思い出多い友も逝き
老いるなど田沢湖前の笑い顔
山海恋う墓も無くなり遠い里

藤井寺市 若松 雅枝

深閑と祖父母が眠る山の寺
盆供養都会の孫は珍らしげ
百日紅庭園墓地の片隅に
休肝日とや欲しい一口我慢する
お土産が重なり甘い物ばかり

松原市 森松 まつお

あほらしい世界記録もあるギネス
ステテコは白でチヂミが正統派
駄菓子屋があると覗いてみたくなる
体調の良いのは年に二三回
はしゃぎ過ぎ妻とカラオケ三時間

箕面市 酒井 紀華

姫かがみ魔女のわたしを知っている
祖父の巻いた柱時計がまだ動く
ピノキオが歩き始めた世界地図
姫人形抱いてわたしは母になる
私の過去水に流せる程度です

箕面市 出口 セツ子

親から子風邪の絆は要りません
子のわがまま聞きたい元氣ないよりは
子が医者に行く気になったら盆休み
結婚をせぬ子に未来不安です
薄情だな涙が出ない一周忌

守口市 井上 桂作

七夕に一人歩きを今年また
アジサイも紫色で終りつけ
梅雨終る荒れずに済んでありがとう
だるいのは心のゆるみと思うこと
アベイズム参院選に勝利する

八尾市 内海 幸生

仏像に答貰えぬ出直すか
好物を忘れぬ友がいてくれる
心臓はえらい八十余年無休だよ
色即是空妻亡くなつてそう思う
地球自転笑顔でいれば明日がくる

八尾市 高杉千歩

デイスーパービス実年齢は内緒です
五欲捨てても猛暑に敵わない
送り火に来年もとはいひそびれ
祇園さん天神さんも寝転んで
敗戦忌日本中が灼熱化

八尾市 寺川はじむ

国防軍見慣れ言い慣れる怖さ
円安に株高弱者見てるだけ
地に戻るもう間近だと蟬時雨
菜園に今日も腹据え蚊が見舞う
てきぱきと仕上げ美顔が駅降りる

八尾市 宮崎シマ子

幸せ度星を眺める露天風呂
背く子が幸せならばそれでよし
私流に老いの才覚決めてある
スイッチオン私の足が動かない
蝶番少し振れてまだ夫婦

八尾市 村上ミツ子

起立して黙祷八時十五分
財布が戻る世の中捨てたものじゃない
びつたりのジョークに窮地救われる
鍵穴の向こうに見える小宇宙
自然体がいいとわかつてはいても

大阪府 桑田ゆきの

木下闇羅漢百態苔を着る
経験の浅い草刈りまんだらに
端居してつくづく偲ぶ父の事
通夜の座へ纏う火蛾追う黙の刻
ばつくりと逝きたく心を磨きおり

大阪府 野田栄呼

ていねいに庭の草ひく律儀者
音立てて時間過ぎゆくはぐれ鳥
定命と言えどもわが息子想う星
八十が少女に戻る同期会
悔やんでもひと日は同じ笑いましょ

大阪府 初山隆盛

地藏盆子供めつきり消えている
老いひとり鏡に今朝の窓ひらく
きく耳を持つているから選んことは
ケイタイもスマホも持たず楽に生き
自然破壊神のしつぺがきつとくる

大阪府 米澤俣子

ときめきが失せた時から色褪せる
少しづつ慢心洗いつつ老いる
自分への褒美セールで買う指輪
ひと呼吸おいて生き抜く処世術
十秒切るぞと高校生ピンク

神戸市 木村 貴代子

正義とは遠い国家のありようよ
淡い顔一度は見せて買つてやる
もめ出してジュースの水溶けおわる
遠くから軍靴のひびきほの聞こえ
渋々として来たのが大はしやぎ

神戸市 白川 淑子

盆三日日本地図を塗り替える
蟬しぐれこの地に移り早起きに
困つたな長生きしそう金が無い
思ひ出はいつもモノクロ黒電話
すつからかん奇数月にも年金を

神戸市 山口 光久

どつしりと構え相手の風を読む
泥舟に乗れば覚悟は動かない
流れ作業人の都合は考えず
お日さまの恵みは差別などしない
正論がなぜか賛同得られない

神戸市 山口 美穂

円高に脅かされている財布
原発へ抗議の声を蝉も上げ
褒め上手その手の上で転がされ
お天道さま恨むでないがこの暑さ
地の人にこの路の下川ときき

神戸市 山崎 武彦

いい汗を流して光る子の明日
先頭に立たぬ男の処世術
ガラス窓丸あるく拭いて生きている
乗り継いで乗り継いで知る終の駅
ガラス越しだけに終つた僕の春

相生市 中塚 礎石

休止符をどこで打とうか八十路坂
古里は杓で一口井戸の水
ご先祖が驚いている黄砂拭く
極楽へ一円玉で命請う
古希米寿だんだん歩幅狭くなり

明石市 糀谷 和郎

老いてなお心のバネは錆びてない
時どきは本音を吐いて軽くする
道を這う影もさぞかし暑からう
待つことに慣れて時間を置いてくる
命ある限りを生きて土になる

芦屋市 黒田 能子

対茶碗まだまだ元気朝ご飯
タイミグ外さぬようにお茶を出す
うっかりと捨ててしまったメモの乱
喉もとを同じ注意が通りすぎ
ピツタリだつたはずなのに試着室

芦屋市 竹 山 千賀子

ロッキングチェアで揺れてる亡母の笑み

点字読む友の指先魔法の目

バラが好き優しい君の匂いして

死んでから立派な骨とほめられる

才能と勘違いした運の良さ

尼崎市 市 坪 武 臣

雑踏の流れに添うて観た花火

初孫の這い這い笑みに明日が見え

無茶するなど言えば無茶する反抗期

断捨離へ思い出さえたためらわず

ほんとです若さの秘訣恋心

尼崎市 加 川 靖 鬼

副作用確かに効いてきたらしい

声立てて笑う五感も甦る

邪な心を論すバラの棘

だんだんと靴に似てきた足の裏

人類の謳歌地球が持てあます

尼崎市 軸 丸 勝 己

天無情豪雨一局集中打

これ豪雨ここよこよと呼ぶダム湖

豪雨災害知って台風遠慮する

大合唱過労死の蝉裏返る

図書館の空調見事人を呼ぶ

尼崎市 春 城 年 代

耳よりなはなしに弱い町の角

炎天下人つ子ひとり通らない

キャンプ村輪唱もれて日が沈む

熟れごろの桃滴らせしたたらせ

暑さ呆けで早合点するおばあさん

尼崎市 林 昭 三

新聞も大文字だけの拾い読み

忘れ物自業自得の記憶力

折に触れしみじみ歳を感じてる

天気予報時に外れもそれもまた

電子辞書孫のお古もまだ元気

尼崎市 藤 井 宏 造

ウーロン茶で本音ばんばん言うてはる

横道でかなり使った親の財

一人では何も出来ないいじめっ子

見るだけで幸せまんまるな赤子

ほろ酔って妻と腕組む星月夜

加西市 金 川 宣 子

環状線巡り読み切る推理本

夏休み一筆書いてプチ家出

綿菓子を浴衣の金魚舐めている

静い後夫の知らぬ部屋を持つ

ダイエット気休めだから痩せられず

川西市 西内朋月

お誘いの返事はすぐに出しておく

リサイクル出来ない僕の脳回路

もやもやを納得させている主治医

飽食の世にも餓死する人がある

エアコンが効いてる部屋でする昼寝

川西市 米原雪子

うっかりと約束出来ぬこの暑さ

暑さ負けごろり一日もてあます

てこずったあの子も今は成人に

熱戦の球児見ていて熱くなり

曾孫来たちさな足音ピタピタと

川西市 山口不動

お尻向け足を踏まれる指定席

ライバルの後ろ姿が遠くなり

アベノミクス妻のサイフはゆるまない

発言をすぐに取り消す癖がある

そのツボを押してみなさい流れ出す

三田市 石原歳子

入り目見る時は元気が溢れてる

雷がうだる体に活入れる

ペランダで花火見るとは羨まし

風鈴の音色に猛暑苦にならず

廃線の傍でねじ花美しい

三田市 上垣キヨミ

断捨離の時代の波に流される

呱呱の声瑞穂の国の樹とならん

ケアハウス持て成し受けて下見する

受験生二人で嫁のハツ当り

クーラーの部屋に移って寝てばかり

三田市 尾崎一子

盆参り極上の風逢う仏

無沙汰詫び絆紡いで盆参り

辛い時笑って楽になる上手

うっかりと転ぶと後期狂いだす

蟬時雨六九五に黙祷

三田市 北野哲男

風呂敷の融通無碍が母に似る

土性骨死語になりつつある平和

生き様を称える弔辞宙に舞う

公園は太極拳で動き出す

ポスターが美しすぎる観光地

三田市 久保田千代

親切という名に隠すおせっかい

ただそつとそつとしておく思いやり

本気かと覚悟のほどを問う鏡

ひと言が波紋を呼んで愛揺れる

余生とは暗闇の中まだ進む

三田市 田中章子

ひまわりのあつけらかんのオーラ浴び
一年の成長を知る孫の靴

天気予報豪雨の量は当てられぬ
がんこですサブリメントは飲んでない
ラマダンを守る力士のニッポン語

三田市 福田好文

炎天下球児の顔に汗がない
哲学と少し異なる石頭
節節に煙たい人が居てくれる
退職した後の会社の重い門
訃報聞く度に順番繰り上る

三田市 堀正和

ソーメンの白さに惚れる昼の膳
玄関に殺虫剤も置いている
大安を大吟醸で締めくくる
免許返上小さくなった僕の地図
自転車がびったりですな小京都

西宮市 秋元てる

未だ出来る幸せお米二合研ぐ
やりたい事をやり誉められた夢でなく
激変のこの世しつかり見て居よう
生きている旧友を数える古写真
エンディングノートには一行有難う

西宮市 足立茂

お遍路で意味知らんけど般若経
稼いでも呑み屋がみんな持つていく
苦しさをすぐに忘れる二日酔い
鏡見せたらオコゼは何と思うやら
ジリジリと虫が背中を這う焦り

西宮市 緒方美津子

したたかにしたたかに水飲んだ夏
ぬくい手に拾われていた定期入れ
不器用な父が作ってくれた粥
商店街より病院に賑わい
陶芸家の裏に骨壺干してあり

西宮市 片山忠

沈黙考私に落度ありません
人間不信スタンダールに魅せられて
ライバルが居るのは生きている証拠
新婚時代と同じ理由でする喧嘩
失恋をカレーに混ぜて食べました

西宮市 亀岡哲子

つまづいた石も暑かる痛からう
血流も少し淀んで午後三時
遠くからひよっこりやって来た記憶
お答えがまともで絶句してしまふ
ホイホイと老いのバランス整える

西宮市 牧 淵 富喜子

のら猫も顔を出さない極暑かな
問えば「普通」どうでもいいと言う響き
負けん気がちよつと笑顔をそえてゆく
暮し方いま更変えぬ憐すする
暴れ出す自然に畏れ持つている

西宮市 山 本 義 子

窓全開微罪はばいと放りだす
向かいの窓ちよこつと推理あそびする
窓は鍵 要塞にして睡ります
さわやかな窓派手目のベスト吊つておく
高層ビルの窓明りふと嫉妬する

西脇市 七反田 順 子

名水を汲むのも犬が同伴する
クッキングレンジ集めて夏野菜
スイカ好き熱中症に備えてる
ばあちゃんに内緒話は出来ません
趣味だから夫は陶芸夢中症

姫路市 古 川 奮 水

心太ひんやり呉れた午後三時
スカイツリージグザグ待つて疲れ果て
砂遊び風紋に化す夜の風
骨董を磨いて値打ち下げられた
花火する庭の明かりを消してやる

奈良市 阿 部 紀 子

老醜を晒す女優の凄さ見る
立ち話忘れて困る愚痴ばかり
寿命あり大学院へ行き直す
亡き友とコーヒー飲んだ同じ席
柔和な顔心見透かす鋭い目

奈良市 岩 本 浩 二

煩惱をみんな捨てたら枯れすすき
何事も右に做えて楽に生き
暮らし向きみんな同じという安堵
釣り髭の祖父が睨んでいる茶の間
棘のある視線に耐えて猪口重ね

奈良市 加 門 萌 子

人間はおろおろ自然前にして
猛暑にも暑中見舞いを出さず来ず
花火には幼い恋の走馬灯
熱砂にも負けぬ若者新記録
小さくても先祖伝来祭り良し

奈良市 辻内 げんえい

ネットでのオークションでも目が肥える
エステより家の掃除と言えぬ僕
PK戦ばくに回さず決めてくれ
楽しいこと一杯あるぞと孫誘う
猛暑日の記録途切れて皆ホッと

奈良市 米田恭昌

輪廻転生地に還りたく椿落ち
デスマスク感謝の笑顔忘れな
婚活の今合コンという見合い
北梅田今浦島が連れおうて
年寄りには置いとけ放りの北梅田

生駒市 飛永ふりこ

棚引いた恋がたゆたう大文字
二代目の尾藤スマイル熱を帯び
夏の陽に花の清楚なまぶしさよ
アドバイスが透けるやじうまの御法度
無花果のケーキとろけます疲れ

香芝市 大内朝子

夕焼けを飛んで来たのね赤とんぼ
ときめきが老いの流れを堰止める
夢いっぱい抱いた昭和が懐かしい
流れから取り残される老い河童
防空壕の土の匂いがまだ残る

奈良県 中原比呂志

天気図に日本列島真っ赤
十字架に合掌長崎夏の鐘
審判になったつもりテレビ前
螺旋階段まだ展望は開けない
占いが見事はずれた生命線

奈良県 渡辺富子

再会の言葉涙を抱いている
洗いざらい話すと蟬が鳴いていた
流れからそれでぷかりと浮くわたし
君恋えば波音高くなるばかり
いつの間にか老いの樹海へ迷い込む

和歌山市 牛尾緑良

朝顔の涼しさ活ける仏の間
ナ行から友の名ひとり消えました
人間の羽化待つ二十一世紀
少子化へひとりの孫を慈しむ
蜩のおしゃべり 手紙書こうかな

和歌山市 上田紀子

残照へ弱い女の殻を脱ぐ
スランプ中頭の中は白い霧
身の程を知らない鬼を飼ひ馴らす
人生の仕上げの色を模索中
飲み込んだ言葉を溶かす熱帯夜

和歌山市 柏原夕胡

まだ道は続く生き抜く道である
笑ったら楽しくなるんだねきつと
パッチリのお目で嘘がすぐバレる
ほろ酔いの梅酒さびしさ薄くする
閉ざされた心にパーを出してみる

和歌山市 喜田 准一

策のないやる気ばかりの前のめり
世渡りに苦勞はしないその笑顔
言い過ぎと言葉足らずを繰り返す
宮仕えお手々つないで皆我慢
回し読み大事な個所に線を引く

和歌山市 木本 朱夏

南向きのトイレで今日を組み立てる
老いというかたちで足の爪を切る
日傘畳んで何もなかったことにして
指輪はずして今日の締め解き放つ
猛暑酷暑炎暑ガラスの馬割れる

和歌山市 楠見 章子

赤ペンで先ずチェックするテレビ欄
遊園地ボールで遊ぶところも無く
もやしっ子意外に強い指相撲
ほっこりと暮らしてみたい低い屋根
紅さしてわたしを少し華やかに

和歌山市 坂部 紀久子

一歩出る勇氣言葉を扱っている
ほっとするためのコーヒー甘くする
遅くなると知らせる人もなく家路
その他多勢中の自分が許せない
役職がお膳挿むと立つ煙

和歌山市 玉置 当代

口あけて笑顔になつて見る花火
主いない庭に今年もさるすべり
墓参した家族見送る村の風
当日になつてキャンセル来た電話
操られる方が楽だと思ふ日々

和歌山市 武本 碧

プログラム通りにいかぬ第二章
神様のくれた下敷重くなる
おろおろと拉致の子を待つ常夜灯
どたばたの果てにころりと妥協案
この道と決めてあなたのコマになる

和歌山市 土屋 起世子

ステテコは白と信じていた昭和
色褪せた歳にはさせぬヘアカラー
ゆつくりとお茶で小言を飲み下す
褒め言葉一つで縫れ解けてきた
朝の光りいっぱい吸って軽くなる

和歌山市 福井 菜摘

矛先をやりわり躲す苦勞人
やんわりと言えば本音が伝わらず
響き合う人があるから頑張れる
スイッチを切つて静かな午後にする
マニュアルはないおおらかに子を育て

和歌山市 福本英子

先送りしていた罰に会う猛暑

飛べそうにないから回る水たまり

私より若いお方に譲る席

猛暑でも亡夫に逢える墓洗う

家宝出る金比羅宮の渋うちわ

和歌山市 古久保和子

夜店の灯ひよこが一羽売れました

ばあちゃんちいつでも西瓜冷えている

清流に晒す都会の足の裏

お豆腐の角が崩れる絶不調

尾骶骨からべつたり座る弱い鬼

和歌山市 堀富美子

臆病風喫水線で立ち止まる

カルテ視る医者 of 無言の胸騒ぎ

緩むのは半端でないと狼狽える

能天気右脳の捻子を締め直す

急がねば方程式の謎解けぬ

和歌山市 松尾和香

招かれて曾孫を抱いた嬉しい日

漁火に旅の疲れが癒やされる

パソコンもスマホも知らぬ辞書を引く

五線紙をはみ出す声に生かされる

蝉の声子らも元気に体操へ

和歌山市 松原寿子

八月十五日たしかに深い闇がある

読み返す便り深爪疼き出す

ときめきの余韻たとう紙開けてなお

懐かしい絵地図も今は変わり果て

波蒼く夕陽にハグをされ猛暑

海南市 小谷小雪

あつばれな夜店の金魚逃げおおす

セメントの割れ目から咲く盆の花

お気軽にとは言われても行きにくい

定位置にそれぞれが居て夜が更ける

水を注ぐと意外と重い紙コップ

海南市 堂上泰女

墓参り父母の声とも蝉しぐれ

フクシマを思えば猛暑など軽い

朝もやひんやり尾瀬の雑魚寝が懐かしい

礼状に鬼百合一つ涼呼ばん

クラス会マドンナだつて未亡人

紀の川市 宇野幹子

人間に戻りたくなり遡上する

二十五時ヒトも金魚も死んだふり

美しい過去が崩れる万華鏡

ポリウムをあげて一人を謳歌する

名案が出るか右脳をかき混ぜる

紀の川市 北山 絹子

半分は隣へ聴かずピアノ買う

内輪揉めしてる隣の大家族

雰囲気に不思議と溶けた石頭

崩れそな心へ鞭を打っている

ちんまりとした庭に個性の四季がある

紀の川市 辻内 次根

後悔として残されているファイル

雑穀を入れて驕りのないように

昼寝するBGMはハワイアン

オイ鼻歌が消えているではないか

野を駆けた頃のしなやかさは何処へ

田辺市 岡本 昇

自分史に自業自得の一ページ

これは無理と決め込んでいる四面楚歌

ゆつくりとアクセル踏んで八十路坂

お早ようで今日の元気を分かち合う

究極のコンビは夫婦だと思ふ

橋本市 石田 隆彦

投票をする側にある気のゆるみ

誕生日肌の温みに囲まれる

思考回路ときどき自動オフになる

生きていく構図時々組み換える

正常値目指す食事と一万歩

鳥取市 有沢 せつ子

クイズ王の広い知識にただ見惚れ

亡き母を和服姿にだぶらせる

正座椅子足に要求されて買う

家が建つ工程裏の土地で見る

体調で軽いシヨルダーしか持てず

鳥取市 池澤 大鯨

この程度で漬されるなら知れたもの

借りて来た目で物見ると新鮮だ

出世の目いくつかあつたらしい過去

黙読の癖を身につけ寡黙なり

目で叱る祖父の目を見ぬ孫の知恵

鳥取市 奥谷 彩子

自作自演仕掛け花火に似て人生

人生も夕暮れ綾取り纏れる

天才も努力努力の跡がある

なすの馬で一時帰宅の亡夫の盆

傘寿坂柵外し坂登る

鳥取市 加藤 茶人

絵に書いた餅を三代目が語る

祭りにも温度差が出る村気質

ダメ元と思つた時に勝負付き

回復の度合いが判る口達者

夫婦仲六法全書では解けぬ

鳥取市 岸 本 孝 子

料理本愛読書だと自慢する

梅干とらっきょ今年も無事クリア

迷ったら梅干入りのにぎりめし

自民庄勝野党に灸をすえただけ

ことのほかいいた汗かいた墓掃除

鳥取市 岸 本 宏 章

出る出ない電話番号見て決める

川蜷の天敵蛭だったとは

重い荷を下ろした肩が寂しがる

舐めるなど活断層が顔を出す

検尿がいちばん似合う紙コップ

鳥取市 倉 益 一 瑤

その握手必ずイエスとは言えぬ

何もかも包んでくれるみどり色

黄昏にやたら爆発したくなり

うつとりと鏡の部屋に迷い込む

弁解はしない無言という秘策

鳥取市 竹 口 清 信

今ここに私が生きている奇跡

明日のこと分らないけど何がある

何があろうと結果が出たらまた奇跡

人生って奇跡で繋ぐドラマかな

どう繋ぐ因果と奇跡考える

鳥取市 土 橋 はるお

天才に敗けない汗をかいている

凄美美人が黙って横に来て座る

西方へ流れる雲にやがて乗る

輪の中に櫓を組んで盆踊り

オスプレイ配備の最中事故とはな

鳥取市 永 原 昌 鼓

まだ少し生きたい夫送るまで

夢追ってまだ八十と四股を踏む

汗腺も籬も緩んだ八十路坂

ピーク時のプライド未だ捨てられず

人の道シナリオ通り歩めない

鳥取市 中 村 金 祥

ひと山を越した自信が栄養剤

宿題を孫につき合いボケは来ぬ

苔むした墓に威厳が住んでいる

手を打った話に尾ヒレついてきた

虹色の涙を流す大往生

鳥取市 夏 目 一 粹

メダカをもらって牛乳ビンで飼う

再会のトカゲが尻尾切られてた

轢かれたカエルに魂見る思い

コインランドリーに人の縮図見る

脳回路部品そろそろ替える頃

鳥取市 西川 和子

新盆に立派な蓮が咲きました
ご先祖の桔梗を盆の供花に添え
老い暮し群のお世話になつてゐる
群にいてパワーを貰うボランティア
あの日から脇を見る間も無いままに

鳥取市 春木 圭一郎

人としてどう生きるかを考える
人間は過去の歴史をつい忘れ
人によりつきあい方を変えていい
正直に自分を見せて生きてゆく
誰だつてダメなところも一つ持つ

鳥取市 平尾 菜美

悪戯はまあまあ辺が潮時ね
ポジティブな心はぐくむ脳が好き
よいとまけ母の涙は汗まじり
血判の覚悟あるから自浄する
だんだんと夕陽に染まる丘の上

鳥取市 福西 茶子

頓知すらすら脳年齢はまだ若い
その目線私ですか犬ですか
見せかけの愛なら乗つて踊ろうか
悪戯をした日は黒い血が流れ
嫁貰い母は二の次それでよい

鳥取市 吉田 孔美子

開発のせいで道路が川になる
梅たんと重石こつそり里川で
脇物の自作野菜を子に送る
読書の芽奪うスマホは夢の味
蟹食べる殻入れ夫に見せられぬ

鳥取市 吉田 弘子

コオログに夜のジョギング急かされる
身障者トイレを借りる緊急時
情報ので海で犬掻きほどの知恵
偶然のいたずら横の指定席
過ぎたれば恵みの水も牙を剥く

鳥取市 両川 無限

過去形の窓が脳裏にうずくまる
砂の城守りひとりの飯を炊く
定年を節にたましい裏返す
ジェラシーの炎を抱いた風一揆
ふところも脳も空っぽです私

倉吉市 猪川 由美子

ツイッターとブログ言い訳ばかりする
拉致被害もう後戻り許されぬ
恋文はやはり手書きがわたし好き
元総理ご乱心かい体たらく
コメや野菜の出来かた知らぬ子が多い

倉吉市 山中康子

孫まごとはしやぎ過ぎるな誕生日
偉大さは昭和生まれが占めている
唸らせる句にあやかりたくて必至
その時は一心でした孫育て
本番へ太刀打ち出来ぬ中にいる

米子市 後藤宏之

長びいたケンカこころで水とする
いつのまに悪いジョークがくせになる
寅さんの財布潤う夏まつり
亡き父と生きてるうちは不愛想
出目金ににらまれハタと気がついた

米子市 後藤美恵子

温暖化豪雨は神の涙かも
天地が人の奢りを戒める
丑の日にニホンウナギは少し食べ
飴なめなめ消費増税叫んでる
新風をおこす要は締めておく

米子市 高田振作

赤鉛筆チェックチェックで一句出来
断捨離をすると仏に見せている
断捨離を子供にまかし逝く準備
生前葬家族会議で否決され
お茶お花始めた娘マジかいな

米子市 竹村紀の治

感謝したい人がみんな遠くなる
手の届く花が大事な花だった
茄子の牛胡瓜の馬と迎え盆
困り事ありませんかと酒が訊く
水一杯飲んで言い訳考える

米子市 中原章子

趣味目覚め頭の中は燃えている
没の句は潔よく捨て未練ない
義歯になり計算外のことばかり
法要に訛りも混じる法話聞く
ひっそりと仲睦まじく折り畳む

米子市 成田雨奇

トタン打つ雨でラジオが聞こえない
チャイム鳴りあわててシャツを探す妻
背の肉を取らぬと買えぬ妻のブラ
熱中症予防冷たいビール飲む
主義もなく思想もなくて気楽人

鳥取県 石谷美恵子

金と暇なかったピーク愛が満ち
過去のひと女々しく抱いている財布
錯覚でないホラ花びらの数も合う
がむしやらに生き可愛い妻になり損ね
最後の一手胸三寸の奥で決め

鳥取県 岩崎和子

キッチンに立つたびTシャツ取り換える

昼食にカレーライスで暑氣払い

ありがたい入浴できる夫と居る

北国の九十二歳姉の声

何となく涼しさ貰う電話口

鳥取県 鳥越鬼一

怖いもの地震・原発・熱中症

棚経の僧にせめても団扇風

甲子園地元が負けて夏終わる

首長さん5選なんぞとそりや欲な

盆過ぎりや少しは風も立つだろう

鳥取県 西谷悦子

独楽ひとつ自分流にて回ってる

たましいの乾き笑顔で潤そう

愛想ない言葉の中にある温み

ていねいに明日見る眼鏡拭いている

自画像の中にちよこちよこ母がいる

鳥取県 松川行男

浪曲は流れないけど昼の蝉

国防と聞いてどれだけ奮起する

大東亜地球儀回せば夢が飛ぶ

保険切れ八十歳の幕開いたまま

アベノミクス昭和生まれがまだしきる

鳥取県 山下節子

いじめてもいじめられても鬱になる

仏像の前自問自答をくり返す

一日を話す相手のある至福

ふる里を思い出させるBグルメ

気に入らぬ話ぼんやり聞いている

鳥取県 山本正光

ストレスも我慢と忍の気で生きる

天上の亡妻から夢で電話来た

分譲地安いが藪蚊蜂も居る

選挙戦口先上手嘘上手

冷酒なら飲む気になれるこの猛暑

松江市 石橋芳山

曇天の町はまーるくなるのです

何年の命か溶けてゆく氷柱

空想の後に虚しく見る結露

つれづれに夜を潜って飾り窓

気付かれぬように狂ってくる時計

松江市 小川注湖

女房が違反と責める千鳥足

ツアーバス好み同じかまた一緒

振り向けば五合目まではバス登山

尖閣に赤地の旗がなびく船

昭和史読む軍靴の音を偲びます

松江市 川 本 畔

飛行機の中でカタログショッピング
話すこと何にもなくてカリントウ
暑かった夏が終つて風になる
サンマを二匹裏返しては菜を洗う
枝豆とビールと夫 夏の果て

松江市 錦 織 禮 子

桐の下駄素足に涼し夏祭り
境内でやつと見つけた金魚売り
茹で蟹は本望ですと涙する
失った持続力サブリも効かぬ
渋滞の穴道湖通り湖静か

松江市 松 本 知恵子

足音を待つて金魚に日が暮れる
にぎり水時々光射して来る
泡いっぱい孫とお風呂で蟹になる
食欲を奪う太陽ぎらぎらだ
奪い合うドンの椅子くるくる変わる

松江市 松 本文子

思い出の遠くに灯る秋祭り
岩木山八甲田山の白い雪
年寄りも政治の話泡とぼす
今から習うフラダンスは無理ですか
古傷にイエローカードまた貼られ

松江市 三 島 淞 丘

方円に従う水にまだ成れぬ
はらわたまで見せて決着まだ付かぬ
水を飲む明日の命が枯れぬよう
身の程を弁えなさいジャンプ傘
人はみな触れてはならぬ傷を持つ

出雲市 伊 藤 玲 子

灰汁少し抜いて楽しく群れて飛ぶ
びしょびしょの汗が語っている本気
夏瘦せに開いてくれぬ自動ドア
留守番をたのんだ金魚昼寝中
へっこんだ心平らにしたメール

出雲市 小 白 金 房 子

盆近く黒かわとんぼ来て座る
仏壇の花にも四季の詩がある
仏心を授かる法話灯に座る
石段の手摺を頼る母の寺
ふる里の風が待つて秋彼岸

出雲市 岸 桂 子

針の穴わたしの自信通さない
喪の家に矢印があり行きやすい
もう二度と白には戻れないページ
鍵かけた筈の噂がもれている
ひと呼吸置くわたくしの処世術

出雲市 多久和 敬子

どうしてもこつちを向いてくれぬ人
ストレスが溜まると足がふる里へ
競ったが私の方が金持ちだ
学ぶことまだまだあるが良く眠る
孫が来たそろそろ二人仲直り

出雲市 竹 治 ちかし

カナ文字を使い本道からはずれ
何回も泣いて大人にしてくれる
欲のない顔で大きな方を取る
身の丈の暮らしに妥協して生きる
想定という化物に病む世間

島根県 伊 藤 寿 美

老人ばかり残った舟を漕いでいる
後列の知ったか振りを聞いている
わたしの夢がオーバーランをしてしまう
ポケットの中で握っている拳
残照へ象は群から出ていった

美作市 大石 あすなろ

二枚目の舌がおしゃべりして困る
矢印の間にあつた回り道
雑草は踏まれても尚風に立つ
思い出のホテルで昨日とり戻す
ひとつまみ塩を効かしたアドバイス

広島市 岸 本 清

匿名にすると真相が見えてくる
善し悪しをそれぞれ持つて仲間達
膝の用心安らぐ読み聞かせ
止めるのは今でしょ原発再稼働
禁酒日は蛻の殻と紙一重

竹原市 石 原 淑 子

甘酒に氷浮かべて暑氣払い
言い分はあるがひとまず聴いておく
ストローの穴からのぞく幸不幸
夏休み孫に塗られた時間割
海プール猛暑も嬉し孫の夏

竹原市 岩 本 笑 子

一歩でも前に行きたし遠花火
熱帯夜忘れたこと多すぎる
富士山に登りたいなと思う夏
病人になりたくなくて今日歩く
毎日の薬を選つて日が暮れる

府中市 藤 岡 ヒデコ

食後飲む薬に箸は促され
猛暑との力比べも限界に
メモ書きの日記で辿るもどかしさ
思い出の中のいい事だけ探す
試練などもういいのです七十九

宇部市 平田実男

ちよい悪の美人男の骨を抜く
謝罪席頭を下げて舌を出す
違反した人を喜ぶネズミ捕り
プロポーズ指輪も愛も模造品
箱入りが未婚の母となる不思議

東かがわ市 川崎ひかり

大部屋で学ぶ世間の裏表
晩学の前へ進まぬ物忘れ
転んでも起きる学びを身が覚え
七十路坂これからですよ夢ロード
御心に全て委ねた無影灯

松山市 古手川光

その日まで声振り絞る蝉しぐれ
てきばきと出来なくなつて冬に入る
政治家の一言国民はがっかり
人生とはロイヤルベビー マララちゃん
ハッピーエンドさわやかなデスマスク

松山市 宮尾みのり

向う気の強い翌日ウツに入る
ポロポロと落ちた本音が拾えない
ポロポロになった体がいとしくて
ABCに囲まれていた華の頃
十人十色私は投書などしない

大洲市 中居善信

痛む膝八十キロを支えてる
走りすぎる男で長く続くまい
BSで聴く日本の古い歌
墓掃除こも田舎を捨てた墓
還暦を過ぎると女動かない

西予市 黒田茂代

起きてまず花の機嫌を見て回る
無花果の存在感を乗せて風
月一度の登山に凝つて杖リュック
音楽の本から消えた「赤とんぼ」
やがて日本の野山は葛に覆われる

高知県 小澤幸泉

父と娘と母と息子の無言旅
沈黙の歴史を語る夏木立
八月の海は戦を知り尽す
招魂の涙をかわす夏の空(義弟初盆 2句)
Xの式解けぬまま夏煙り

唐津市 坂本蜂朗

秒読みの声が聞こえる喜寿になる
立ち上がる妻へよいしよと声をかけ
寝たきりの母を励ます涙声
素晴らしい弔辞に拍手したくなる
質問をすれば止まらぬ郷土史家

唐津市 山口 高明

護摩たけば煩悩こがす浄化の火

靖国が待つていますよ自衛官

仏壇の亡母とつながる糸電話

我が家では妻が上戸で僕は下戸

出張費までも取られる修理代

熊本市 永田 俊子

口が乾く私は古いボールペン

川柳がやめられぬ水少し湧けば

平均寿命の文字が痛い長寿

鏡の奥で別の私を遊ばせる

遺言書私は裸になりました

熊本県 岩切 康子

鍛えれば元気になると信じてる

旅ならば別な勢い湧いてくる

掌に硬貨広げてレジ任せ

打ち加減した蚊に掌から逃げられる

ゴミ収集持ち込み曜日確める

熊本県 高野 宵草

妻病んで伸び伸び育つ庭の雑草

絵を画いて祖母に教えるカタカナ語

救われた命四十年目の感謝

真心で叱ってくれる親友を持つ

叱られに行こう失礼した慚愧

札幌市 小沢 淳

歪んだ世だから僕でも生きています

骨拾うことを互いに譲り合い

脱皮するたびに仮面がずり落ちる

反骨のある人間の頼りがい

ねぶたにねぶた いわく霜石さんに聞こ

札幌市 三浦 強一

増税に貧乏神も青くなる

赤を着て老いばれなどと言わせない

転倒に脅かされる骨密度

竿先をじつと睨んだ無我の境

背後から人差指に狙われる

黒石市 相馬 一花

堅物が好きでたまらぬ逆さ富士

のんびりと生きてごらんようつの人

混浴に招かれて行く足湯かな

美食して天国行きの列にいる

化粧してまだら模様の美女になる

平川市 小寺 花峯

いつまでも軍手が白く笑う種

勝ち組も負け組もない蟻の列

たんぽぽが咲いているから近道だ

お隣の夕餉を食べる鼻がある

後期高齢カルテの数を自慢する

弘前市 稻見則彦

半解凍された言葉が喉を刺す
ひと降りの単位はバケツゲリラ雨
軸足にはやる心を覚られる
軸足が踏み出す一歩引き止める
したたかに生きよと足の裏が言う

弘前市 岡本花匠

朝顔のそれぞれ個性笑つて
ご先祖に御無沙汰謝して七日盆
永らえて二人三脚法話聴く
梅干しは我が家の宝津軽味
米寿坂へ夢を続ける万歩計

弘前市 今愁女

立秋のはぎまで梅雨が明けたという
短い夏ねぶたねぶたは跳ね叫ぶ
旅行用カメラになったケータイ器
絵展招待くれたお方が訃報欄
新幹線上野の森へ日帰り

弘前市 須郷井蛙

爺ちゃんは杖を忘れて来る元氣
亀の背で最後行きたいところがある
旅カバン小さくていい夏帽子
紙コップ俺に似ている弱い腰
原点にたつて定年組み立てる

弘前市 高瀬霜石

東京を逸れた台風無視される
先送り得意だばくも政治家も
風向きが変わると首が寒くなる
五線符をはみ出す父の子守り歌
眞実はコップの底に沈んでる

弘前市 高橋洋子

旅疲れ二日も経つて出る加齢
シニア塾笑う幸せ服らませ
不器用で夢も描けずに生きて老い
西暦で年聞かれてもピンと来ぬ
墓参り今年もできてヨシとする

弘前市 福士慕情

知らぬ子にアイサツ受ける通学路
伸び盛り回転寿しの皿の数
平均寿命伸びて老後が怖くなる
葉の裏で爪を立ててる蟬の殻
冷蔵庫夜通し愚痴を吐いている

青森県 松山芳生

散り際を友情の輪で咲かせたい
及第点が雲の上から顔を出す
幸せ過ぎたのか攻めてくる毛虫
ゆつくりでいいよ今を渡される
命つてこんな大きな声でする

(前月分) 熊本県 岩切康子

病名にタブンを付ける町の医者
裏口に漬けよとばかり泥ラッキョ

納涼に新作能の二人席

梅漬を止めたら紫蘇がよく育ち

ダビングに愛犬の声入つてた

(前月分) 鳥取県 竹信照彦

熱中症いまだかかつていないだけ

脳血管詰まらぬように予防薬

健診に耐える体力つけておく

夏山を見るたび元氣だなと思う

晩酌がうまい明日もよい天気

(前月分) 八尾市 寺川はじむ

微笑みの富士が演じる四季の顔

ときどきはへそくりの場所確かめる

車椅子降りて自力で起つ一步

支え合う絆が歩む被災の地

原油高車で探してる安値

(前月分) 河内長野市 水谷正子

雲は湧き二十の年に戦負け

クーラーも付けず弁当待つ暮し

二度の幸葉桜の陰涼風に

大相撲背番号でも入れますか

誕生日デイサービスで盛大に

(前月分) 神戸市 山崎武彦

平和馴れた若者の長い脚

しつかりと食べているから大丈夫

まあまあ妻とふたりでよく笑う

夏雲の流れに遠き日の別れ

点滴に耐えて子のこと妻のこと

(前月分) 東大阪市 米田水昇

しそジュース初めて作るさじ加減

デイサービス大朝顔に迎えられ

髪カット染めて若さをとりもどす

祇園祭テレビ見ながら叔父忍ぶ

車椅子押してもらってカラオケへ

堺まつり協賛

第40回記念 秋の誌上大会

課題と選者	各題2句	共選	共選
「なま」	【江西見】	清い	共選
「外れる」	【岩口見】	いわ	共選
「みそ」	【松原タ】	ン吉	共選
「戻る」	【米田昌】	子	共選
	【河内月】	も	共選
	【前鴨た】	つ	共選
		瑠美	

投句料 1000円

締切 10月20日

投句用紙 配布用紙またはB5便箋
(無記名・番号で整理)

投句先 〒593-8305

堺市西区堀上緑町2-16-3

川柳塔さかい 河内天笑

TEL・FAX 072-278-4706

川柳塔の

川柳讃歌

(106)

木津川 計

決断の速さを非情とも言われ

宮尾 みのり

ああでもない、こうでもないに陥ったら判断できない、そんな優柔不断で煮えきらない男がいる。一方、時代を画する人物は決断が速い。だから稲森和夫は喝破したのだ。「バカな奴は単純なことを複雑に考える。普通の奴は複雑なことを複雑に考える。賢い奴は複雑なことを単純に考える」と。事態の大半の枝葉末節が、一点の本質を覆い隠しているのだ。みのりさんは「非情」であらねばならぬ緊急事態でのトップの決断を支持している。

より貧しアベノミクスで年金者

竹信 照彦

地上の悲しみは二通りではない。①権力者が貧乏人を一層貧乏にすること。②その貧乏人が権力者に拍手喝采する光景だ。アベノミクスが、1%の富裕層と99%の貧乏者であるアメリカ型の弱肉強食の競争社会を目指す本

質を見てとれず、弱肉が強食に期待する二の舞がまた演じられている。弱肉の喝采で誕生した小泉構造改革内閣がもたらせた格差社会である。又再び「純ちゃんと叫んだわたしがバカだった」ことへの照彦さんの警鐘である。

挨拶が遅れて気まずさが続く

片山 かずお

礼状を出し忘れ、先方の不興を買う。祝意が遅れ、いまだに祝われてもの失ったタイミング、長上への挨拶を二の次にした無礼……。そんな無作法を僕はどれほど重ねてきたか。いまも近所がづらい。よく顔を合わす人なのに何年も前、挨拶しそびれたばかりに、すれ違ったり、目線が合った折の気まずさ。どうか今日は出会いませんように、そう願う毎日もお前のせいだとかずおさんに指弾され。

人様の全て知らない方がいい

川崎 ひかり

謎だらけは無気味だが、謎めくには興味がある。わく。開けつづろげは愉快だが深みに欠ける。80%のバブリックと20%のプライベート、これぐらいの露出が魅力の人間像ではないか。朱夏編集長にも20%のシークレットがあるから僕は想像し、臆測し、あるいはではないか、やっぱ、違うたか、と思ひ悩ます魔女性に困惑する。まことに「秘すれば花」であって、

「秘さずば花なるべからず」。世阿弥の芸術論をひかりさんは解説してくれたのだ。

お話も少しひかえた味がよい

川端 一步

世阿弥に限らない。芭蕉も「言いおおせて何かある」と言い尽さない余情の美の効用を説いた。詩人・吉野弘も「祝婚歌」で言う。「正しいことを言うときは／少しひかえめにするほうがよい／正しいことを言うときは／相手を傷つけやすいものだ」と／氣付いているほうがよい／無理な緊張には色目を使わず／ゆったり ゆたかに／光を浴びているほうがよい」。論客で確信派の一步さんにして右の句の慎みとわきまがある。それがいい。

よよと逃げる白い豆腐のころざし

川本 晔

ころざしは雄大であり、あるべきだった。「志を果していつの日にか帰らん」、近代日本の原動力は、まさに立身出世の膨大な意欲であった。が、晔さんにはやられた。「豆腐のころざし」に参った。確かに、すき焼鍋の白い豆腐は挟みにくく、握みにくい。食われまいとすることろざしも豆腐故に「よよと逃げる」「よよ」がいい。「白い」も生きている。川柳塔に文学を解する人がここにもいる。

〔上方芸能〕誌発行人

自選集

小島 蘭 幸

妻百句 僕が死んだら開けなさい
小津安を観て来た尾道の夕陽
うしろ姿がモノクロになつてい
自由席がらがら指定席むんむん
秘仏公開三十三年後はいない

板 尾 岳 人

手に取ると投げたくなつてくる乳房
じゃがいもの怒り八月十五日
消費税上がると月に帰ります
美しい言葉身ごもつている茶笥
戒名は岳人と書いて下されし

奥 田 みつ子

句に追われ時に追われて過ぐす日々
胸底に時々さいつむじ風
手も足も出ないこけしと見つめおり
ニュース無残 風鈴の音に人心地
ペランダに何を告げるか鳥の声

河 井 庸 佑

成り行きに任せて機会待つとする
胸の内仕舞込めないことを聞く
腹割った親友の話へ手を添える
背伸びして届くと読んだのが誤算
彼我を知り今は動かぬ策を取る

川 上 大 輪

すこしずつずれてるお人好しなんだ
ひと休みしてから今もそのまんま
頷いているが話は聞いてない
欲の皮化粧ののりが悪そうだ
めくつても捲つてもまだ熱帯夜

小 西 雄 々

狛犬も驚いて聞く願いごと
看板の絵がときどきは語りかけ
空駆ける過去の私を見るために
難問へ左脳が駄目と言いだした
幸運か草むすかばねにはならず

齊 藤 焔

ガーデニングこの家の彩いいセンス
雨の日は雨の笑顔で咲く野菊
味のある話を好きな蕎麦枕
コスモスは弱音なんかを吐きませぬ
足の裏にもたつぷりと陽を浴びせ

參院選新日本が胎動し

塩満敏

市議選で街の平和守ります

富士山の遺産登録おめでとう

リハビリのお陰杖無しで歩けます

百日紅鶴彬句碑守り咲く

新家完司

元氣だよ街の騒音まで愉快

とろとろと居眠りをしてリフレッシュ

川柳に嵌り見詰める犬の糞

実つてもいない頭が垂れてきた

しけたツラするなと街の灯が点る

恒松町紅

晴れてきた隣の元氣な笑い声

もう一杯注いでと喉が言っている

噛われているとは知らぬ喉佛

何考えていたか度忘れしてしまい

女房の知恵を時々借りている

津守柳伸

友達の数だけ湧いてくる自信

百合見頃箱館山へスニーカー

方言にどっぷり亡母の数え唄

ご奉謝の数巡礼も丸くなる

ときめきが消えた八十路ののり茶漬

心経がすらすら言えて三回忌

ふる里の風八十にして深し

金儲け知らぬお方と添う涙

抜け道を知らず修業まだ足りぬ

忙しいは禁句川柳止めなはれ

都倉求芽

ラムネ玉目がくらむほど光る海

雷が近くに落ちて騒ぐ雨

カーテン一枚でしのぐ窓からの猛暑

線香の煙と墓石の白さ

鏡にも愛想つかされている疲れ

土橋螢

美しい女の夢をみて眠る

まつ黒になる悪人の影法師

人の世の光と影の中に生き

愛という価値を認めて恋をする

木枯しや死んではならぬ人が死ぬ

西出楓楽

自分との戦が続く七十路

四季のうつろい教えてくれる和菓子店

夏バテのまずは脳からやつてくる

悠然と生きる精神年齢で

朝蜘蛛と茶柱元氣湧いてくる

仁部四郎

医家隆盛待合室の週刊誌

天秤がグラグラテレビ週刊誌

週刊誌皇室記事に倚りかかる

言論の不自由も呼ぶ週刊誌

役割を時代が問うてる週刊誌

林瑞枝

婉然と風にピエロの面を干す

別れての余韻が毛穴まで沁みる

優しさに討たれて酒を酌ぎこぼす

踊りの輪抜けて二人は海の中

コンパニオンの指先にある昼の恋

政岡未延子

残り火を少し楽しむティールーム

パッケージ恋閉じ込めている微罪

揉め事が外に出ているマジックガラス

ひと皮剥くと年齢相応の貌が出る

帆を低く老いにもそれなりの居場所

三宅保州

同類項なのかロボットとロケット

ぎつちらこもう死語なのか渡し舟

歯が浮いている原因はお世辞です

手刀を切つて譲ってもらう席

無理をしたお招き無理をして行こう

宮西弥生

フクシマにモデルハウスが帰り待つ

軸足を変えてしのこし渡り切る

てくてくと歩いた先でゲリラ雨

花柄のステコ猛暑から残暑

ほとけさまお身拭い待つ猛暑

両川洋々

教育か体罰なのか人が死ぬ

活断層の上で原発目を覚ます

善人の手だ温もりに嘘はない

出迎えの無い駅ここが左遷地だ

素っぴんの妻よ女を捨てたのか

通りみち

八木千代

開けてあります 秋の入り口開いてます

秋冷の風が廊下を吹き通る

天窓の真上は月の通りみち

萩の葉のかげに目立たぬ木戸一つ

ひそやかに風とほとけの通りみち

このたびの台風18号は甚大な被害をもたらししました。被災者の皆様に心よりお見舞い申し上げます。

川柳塔社

第55回 豊中市民川柳大会

と き 11月23日(祝) 正午開場

ところ 豊中市立中央公民館 1F ホール

会 費 1500円(軽食・記念品・発表誌呈)

宿 題 各題2句 13時締切

「凝 る」 岩 田 明 子 選

「科 白」 天 根 夢 草 選

「く ど い」 上 野 多 恵 子 選

「ひ げ」 藤 井 満 州 夫 選

「ハ ー フ」 立 蔵 信 子 選

「ひたひた」 大 堀 正 明 選

「天 国」 川 端 一 歩 選

連絡先 田中 螢柳 TEL.06-6853-0470

〒560-0033 豊中市蛍池小町2-3-1-411

主 催 豊中川柳会

第85回 奈良県川柳大会

日 時 11月10日(日) 11時30分開場

会 場 橿原商工経済会館 7F 大ホール

宿 題 (各題2句・締切 13時00分)

「 芯 」 吉 野 成 子 選

「熱 い」 井 上 洋 三 選

「きらきら」 柴 田 園 江 選

「約 束」 水 津 加 央 里 選

「添 える」 中 原 比 呂 志 選

「神 様」 那 須 鎮 彦 選

「逃 げる」 松 本 柁 子 選

会 費 1,500円

欠席投句 1,000円(定額小為替・11月5日必着)

〒630-0262 生駒市緑ヶ丘1422-19

上田 有行 宛 TEL.0743-75-0239

主 催 奈良県川柳連盟

温故知新

『谷垣史好句集』より

あてのない散歩へ枯葉ついてくる

暖房へ冬の蚊年を越す気らし

ソバカスをいとしいものと見るも恋

闇が眩いている闇の静けさ

死体折るように寝椅子を折り畳む

鉛筆を削れば少年の日が匂い

書店煌々と立ち読み繁昌し

吸取紙のようにおしゃべり聞いてくれ

一病息災他人はのん気なことを言う

四十とはかくも哀しくなま臭く

美しいひと美しく風邪をひき

混浴と聞いて眼鏡のまま入り

やっと二人になったら僕の降りる駅

ご詠歌に似てくる祖母の子守唄

瞼の底に俺の死にざまが見える

弔吟へ遺影ひと言いいたそう

残された肺いっぱい春を吸い

断崖は女を置いて見る景色



川 上 大 輪 選

岡山市 工藤 千代子

揺れている月に本音は漏らさない

眠剤に甘えて屈いだ海にする

海の深さを知ったあたりから晩夏

鉛カリリ嚙んで啖呵に蓋をする

少し汚れた八月を取り外す

だとしても妥協はしないホイッスル

大阪市 栃尾 奏子

鮮やかな嘘に勝ち目のない私

ゆつくりと旋回好機見えるまで

不器用で真つ直ぐ父という手本

読めぬ風私の運が試される

花束の赤を信じてみたくなる

良く食べて泣いて笑っていい日です

横浜市 川島 良子

天国へ時々送信するメール

猛暑との戦いわたしとの戦い

いい句でしょ亡夫またまた苦笑する

法話聴くわたしが浄化されていく

とりあえず挨拶だけはしておこう

人生を太く短くそれも良し

倉吉市 中村 毅

増えるのは休耕田と高齢者

カード不可三途の川の渡し舟

絵日記に少し見栄張りつけ加え

立てましょう極楽行きの道標

相続税納めてみたいけど無産

無口でもしやべり過ぎでも困る医者

備前市 森 ふみか

嘘ひとつ そして終りのないドミン

積んだものの全部崩していいですか

ポシエットの奥の切符は期限切れ

うやむやな返事女に戻れない

孵化の音別れの予感聞いている

叩かれる覚悟で昼の蚊がとまる

羽曳野市 藤原 大子

ほどほどに忘れて楽になれと天

いなくては困るがいたともどかしい

緊張を友の笑顔に救われる

忘れたと言えずこっそり探してる

みすゞの詩清い少女の日が戻る

ひらがなのようにこれから過ごしたい

瀬戸内市 東 槇 ますみ

じつくりと発芽の時期を待つわたし

雑音は丸い背中で聞き流す

よくしゃべる何か隠しているらしい

改行しては女を咲かせてる

ドアノブがきしむ明日は雨模様

とりあえず今日と明日におじぎする

三田市 上 田 ひとみ

ひとつだけ守りたいものあればいい

知っています あなたがとても弱いこと

この風とあなた丸ごとつつみたい

真つ直ぐに見つめてくれていたんだね

いくつでも言えるあなたを好きな訳

もう何も私を止めるものはない

大阪市 宇 都 満知子

悔しくて亭主の背にあつかんべ

口げんか負けてくれてる亭主です

肉球も火傷しそうなアスファルト

サイダーのシユワシユワシユワが今も好き
休日には落ち着きすぎて片付かぬ
夫婦間負けるが勝ちで続いている

竹原市 國 實 力

諦めて肩を落として出るお店

余程だな聞いておくれと来るなんて

肩の荷を降ろしころの荷もおろし

清書だけ半紙だったね少年期

賑やかな輪には入らぬお金持ち

こんなにもものびのび妻の出かけた日

寝屋川市 岡 本 勲

しつかり者の妻のお陰で今がある

何一つ本音言わない妻という

能登の旅妻の化粧も輪島ぬり

誕生日ロウソク吹いて立ちくらみ

腕上げず血圧上げた習いごと

体内のアカ落して巡る温泉地

横浜市 長 島 亜希子

番狂わせ起きない選挙つまらない

平均寿命越えたから良いタバコ吸う

熱中症ならないように怠けてる

好成績内助の功にされている

食べるものあれば女房は留守で良い

金・力ないが食欲だけはある

川崎市 成田 せいじ

大阪市 柴本 ばつは

お財布がポイントカードではち切れる

正直に生きた親父の丸い爪

何時の間に孫が主役の家族会

親父にもあつたんかいな少年期

盆踊り浴衣の妻に世辞を言い

父と娘のぎこちないのも絆ゆえ

口だけはゆつくりしてと急かされる

ややこしい話やめとく通夜の席

暦では夏一番に秋が立つ

枯れ向日葵忘れものしたような顔

佐渡市 高野 不二

大阪市 高杉 力

相続税どう変ろうと困らない

何の日か知らぬが休み有難い

必要経費にならぬ会費が多すぎる

大いなる誤解のままで恋進む

一箱の名刺任期はもう終り

可愛いと普通の間 AKB

子はワイン父は発泡酒でも酔い

ギターなど弾いて淋しくなってみる

ほしい雨いらぬ所へばかり降り

もう腹は決まっていると分かる笑み

岐阜市 平野 あずま

大阪市 寺本 実

孫の成長身近に知った夏休み

年寄りと軽くまとめてあしらわれ

夏の蝶くの字への字に駆け巡る

先頭は譲り矢面避けて生き

健脚も今や見るだけ富士の嶺

奢りならベルトゆるめてバイキング

ガムを噛む反骨の貌むき出した

好きですと金のあるうち操られ

蝉しぐれ短い夏を急きたてる

猛暑日はラクダのように水を持ち

豊橋市 藤田 千休

大阪市 藤田 武人

ポリグラフ闇から事実焙りだす

人生の裏道にある長い影

わが家にも活断層がある怖さ

多数決また良識が泣いている

発酵に手間暇かける老いの恋

日焼け止め使用期限が切れてます

口喧嘩お任せあれと河内弁

父が言う魔物が居てる甲子園

胎動に婚姻届け急かされる

エプロンを父に渡した定年日

堺市 近藤 治子

癌再発に脅えて暮らすのはよそう
命賭け伝えるものは命です

人生を賭けて婚活大勝負

温度計体温計を凌ぐ今日

渋いお茶おかわりをして寝つかれず

堺市 羽田野 洋介

ストレスをそつと投げ込む洗濯機

ときどきがしょっちゅうになる悪いくせ

肩の荷を下ろして戻る人間味

アルバムから遠い記憶を取り戻す

眼鏡拭くただそれだけで晴れる霧

堺市 大和 峯二

美しく老いてゆきたい希望もつ

原発の怖さ忘れて売る怖さ

生かされた大事な命かみしめる

改憲は夢の中だと思いたい

夢理想まだ人間をやめられぬ

堺市 山崎 早苗

帽子飛び乗るはずだったバスが出る

目覚しの音が鳴る前とび起きる

夕方はシール貼る人追いかける

墓参り拝む時間が長くなり

ママ友と呼んでいた人孫自慢

池田市 上山 堅坊

ずばらなど決してしない蟻の群れ

あの世への列ですどうぞ割り込みを

どん底で明日を見つめていた戦後

飲み過ぎが裁かれている二日酔い

気休めにちよつと減らしているご飯

泉大津市 助川 和美

正直に言うて結局叱られる

カタログで買った洋服吊つたまま

会話ない子とサッカーで盛り上がる

旅仕度冷凍された母の味

まがつてるきゅうり食べれる孫が聞く

貝塚市 石田 ひろ子

泣きに来て墓の草取りして帰る

知らぬ間に母の鑄型に嵌つてた

スイーツで気炎を上げて暑氣払い

小学校の恩師わたしより元気

病名が増え順調に老いている

河内長野市 穂口 正子

歳だもの私をちよつと甘やかす

捜し物するには余り暑すぎる

時に有るこのまま目覚めなくて良い

幸せがふわりと肩に乗った

今日も無事予定やつつけ仕舞風呂

豊中市 荒木郁子

八尾市 山根妙子

病院へ精一杯のおしやれして
同病が待合室で盛り上がる
ドクターの優しい笑顔ほっとする
お荷物にならないように日々努力
血圧が上がる原因あなたです

豊中市 貝塚正子

口ほどでなくて凹んだ検査前
日本語の深さを知った趣味の会
ひどくなる雨を理由に長居する
心電図平均時速違反無し
一万円臨時収入息子から

箕面市 大浦初音

なぐさめの言葉もなくて背を撫でる
たらしや空想の世界で遊ぶ
花鉄過去も一緒に切りおとす
折り返しゆつくり歩む下り坂
両方をたててまあるく痛み分け

箕面市 村田恵子

老いた街隣はどなたでしたでしょう
今わたし矛盾の河で溺れてる
夏休み子らがいるから夏休み
スーパ―も戸別配達するんだと
鍵かけた記憶が消えて引き返す

蝉しぐれどこかに指揮者いるごとく
花も樹もおらが夏よとさるすべり
書きとめておけばよかった夕べの句
一日にひとつを終えてやつとこき
ブラウスも日傘も白で盆の道

大阪府 神野千恵子

もう一度話してみよう晴れの日に
噛み合わぬ話胡椒が効いてくる
いよいよか人が改造されてゆく
やりかけの事が納戸でせめぎ合い
喧嘩する相手があつて午後三時

神戸市 木村忠義

何故なぜと思えば神秘この宇宙
マイナスがプラス思考の邪魔をする
いつからか心の美人大好きに
いいほうにみてくれたのでよしとする
競うなら去年の自分との対比

神戸市 玄番美恵子

まだ悩みあるから元気ありがたい
歳重ね趣味願望を山と積む
イチローも松井も歴史刻む星
介護の手痛む心に温かい
嫁に行く娘に継がす母の味

神戸市 山根 弘子

久々にお客になった里帰り
友の愚痴こころあたりで句読点
俄か雨チャンス待つてる傘の中
したたかに昭和を生きた子沢山
不器用な息子が父の技を継ぎ

尼崎市 中井 楓花

一番で無くても良いよ元気なら
飾らずに私は私らしくいく
時々で済まなくなつた物忘れ
ケセラセラ嫌なこと皆ゴミ箱に
リモコンが色々あつて不便です

三田市 雑賀 一泉

親孝行年金あてにしていること
永田町昨日の友は今日の敵
空席をさけて我慢の筋トレに
人前でその場しのぎの紳士風
年毎に仏が増えて年賀減る

篠山市 北澤 稠民

太陽に日焼けの顔が愚痴こぼす
有難さ忘れてばやく炎天下
この孫の笑い我が家の福の神
復興へささやかだけど愛送る
甘い顔隠してここは鬼になる

篠山市 藤井 美智子

無事目覚め朝の光に生もらう
謎の人ふれ合ううちに心知る
ウォーキング三日坊主の悪い癖
抜け道を通りストレス捨てて来た
夏休みばあばは花火買つて待つ

宝塚市 丸山 孔一

洗車した翌日風雨強くなり
古いナビ何処へ行くのと口噤む
出掛けてと言わんばかりの妻の顔
亡き後を言えば平気ですと妻
カラス来るああ本日はゴミの日か

奈良県 谷川 憲

入社式みんな期待の星だった
足るを知るそんな境地になれませぬ
期限切れのクーポンもある遺産分け
知らなかったと言い逃れする偉い人
職人の出番を無くす回る寿司

田辺市 大峠 可動

春夏秋冬話題豊富な人といふ
天に地に両手で貰う慈悲があり
万歩計百歩歩いて無位無冠
晩成のわたしはわたしひとり言
幾山河流れ虚像と実像と

田辺市 小川 イセ

初生りのスイカ仏と分けて食べ
汗だくのシャツにしみ入る大ジョッキ
八十路坂今日も地下足袋はける幸
遠花火心躍らす人と居る
七転び八起き転んだ数が多すぎる

和歌山市 北原 昭枝

八月の祈りが深い百合の塔
残照へ花一輪が騒いだ日
日が落ちておしゃべり好きの月見草
赤とんぼ小さな秋に来てとまる
捨て切れぬ古い手帳にある思い

和歌山市 さかた きく

風車風をからかう音立てる
日曜日宅配ビザで飲むビール
ジョーカーを隠しきれずに笑う指
ギリギリス敵にまわした胡瓜好き
賽銭に領収の音返す箱

和歌山市 福呂 秀子

ハンカチと共存してる夏の日日
検診日塗った口紅すぐ拭い
修正液いらない日日を目標に
川柳で沈む気持を和らげる
謎解きが年重ねても彼方此方と

倉吉市 岡崎 美知江

うつすらと紅さす女火のにおい
あれこれと皮肉たつぷり効いてくる
言い訳をすれば鼓動が早くなる
年毎に手足が萎える音がする
つぎつぎと老いを泣かせる税の波

米子市 野川 宣子

女盛りすつかり変るシルエット
年寄りの元気な町は裕福だ
ユーモアに富んだ持ちネタもう古い
パートナー奇妙な癖が鼻につく
太い線加え未来図孫に托す

米子市 見山 温子

スタートもゴールも見えぬ蟻の列
惚けるなと脳を叩いて活入れる
叱られてもそれでも母に子はする
選挙カーごころうさんと手だけ振る
下戸が酔い爆発させる腹の内

鳥取県 大塚 美代子

平坦な道にまさかの落とし穴
子が巣立ち何か淋しい広い部屋
目の奥に残る故郷は母の顔
生きて来た証しを残す日記帳
ばあちゃんの昔話は蚊帳の中

松江市 武島 ちよえ

歳聞かれやつと米寿と答えとく
暗記してメモして呆けを遠ざける
手に汗をかく程握る齒科の椅子
少少の摩擦は葉かも知れぬ
絵手紙が会いたい気持駆りたてる

岡山市 丹下 凱夫

冬瓜ののつぺらぼうが覗いてる
寝返つても寝返つても熱帯夜
お供えのりんごお経を唱えている
熱中症などには負けぬほとけさま
夢ばかり追っているからおせんぼ

岡山市 藤成 操江

チラシ見て弾むでもなし陽は西に
信じればきつと返ってくる筈
ろうそくの向こうの声に叱られる
さざ波がまだ居座っているカルテ
成るようになると悟れば吹っ切れる

岡山市 前田 恵美子

蝉の声生きていますと叫んでる
暑い日は熱いカレーで暑氣払い
雷へ孫より先に耳塞ぐ
汗光る肌はちよつぱり若く見え
子守唄歌つて婆は眠くなる

岡山県 池田 たか子

キノコ雲はだしのゲンが継いでいく
前向きも足踏みもある日記帳
葉を枯らし根っこを守る母をみる
弱点をさらし素直に老いていく
ヒマワリのDNAが欲しくなる

岡山県 田中 恵

野の花を挿して涼風待つている
あわてるなしばらく待てば雨上がる
カラコロと水子地蔵の風車
炎天下魂ひとつ狙われる
熊蜂が偵察に来る墓掃除

竹原市 若年 幸子

ほんとかしら美人になれるコマージュル
夏休み孫にお守りをされる歳
まあだまだ孫に譲れぬものがある
とりあえず明日のシナリオ書いて寝る
暑くとも心洗濯ウオーキング

竹原市 土井 輝恵

桃太郎派遣したいよ尖閣島
熱中症予防グッズを置いて去ぬ
日本の夏より暑い地に住む娘
婿殿に鍛えられてる料理腕
洗濯機のティッシュ脳天遣られたり

山口市 中前幸子

香南市 桑名孝雄

乱れ髪こころの疵を置き去りに
昨日ついた嘘ベランダの片隅に
九条揺らぎ音感がまた狂う
虹の尻尾でブランコなどいかが
枯れ野の向こうに見えるのは墓地ですか

宇部市 高山清子

我がミスと認めるためにいる男
男気と勇気違えている男
老い傘寿干物になりそうこの猛暑
用のない店の冷気に吸い込まれ
新党といえ次々揃う古い顔

今治市 渡邊伊津志

嘘一つ心の底を探られる
隠し味いつも男のポケットに
花道で一人芝居にならぬよう
懐の風に染まってゆく心
ライバルがこつそりくれた痛み止め

大洲市 花岡順子

熱中症になつてしまった室外機
一雨が欲しい田舎の土ぼこり
もりもりと食べて暑さを吹き飛ばす
年収は増えずに物価だけ上がる
お小言が続きことさら渋いお茶

この猛暑アップアップの八十路坂
心頭滅却そんなご無理は言わないで
原発の是非はこの際棚に置く
五時チンで張り切る癖がまだ残る
就活婚活も少し生きる夢がある

宿毛市 増田純子

有り余る金と苦勞がしてみたい
神さまに祈る無欲になれなくて
ドアチェーン外し仏を待っている
お帰りと風ふるさとは上天気
うぬぼれていよう一日の酔芙蓉

北九州市 岡田幸生

いい法話聴けばできそう安楽死
息抜きも上手になつてする介護
タイミングずれて誠意も色褪せる
無常の世昨日は笑い今日は泣き
年金がここまで来いと遠ざかる

唐津市 北村松風

鰯広で顔を包んだキャディさん
落日は隣りのビルに十六時
モンゴル語習いに行こう相撲部屋
嫁ぐ娘のアルバムたたむ父と母
運転を辞めて世間が狭くなる

つくば市 嶋 本 喬
団扇持ちあおぐ孫聞く寒いかと

熱中症用心しつつ墓地掃除

草むしり立ち上るたびドッコイショ

御先祖も一緒に飲もうカンビール

東京都 高岡 弥生
人なんてやっぱりずっと変わらない

正論をかざす夫は上目線

思ってる事を伝えて険悪に

充電中もう一杯になってるよ

多摩市 大竹 一良

宝くじ金には縁がないと買い

暇と避暑結構な場所デパ地下へ

半生を多忙に過ごし悔いばかり

簡潔な言葉一つで祝辞生き

横浜市 巖 田 かず枝

虎の巻こつそり読んで孫に解き

アジャバアで消したいことの七つ八つ

パソコンも車も壊れ私まで

ニコニコと懲りぬ首相の部活動

静岡市 渡 辺 芳子

修身で昔の日本をとりもどせ

トンボ釣り知らぬよ今の子供達

ハデを着てやっぱりぬいで地味な服

字が笑う返事をしふる筆持つ手

熱海市 三 谷 圭 角
暑いせい西瓜アイスの美味いこと

歯が痛い若い証拠とおだてられ

好天だ今日もゲートへ隣り町

天災が何時も人災暴き立て

富山市 有 澤 嘉 晃

時々は気持ち以外も贈ってね

本当は金の話だ回り道

扇風機がいよいよやながら仕事する

前向きというお役所の後ろ向き

江南市 脇 田 雅 美

悠々と時間間隙の予約席

独り者白いご飯に玉子がけ

頼み事返事は良いが一向に

懇親会顔と名前が一致せず

京都市 清 水 英 旺

原爆忌平和の鳩は飛び惑う

カレー屋のスパイスの匂い暑気払う

雑念にもみくちやにされ細る夏

法話なく檀家へ急ぐ盆の入り

大阪市 浅 井 公 平

若き日の妻によく似たこけし買う

バス待ちは井戸端会の一つです

鯉よりもナマズの髭が面白い

忘れものの目の前にあり気がつかず

大阪市 内田 志津子

迎え火を焚いて今夜は集います
もう一度夢があるからジャンプする
着く頃が食べ時ですの思いやり
故郷の香りが届く宅急便

大阪市 梅里 南天

タコ焼きをおもしろそうに食べる人
だれのかなインドカレーの忘れ物
タオル揺れ自分の歳が香りだす
今年から二つに増えた墓参り

大阪市 岡田 元

残暑とてこう暑くては文出せず
暑いなあ酷暑猛暑の根くらべ
趣味ありて意欲旺盛歳忘れ
粹がつて野暮とは知らず野暮を売り

大阪市 太田 としお

近すぎて見えないものがたとある
知り合いは多い友人ひと握り
何もかも値上げするのが脱デフレ
死ぬまでに富士のお山で初日の出

大阪市 平井 露芳

イナバウアーしても延びない我が背中
かぐや姫債務払って月目指す
被災地へビリケンさんがハウアーユー
年金が見つかり論吉の顔拝め

大阪市 前川 善之

早朝から暑い暑いと蝉しぐれ
夏祭り街を練つてるギャル御輿
叱るより宿題させる親の知恵
化粧品美肌の文字に酔っている

大阪市 松田 聡

気にしない失敗なんて誰もする
赤信号渡る大人を子は見てる
犬嫌い犬は正直わかつてる
言葉では言い尽くせないほど酷暑

大阪市 吉田 知之

思い出が詰まるコケシのコレクション
托鉢に行き合いそつと会釈する
犬散歩手ぶらで平気非常識
視聴率ゲスト選びが難しい

堺市 梅木 澄空

狙の鯉でメスを操る人を持つ
順調に行つたと手術早く済み
絵文字入れ弾む心を伝えとく
簡単な電話で済ます筆不精

堺市 増田 わこう

五七五薬効あらたか認知症
鎖国以来外交下手の日本
カジノとはセレブのためのパチンコ屋
民主政治ねじれあるから生きてくる

河内長野市 大島 友子
風呂敷のフレシキブルな和の妙技
家事年金病氣夫と半分こ

あつた筈のウエストラインどこへやら
退くか行くか思案の分かれ道

河内長野市 辻村 ヒロ
あと一つ間違ひ探し意地になる
一万歩口だけ先に走り出す

此の歳で純と言われて照れている
孫娘拗ねて大人を振り回す

河内長野市 藤塚 克三

湯治場で命洗濯老夫婦
お互いに悩み潜めて笑い合う
泥被る度に度胸が付いてくる
依怙地ゆえ念仏を聞く耳持たぬ

岸和田市 中岡 香代

神無月拾うてくれる神も留守
容量ごえそれでも回る洗濯機
伸びきった輪ゴムにもある自己主張
中立を守り黙りまだ続く

高槻市 鳥居 宏

町内で話し合うのは妻ばかり
バラよりもケーキがいいと妻は言う
書き慣れて万年筆は友のよう
豪放な笑いごまかすものがある

高槻市 原 洋志

カレンダー赤いところが忙しい
生きている証ときどき名指しされ
キーレスキーちよつと世渡り急ぎ過ぎ
ゴキブリを追つて電話の生返事

高槻市 三谷 白黒

娘来て空っぽになる冷蔵庫
梅雨明けは何だったのかこの豪雨
二日酔い頭にしみるセミの声
ボケ防止次から次へ悩みごと

豊中市 荒巻 夢

荒れ狂う川の流れに水の意志
雷雨の下嬉々と駆けゆく子ども達
尽きるまで命あかあか蟬しぐれ
曲げること覚えて背なも丸くなり

豊中市 源田 啓生

晩成を信じ信じて坂幾つ
八月の嫌なあの日がやつて来た
憧れの少年兵よ遠い夏
椰子の実が唄える喉だまだ若い

富田林市 中村 恵

真心の裏を透かしている愚か
てんこ盛りたつた二人の食卓に
毎日がゆうゆう爪ばかり伸びる
裏方に徹するつもり今日だけは

富田林市 肥山一文

しなやかに出来ずごつごつ生きてきた
シナリオの通りにいかずあつけない
紙芝居五円握って見とれてた
キーボードひとさし指で仕事する

寝屋川市 荒川鈍甲

木洩れ日にゆれて異端の墓二三
憚らずオラシヨをあげた祖母が里
沈黙の館はローマ向いて建つ
磔刑やピカの長崎精ろ舟

羽曳野市 安本美喜

エアコンがなければ生きて行けません
ペットボトルの水で命守り抜く
居眠りの中に娘の里帰り
補聴器を贈らる結婚記念日に

羽曳野市 磯本洋一

ペン持たずメールで便り去年今年
待つことに我慢も馴れたUSJ
向日葵が首をもたげて雨を乞う
若さだけ先にころげた古希の坂

枚方市 河田洋子

もし鳥に変われるならばウグイスに
千羽鶴折って訪ねるボランティア
山登り鳥の声に癒される
熟れた頃鳥にお先と持つてかれ

枚方市 坂本ミヨノ

美人作り美白のケアがしみになる
ほのぼの記事心の箱にそつと詰め
妙に沁みる演歌唄って目がうるむ
膨らんだ青柿に風強く揺れ

枚方市 松原保

日本の進路を決める浮動票
投票に皆が行けば変わるかも
第三者責任のがれ人まかせ
いつからか大きい方が孫の靴

藤井寺市 田付絹枝

この酷暑笑うしかなし落語会
重い足笑い飛ばしてランラン
淡茶好き隔世遺伝か孫三つ
遺品箱鬼が飛び出た借用書

松原市 市川雄太

飲み過ぎに注意体が冷えちゃうよ
ウソでした統一球は飛びました
妨害は生きる上での峠道
早起きが辛く感じる夏休み

箕面市 寺井柳童

学識者集めて会議まとまらず
脱衣場だけが別々妻と合う
冷や汗をかいてちよつぱり汗が引く
さよなら負け土持たず去る甲子園

八尾市 赤木 妙子

ぼんやりかついうっかりか蹴躓く
一日のリズムが狂う休刊日
タガゆるめ余生の日記まるく書く
今日生きる幸に手綱を締め直す

八尾市 田邊 浩三

目指すのは地位かお金か健康か
気力五合目耳と腰とは八合目
目玉焼き割ったとたんに鳴る電話
どこまでがボケか判らぬ恐ろしさ

八尾市 前田 紀雄

熊蟬が僕の昼寝の邪魔をする
指差喚呼してから家を留守にする
古希過ぎて留守番役が板に付く
遺言書何も無いから迷わない

大阪府 小栢 こずえ

今しかない今を逃がせばいつ出来る
喜びも悲しみも越え今日の幸
また一つ神の試練が試される
まず汗を拭いて一手を考える

大阪府 高木 道子

心臓が喚く猛暑の草むしり
熱中症を躲す真面目に飲む麦茶
短めの僧のお経もあり難い
胃袋が先ず感知した副作用

大阪府 西川 冷子

朝顔の咲き競う朝平和です
球児連異常高温汗と泥
盆供養畑作物も蓮の葉に
和のお風呂外国人もみんな好き

大阪府 畑中 節子

盆の市夜店屋台に咲く浴衣
若い日のお洒落着リフォーム今野良着
筆不精メールで上手くおつきあい
南瓜蔓何を目指して伸びてゆく

神戸市 井上 忠貞

八十路でも若さを保つ万歩計
富士山は別格の山誇りです
芸事もそこそまでは上達す
ボーアイの花火の音を遠く聞く

神戸市 興水 弘

この頃は妻の眼指図すぐ読める
飲みすぎよ妻のトーンは破裂音
さわさわと動き始めたアベノ風
ダイエットの便りを出して今悔いる

神戸市 能勢 利子

暗い道口笛吹いて早歩き
行列を見れば必ず確かめる
無人店聞こえるように金入れる
寝る前に何を食べたかチェックする

神戸市 松井文香

さりげなく胸打つ句集道しるべ
そこそこで感謝の出来る人めざす
諦めは見極めるのが早いだけ
失敗は覚悟の上の自分流

尼崎市 小池幸子

常識が個性に違つてややこしい
サブリ飲み八十路の坂もなんのその
暮れ散歩値下げスパー寄つてみる
風鈴も振り疲れたか動かない

加東市 岩本美緒子

乳ガンの一病背負い長命を
ケアはびねすタフな女性が寄り添うて
長命はしんどい難し文句言う
申しわけない済まない夜半熱中症

川西市 大坪一徳

声高に怒鳴つた脛に傷がある
悪いとは分つていても謝れぬ
チンしても元に戻らぬ冷めた仲
ランニングマシンで日本一周だ

川西市 日野岡和之

青春の飢えを埋める老いの趣味
駅弁を食べたくなつて帰省旅
老いてなお旨いうどんを腹八分
重ね合う祈り一つに共白髪

篠山市 酒井健二

皺深い両手がそつと出すビール
いい酒を飲むため埋める予定表
飲み友が飲めなくなつてなお誘う
廃屋に豪邸もある過疎の村

篠山市 佐々木 勇

何よりも君の元気な声が好き
後継を誓い旅立つブーメラン
抜け道に防空壕という砦
ドレミファ調土筆が招く万歩計

篠山市 永井かほる

仲よしの絵手紙遺品になりさみし
メールばかりはがきは賀状だけになり
この暑さ一日いくらお茶飲むか
お盆きた亡夫にあいに墓参り

三田市 足立つな子

未だ未だと健やかだこそ欲がでる
いい年してこの世解らぬことばかり
老いていま耐えることなどご勘弁
すつぴんを帽子のつばで隠してる

三田市 多田雅尚

ハチマキもねじれがあつて役に立ち
初デート映画を見ても上の空
ガラス張り言つた政治が不透明
発想を変えればセミも応援歌

三田市 辻 開子

夫を介護笑顔で一日頑張れた
叱るたび後味悪いころうち
五分五分の気持ち意見がまだ揺らぐ
目がさえて過去と未来の旅巡る

三田市 野口 晶子

穴あきを埋める笑顔のアップリケ
好き勝手言わせないとアミダクジ
プロポーズされても赤い糸見えず
好物と知って毎食出されても

西宮市 株元 玲子

束の間の骨休めです墓参り
猛暑つづき節電の声遠慮する
何時もニコニコネと担がれて笑う
スイッチ切り替えて未来へと歩く

西宮市 藤本 直

異議なしでまた選ばれる纏め役
御誘いは折角なれど寝て居たい
人間の生きる温度を試す神
ゆつくりと火傷している夏だった

三木市 山口 久子

土用うなぎ一言居士がにぎやかに
居候兄弟けんかの仲をもち
くすり多く腹一ぱいで食がない
親子連れ節電の為デパートへ

南あわじ市 萩原 狸月

参院選六年間の就活か
AKB覚えて置こう孫が来る
こんな名で将来親を恨まぬか
暇つぶし芸とも言えぬ芸を視る

奈良市 尾畑 なを江

領いたただそれだけであてにされ
人並みに波瀾万丈生きている
たいがいママが決断下してる
曲つても新鮮が良いナスキュウリ

奈良市 前田 弘恵

避暑地にとデパ地下めぐり時過ごす
頼まれてノーと言えない気の弱さ
一人旅不安を胸に抱いて出る
手の甲をつまみ水分確かめる

和歌山市 磯部 義雄

着払いだけど嬉しい贈り物
来年も猛暑に耐えているだろう
聴診器当てれば地球虫の息
アベノミクス子供を泣かす消費税

和歌山市 平田 元三

ベテランの歩く秘訣はマイペース
ご機嫌は如何か今日のお天気屋
夜空見て手術に感謝している目
今日は無事明日からはケセラセラ

岩出市 村中悦男

少年期抱いた夢にある未練
句読点慎重に打つ後期です
体記録爽やか妻にはげまされ
冗談もまじめ余生は豊かです

紀の川市 楠原富香
(富子改め)

真ん中で咲いて家族と手をつなぐ
耐えた分血となり肉となる拳
愚痴小言軽く包んで歩が揃い
秒針の音に人生急かされる

和歌山県 森下よりこ

風立ちぬそんな時代もありました
ばかだけど時々しやれた事をする
草を刈る娘私が働きよいように
直売所あつて老後も働ける

鳥取市 大前安子

選りに選り選んだ君と見る火花
火花跡コスモスが咲き招かれる
受け継いだ行事一つに育てられ
和尚様楽しく生きるお説経

鳥取市 近藤秋星

人類の悲願だ核の廃絶は
先の先まで案じていてもしょうがない
蝸が挽夏の曲を奏でてる
看護師がおなら出ると聞きに来る

鳥取市 坂本とも湖

宿題が親の能力越えだした
難問は宿題ですと座を外す
子は悩む宿題残る夏休み
増税は困る年金底をつく

鳥取市 谷口回春子

漲ったやる気はいつも空まわり
甘いと辛い心の中で闘ぎあい
蚊の奴が生死を賭けて血を吸いに
破れても直ぐに貼ります欲の皮

鳥取市 津村律子

地蔵盆お参りするのは爺と婆
よつこらしよ後ろで孫がリズム取る
真つ赤なスイカさえクロの種を抱く
向日葵に負けるもんかと背を立てる

鳥取市 山下凱柳

生き生きとエステにジムに通う妻
孫婦省爺婆俄然元氣出す
文学全集買って本箱箔つける
猛暑なのに夫婦の仲は冷えたまま

倉吉市 田中紀美恵

膝枕妻に甘えて耳を置く
そば枕かさかさ音が夢誘う
八十路でも私の心二十です
孫の守りばばに任せて母昼寝

倉吉市

堀

かずこ

どうしよう追いかけてくる古希がくる
この時世無理は通らぬ甘くない
リハビリの箸でつかめぬ豆が飛ぶ
どうしてもけなすことしか出来ぬ女

境港市

中井虎尾

顔のしわこれがわたしの年輪さ
夕日受けカラコロと鳴る石の浜
私は元気の証し医者はしこ
鬼百合は付いた名前に怒り咲く

米子市

生田和之

この酷暑室外機さえバテて来る
うたた寝で今朝の不眠を取り戻す
腰掛けに座り草引く夏の墓地
寛解に満足してるリウマチ医

米子市

池岡たけし

飴玉がほつぺ押し出す口のなか
豪雨去り小雨が心慰める
片思い胸の火傷に懲りもせず
健やかに暮せる日日より難う

米子市

小野鶴子

赤とんぼ何故か私が好きらしい
軽はずみ出した言葉を拭きたい
聞かずとも涙の量で察します
助手席で白だ黒だとやかましい

米子市 田村周子

奇妙な子きつと大物なのかもね
赤い糸奇妙な縁で今がある
世の中はすっかり変りスマホです
地震大国それでも原発やめへの

米子市 湯浅俊久

締切りへ気持ひとり前が出る
拍手して手ぶらで帰る競技会
最初から運を持つてる美男美女
心根はいい人なんだ娘婿

鳥取県 下田茂登子

自由とは一人になったことだった
団地には地蔵も宮も出来ぬまま
お隣の様子は見えぬ過疎だつて
亡母の歳越えればきつと百までだ

鳥取県 吉野いさお

挨拶は先に笑顔でするマナー
おとなしく静かに生きて大人と言う
無能知る時間長者の定年後
川柳を杖に見立てる古希の坂

鳥取県 橋谷静江

里帰りしても近所は知らぬ人
ストレスを溜めないように外出よ
どっこいしょ動く号令かけて立つ
この歳になつてまだまだ夢を見る

鳥取県 飯野 菖子

出雲市 黒目 英男

太陽とみどり豊かな国に住む
手料理も塩分控え家族愛

咳払いあなたと距離を作ります
百選を守る棚田に苗植える

鳥取県 田口 清帆

雲南市 菅田 かつ子

風鈴を吊って小さなクールビズ
クールビズ派手下着が見え隠れ

送り火と鎮魂の折り合い残す
咳ひとつしても氣遣う主婦がいる

松江市 相見 柳歩

安来市 原 煩惱児

最近のツキは君との巡り会い
来世でもあなたを磨く布になる

乾くまで待てない君が好きだから
稲妻のような優しさ響かせる

松江市 藤井 寿代

岡山市 永見 心咲

奪わねば私が消えてしまう恋
お迎えのママを待つてる小ぐま組

ぎりぎりにプライド保つ足と腰
幸せになりたくてつい手をつなぐ

松江市 山根 邦代

倉敷市 安東 モモ

言うたとして涼しくならぬけど暑い
人生は空模様にも似ていると

どの顔で他人の愚痴を聞けばいい
感謝です夢中になれることがある

提灯に明かりを灯し父母偲ぶ

大空をトンビのように舞いたいな

認知症まだまだですと追払う

もう一度チームワークのいる仕事

愛着の服が眠っている筆筒

出席は成らぬと愚痴る膝坊主

すつびんの野菜が待っている畑

一目惚れしたのか鳥側に来る

緋いてみる氏神寺の縁ゆかり

叱られたママに抱きつく目がきれい

プライドを捨ててすつきり養老院

梅雨明けの空は夏色夏の雲

好きじゃないわたしの影も飼っておく

フラッペを崩すふたりでミギ・ヒダリ

灼熱の恋を編んでるサンオイル

手の届く範囲に置いた隠れ蓑

「シニア」で映画チケットやつと言う

「風立ちぬ」きれいな空に「ゼロ」が飛ぶ

戦争を知らない世代私もだ

せみしぐれ朝からせかす急がせる

玉野市 片岡 富子

福岡県 本田 さくら

誉め上手嫁姑にバトルなし
主語のない夫婦の会話通じ合う

終活の仕方学んで今日も暮れ
ボランティア生き甲斐ほどの重さかな

竹原市 六田 半徳

冷蔵庫買い換えもあり火の車

捜しもの見付け小声で独り言

茶柱の立ち上がるのを待つてみる

ふる里の稲を育てる慈雨うれし

松山市 神野 きつこ

神宮の森で太古の息を吸う

昼は蟬夜は蛙の子守唄

アベックと言つても通じない息子

戦後処理生き証人が消えていく

高知市 三谷 待太郎

バラエティ前頭葉は右往左往

桃源郷サブリメントで願います

邂逅の話題長短ともに善し

この猛暑GDPもメルトダウン

北九州市 小松 紀子

世は変るメイクに朝食バスの中

空き家だなペンペン草が生えている

不出来でも私をみがいてくれる友

蟬なのか耳鳴りなのかちと迷う

還暦でバイクやめよが古希をすぎ

やつと雨草木歓声なり止まず

「あまちゃん」に五感集中食事時

物干竿今朝も蜘蛛君ごあいさつ

佐賀市 清水 園實

老いてなお囲碁チャンネルで見るテレビ

これからも息子と生きる泣き笑い

ストレスもその日その日に消して生き

暑さには散歩もさけて盆休み

唐津市 岩崎 實

わが行方極楽浄土予約済み

子や孫の成長部屋をせまくする

氣を楽に笑え笑えと言われても

懇切な暑中見舞いの字のやさし

佐賀県 真島 久美子

お友達ごっこ本気でするメール

ちゃん付けで呼べば家族の顔になる

人間を観察わたし空っぽに

ネックレス何度もつけさせる鏡

熊本市 杉野 羅天

三十度が涼しくなつてしまふ夏

城跡で眺め展望台いらす

アベノミクスブチ贅沢を持つて来る

アベノミクス乗った人やら乗れぬ人

窓開けてクーラーつけるおばあさん
山鹿市 前田 幸子

天気にも雨にも文句言うている
長々とでんわで愚痴をこぼす友
ど忘れを自慢で話す歳になり

山鹿市 三谷 たん吉

マスコミの言う事聞いて道迷う

十代と六十代が同なじ瞳

料理して他人喜ばす九十歳

がまんしろ犬ネコ鳥もみな暑い

山鹿市 米加田 恭代

焚くべきか迷い想いと遺品箱

領いて見つめてくれるそれだけで

握った手力を感じホッとする

また明日毎日言える幸一つ

メルボルン 藤原 ポン吉

案外と的を射ている独り言

侍と煽てに乗って首切られ

5時近く脳内ビール騒ぐ夏

ヨッパライ天と地ととり千鳥足

札幌市 富永 恵子

胸の中話すすきり砂時計

一頁めくれば語意が広くなる

刺のない言葉があつて座をまとめ

蛙の唄大皿盛りで平和論

札幌市 佐藤 登美子

一族を集めて庭のバーベキュー
ひまわりもうなだれている八月忌
身辺整理怪しくなった物忘れ
終活のプラン只今発酵中

弘前市 高森 一吞

不思議だなあ貴女が妻でいるなんて

グーチョコキパー妻の切ない長電話

喝采を浴びた拍手はきのうまで

年金を絞り続ける洗濯機

塩竈市 木田 比呂朗

紺碧の空に合わせるスーツ選る

宅配でみやげの届くグルメ旅

肩書がまだ顔に出る友と飲む

墜落のニュース横目にオスプレイ

鳥取県 松島 恭子

繰り返す病弱気を句が癒やす

呼びな変え親にどうして詫びようか

(前月分) 佐賀県 真島 久美子

わたくしの甘さに蟻がたかり出す

熱帯夜アリの歯型のある身体

日陰から出て一匹の蟻になる

平凡でいいのに蟻が自己主張

(前月分) 山鹿市 三 谷 たん吉

海外に誇れるものは何ものなし
こんな国誇りのカケラも感じない
政治屋と新聞テレビ全てゴミ
犬ネコも日本で生まれお気の毒

(前月分) 愛知県

樺

嶺 志

スポーツに政治持ち込み白け切る

甲子園昔の球児今いずこ

プロ野球華ある選手躍動す

携帯が所かまわず鳴る辛さ

第2回 さんだ川柳大会

開催日 10月15日(火)

場 所 三田ホテル(神鉄 ウッディタウン中央駅)

TEL.079-564-1101

受付開始 13:00 (会費500円)

出句締切 13:30

課 題	「ホ テル」	上 田	ひとみ	選
	「手ごたえ」	堀	正 和	選
	「自 然」	東馬場	美和子	選
	「都 会」	雑 賀	一 泉	選
	「わざわざ」	七反田	順 子	選
	「自由 吟」	北 野	哲 男	選

主 催 三田市川柳協会

連絡先 北野 哲男 TEL.079-563-4593

堀 正和 TEL.079-559-1255

薫風作品の推敲の仕方

楽 原 道 夫

陸橋は天下の嶮よ 梯子酒

昭和45年1月8日、川柳塔本社新春句会。「梯子酒」海士天樹選。「嶮」を「嶮よ」に変更して、「肉眼」「愛染」「古稀薫風」「師弟」「薫風句集」「喜寿薫風」に収録された。

「天下の嶮」は、「箱根八里」(鳥居枕作詩、滝廉太郎作曲)の文句取り。「箱根の山は天下の嶮」函谷関ものならず、萬丈の山千仞の谷、前に聳え後方にささふ(以下略)。

陸橋は天下の嶮の梯子酒

「嶮」の「の」の用法が分かりにくい。連体修飾だと意味をなさない。和歌などで用いられる比喩の「の」だとすると、「陸橋は天下の嶮のように感じられる梯子酒であることよ」という意味になる。

陸橋は天下の嶮よ 梯子酒

陸橋を、「箱根八里」で唄われている「天下の嶮」にたとえることによって、車を優先して人間をないがしろにしている現代社会を風刺する。そして、「天下の嶮」を越えるようにしんどいのは、実は梯子酒をしているからだ、と、すっとんと落とした句。

(川柳塔わかやま 501号より)

新川柳鑑賞 (20)

麻生 路郎

花の色は移りにけりな子を抱いて

(一瓢)

その昔と云つても、そう遠い話でない。曾てはあの女に対して心を動かしていたが、遂に談す機会もないうちに、他へ嫁してしまつた。その女にフト出会つたら、もう子を抱いていたが、以前の美しさは消えてなくなつていたというのである。「花の色は移りにけりないたずらに我が身にふるながめしに」からの引用句で、複雑な味を出している。

ババママをどなりつけてる一人っ子

(七面山)

ババママにとつて、一人っ子はそだてるというよりも、寧ろ一つの玩具だという観方が出来るであろう。あまやかされて育つた一人っ子が、小さなタイラントになつたとて何の不思議もない訳だ。そこを巧みにとらえたのが、この句である。

石投げる樂しき都会の子は知らず

(水客)

氷の張りつめた田圃の氷上へ氷塊を投げる

と随分遠方まで飛ぶので、田舎の子ども等はそうした楽しみを持つものである。そうかと思つと、山の上から、或いは海辺で石を遠く投げることを競争して楽しむものであるが、そうした楽しみを都会に住んでいる子供たちは知らないと言ふのである。石を投げればすぐに、そこらの家や人にあたる窮屈な生活をしている都会の子をあわれんだ句である。

まにあわぬ順で日曜起きて来る

(宗太郎)

「明日は日曜だから、ゆっくり寝よう」と云つておいたのに、

赤ん坊が先ず目を覚ます、するとその横に寝ていた三つの子が起きて来る。次に幼稚園、小学、中学へと通っている子どもたちが起きて来ることを詠んだもので、中年夫婦の家庭をまざまざと見せてくれる句である。

枯すすきだけですババのハーモニカ

(方大)

「お父さん、ふいて」と子どもがいう。

「ああ、よし、よし」とは云うが、このババのふけるのは、野口雨情作詞の「おれは河原の枯すすき」だけだと言ふのである。

親に対する親愛感も出てゐるし、ババの時代感も出ていて面白い。

認識をさすべく突如子は泣きぬ

(夏六)

赤ん坊は全身が声である。

生きたがための唯一の武器は泣き声である。「認識」や「突如」と云うかたい言葉がこの句をいかに巧みに効果づけているかを知らねばならない。それ等の硬い言葉を生かすために「さすべく」や「泣きぬ」と云うような文語を用いたことも又、適切な用法だと言ふことが出来る。

子の目にも二度目の父は金があり

(草一郎)

この句の裏には、この子の母の複雑な素性が隠されていることに気づくであろう。

何としてでもこの子を育ててゆきたいという母性愛が、金持である二度目の父との関係を結んだのであるが、こどもはそこまでは知らない。知らないが二度目の父には金があり、最初の父のように貧乏で母をいじめめるようなことのないことだけは判るが、やはり二度目の父にはなじめないという子ども心理を巧みにとらえている。

この雑煮で育つた子等がみな遠し

(素生)

この句を一読すると老夫婦が静かに迎えた新春の生活が偲ばれる。お祝いの雑煮を喰べたにつけても思い出すのは遠く離れて生活している子等のことである。下五の「みな遠し」に親心がいかになくにじみ出ているではないか。

西尾 葉句抄

(定本『西尾葉句集』平成八年発刊)

或る日

飛び乗りの今度は切符さがし出し

踏切まできて鶏引き返し

音痴今日詩吟を習うことにする

仮縫いのお世辞前から後ろから

どっちが生意気だと窓口言い返し

誰にきいても知らん知らんという鉢

おまえ使っていたんかという鉢

雨洩りの型ピカソともマチスとも

名曲のすんだ拍手へ目をさまし

挨拶のものをもらった声となり

倉の鍵旧家という音で開き

御近所が舌打ちをする家が建ち

札束を肌の温みのままで出し

昭和三十七年十二月五日工場全焼

焼け跡で星を見上げている広さ

琥珀色の湯呑の主は生字引

敬老敬老とタクシーへ押しこまれ

カメラアイ蜻蛉の目玉蝶の髭

ラッシュ嬉しまさに唇ふれんとす

靴べらは手品のように仕舞われる

吸物の冷えたを板場くやしがり

ターミナル再会という名の喫茶店

平成二十五年度 路郎賞

路郎賞準優秀作第一席

檀原市 居谷 真理子

河内長野市



山岡 富美子

自然体それがわたしの処方箋
ラブソング全身麻酔かけにくる
あんばんのお臍に母と子の昭和
絵蠟燭おひとりさまの仄明かり
鍵穴に野火の奔った跡がある

路郎賞準優秀作第二席

鳥取市 両川 無限

定年後の趣味である川柳がいつしか「おひとりさま」のパートナーになりました。それが喜寿という節目に、こんなに大きなご褒美を戴けるなんて夢想だに致しませんでした。

柳 歴

平成14年 川柳塔社同人

平成17年 路郎賞準優秀作第二席受賞

同年 朝日新聞「なにわ柳壇」入選

百句集「賛歌」上梓

平成23年 檸檬賞受賞

この喜びを通過点に、また新たな一步を踏み出したいと存じます。支え続けて下さいました先生方と、柳友の皆様にかかるお礼を申し上げます。有難うございました。

嘘泣きも作り笑いもしてこの世
悔しさを封じ込めてるグーの中
絶好調また悪知恵が湧いてくる
あの頃を辿る汽車ポッポに乗って
長旅の果てに横倒しのモアイ

平成二十五年 川柳塔賞

川柳塔賞準優秀作第一席

瀬戸内市 東 檣 ますみ



佐賀県

真島 久美子

コンパクトあとは尻尾を隠すだけ

誰に逢う為の紅ではないけれど

散らかしているのは誰の嘘ですか

両の手は空いたままです風の音

吸い殻が一つさっきのことは過去

柳 歴

朱夏さんと知り合い、川柳塔に投句を始めて一年、毎月なんとか投句をしている中での嬉しい報告でした。信じられない気持ちと、私なんかこんな大きな賞を頂いていいのだろうかという恐怖が半々です。好きなように作句し、のびのびと川柳の中で遊んでいる途中です。この賞に恥じないように、これからも頑張っていきたいと思っています。ありがとうございます。

める。

両親の影響で5歳より川柳を作り始

平成8年 番傘本社同人

平成15年 川柳 港同人

平成19年 川柳 葦群同人

平成24年 川柳 誌友

平成24年7月 卑弥呼の里川柳会を立

ち上げる

川柳塔賞準優秀作第二席

高槻市 原 洋志

黄泉路までワンメーターで行ってくれ

棚ボタはいつもとなりに落ちてくる

きつく抱く君の鑄型をとるように

起承転錙下ろした現在地

約款を抜けると広い麦畑

路 郎 賞 得 点 表 (応募総数 146名)

1 位 = 5 点 2 位 = 4 点 3 位 = 3 点 4 位 = 2 点 5 位 = 1 点

(表の数字は得点)

選者 \ 作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸	4	1		3						2			5		
西出 楓楽	3					2		4				1		5	
早川 遡行		2			4		5				1		3		
三 浦 強 一	4			1	3									2	5
水野 黒兎	4			2			1						5		3
宮 西 弥 生			2	5			1						4		3
村上 玄也	1			2			5	3						4	
山本希久子	4			2					1				5		3
西口いわゑ	1						3			2			5	4	
三宅 保州	3						4				1			2	5
川崎ひかり	5							2		1				3	4
竹治ちかし	2			4			1				5			3	
牧野 芳光	3								5		1		4	2	
計	③④	3	2	19	7	2	20	9	6	5	8	1	③①	②⑤	23
	山岡 富美子	山田 耕治	金子 美千代	福士 慕情	白川 淑子	江島谷 勝弘	井丸 昌紀	神夏磯 典子	斉尾 くにこ	酒井 真由	岸 桂子	柿花 和夫	居谷 真理子	両川 無限	安土 理恵

川柳塔賞得点表 (応募総数 77名)

1 位 = 5 点 2 位 = 4 点 3 位 = 3 点 4 位 = 2 点 5 位 = 1 点

(表の数字は得点)

選者 \ 作家	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
小島 蘭幸					1					4		3	5	2	
西出 楓楽			1							3	5			4	2
早川 遡行		4		2		1			3				5		
三浦 強一				4		2						1	5	3	
水野 黒兎		4		5						2			3	1	
宮西 弥生	3					2		1			4		5		
村上 玄也					3			2	4	5				1	
山本希久子				3		4				1	2			5	
西口いわゑ	2			1	5				4				3		
三宅 保州	2										1	3	5	4	
川崎ひかり	5	2		1							3		4		
竹治ちかし	3						1	2	4					5	
牧野 芳光	2			4	3	1							5		
計	17	10	1	(20)	12	10	1	5	15	15	15	7	(40)	(25)	2
	花岡順子	藤井寿代	藤田千休	原洋志	神野きっこ	國實力	生田和之	神野千恵子	高杉力	森ふみか	中前幸子	菅田かつ子	真島久美子	東横ますみ	関よしみ

受 賞 作 品

岡山市 工 藤 千 代 子

ゴメンネの代わりに「リング剥きますか」
心配をかけると息子顔を出す
しばらくは静かにしろと歯が疼く
ダイエツトやる気ばかりが日々瘦せる
ベルトを外してダルマさんに戻る

評 工藤千代子：作者と夫や息子との距離感が心地良

い。また、自分自身を見つめる目も冷静で「しばらくは静かにしろ」「やる気ばかりが日々瘦せる」など、表現も的確。

三浦強：あらゆる素材を対象にして「句を褒めて掲載料」「酒飲みを観察」「親バカの付けた名前」等、分析力も抜群。

米沢俣子：ユーモアを持たせて軽く詠っているが、それぞれの句には哲学的とも言える深い味わいがある。

坂上淳司：うっかり見逃しそうな出来事をしっっかりキャッチしているのは長年の修練の賜であらう。

(新家完司・記)

準 賞 作 品

札幌市 三 浦 強 一

句を褒めて掲載料という手口

酒飲みを観察してるウーロン茶

親バカの付けた名前に負けている

大阪府 米 澤 俣 子

連休も走っています霊樞車

捨てられぬものに形見とブライドと

盗られたとばやけばほけの始めなり

河内長野市 坂 上 淳 司

戦績を付けて碁敵から賀状

さて何を楽しめますか妻は留守

あほやなと言われほんまやなと思う



工藤千代子

こんな大きな賞を戴いたことに大変驚き、また感謝しています。目に見えぬ何かの糸に手繰り寄せられるように「川柳塔」とご縁を結ばせて頂き二年。多くの柳友の一員にさせて頂いたことを幸せに思っています。

この賞を励みに、根を張り枝を広げる努力をしたいと...与えられたご縁を大切に致します。有り難うございました。

柳 歴

平成15年 西大寺川柳社入会

柳都社 入会

平成18年 柳都社 同人

平成23年 川柳塔社 誌友

平成二十五年度 檸檬賞

受賞作品

青森市 守田 啓子

哀しみの対角線に紙おむつ

評「延長線」でなく「対角線」とした所が、この句の命。何事にも前向きに生きて行けたら理想的。高島作品、境界の先は自分の力の及ばない所。悔しいが成り行きに任せるしかない。大谷作品、見守られているという安心感の中、ひたむきに生きる姿に共感。

(森山 盛枝)

評 川柳塔社の大賞句に「紙おむつ」を見るとは思いませんでした。今回に限らず、檸檬抄の男女の共選は両者の感性・視点の違いにより、いろいろな面を浮彫にしてくれます。今回もその意外性・面白さの表れでしょう。「哀しみの対角線」の表現にハッとさせられました。準賞の啓子さんの句、理屈を詠んでいるようで、なるほどと自然に頷かれます。篤子さんの句、月と亡夫が共に覗いてくれる時を思い浮かべたり、候補作品も理性と情感のバランスよく楽しませて頂きました。

(奥田みつ子)



守田 啓子

この度は多数の応募作品の中から檸檬賞に選んで頂き心よりお礼を申し上げます。これからもゆつくり遠くまでみなさんと一緒に歩いて行きたいと思えます。ありがとうございました。

準賞作品

高島 啓子

限界を過ぎて拋物線になる

大谷 篤子

月も亡夫も覗いてくれる窓を拭く

候補作品

西内 朋月

痛烈な批判を浴びる浅い傷

堂上 泰女

青空と組んで弾ける鼓笛隊

柳 歴

平成14年 北野岸柳川柳教室で川柳を始める

平成15年 おかじょうき川柳社会員

平成24年 川柳塔社誌友

東奥日報社東奥柳壇最優秀賞受賞

受賞作品

三田市 福田好文

妻の背の丸さに気付くフルムーン

評 好文さんの受賞句には、年輪を重ねた夫婦のホッとした気持ちとお互いの感謝が伺えます。忙しい毎日を忘れる「フルムーン」で「背の丸さ」に気付きながら何も言わない夫が目に見える様です。準賞の真理子さんは潔い生き様を暗示しながら、「つもり」の措辞に決意と心の揺れを感じました。

金が万能と言う世の中は、愛が希薄になっています。気がつけばどうする……朝子さんの警鐘。

評 普段気付かなかった妻の背の丸み。長年連れ添った妻への感謝と労りが伝わります。心温まる句を頂きました。

準賞 真理子さんの句、サヨナラを前向きに捉える爽快感に若さを感じます。

朝子さんの句、札束で欲しいものが手に入るとは限らない事実を、愛で表現されました。

どの作品も味わい深い佳句でした。

(小川てるみ)



福田 好文

この二、三ヶ月暑さのせいか時間はあるのに句が出来ず、悩んでいたとき、西出理事長より直々に一路賞受賞のお知らせを頂きました。驚くと共に今後の精進への激励と嬉しく受け止めて頂きました。川柳さんだの「誰が生徒か先生か」のメダカの一人として楽しく一緒に泳いで下さる仲間の皆さんや支えてくださる方々のお陰と感謝しています。有難うございました。

準賞作品

サヨナラのあとは振り向かないつもり 居谷真理子

札束を積んで愛には飢えている 大内 朝子

候補作品

天界のリズムで四季が巡りくる 小沢 淳

共感を呼ぶアピールが慕われる 夏目 一粋

母と子のけじめ産声その日から 上垣キヨミ

いい処褒めてゆつくり待つてやる 坂 裕之

柳 歴

平成16年3月 川柳さんだ入会
平成20年5月 川柳塔社 誌友
平成21年7月 川柳塔社 同人

受賞作品

藤井寺市 太田 扶美代

友達をいっぱい持つっている桜

評 受賞作品の素晴らしさは、観桜に来た人達を桜の花の側から見て、これを友達であると表現した上手さである。

準賞作品は、独居生活者の寂しさと、幼児教育の肝要さをそれぞれ一言で言い表している。 (太田 昭)

評 賞候補の作品が沢山あった中で、友達のを頂いた。桜を持つ人を引き付ける摩訶不思議な力、延いては、それを作者である扶美代さんに置きかえ、自身を創り上げていく姿に感動しました。

準賞作品は、独居世帯と幼児教育という今の時代が的確に詠まれている作品で、誰にでもわかってもらえらる作品だと思います。

(政岡未延子)



太田扶美代

各地柳壇受賞の報らせを頂き、夢のようでもまだピンと来ておりません。けれども、これを機に一層頑張つて私の句を選んで下さった先生方に、褒めていただけると言うような句を作らねばと思っています。

本当にありがとうございました。

準賞作品

ゆつくりと帰るだあれも待つてない 上垣キヨミ

幼稚園靴がきつちり脱いである 山田 耕治

候補作品

ひと言にたつぷり塩が効いている 岸 桂子

都合良い時だけ確かめる絆 竹治かし

合掌を解いて両手の忙しさ 松山 芳生

予定表うろろしてる暇がない 高杉 千歩

柳 歴

平成5年 羽曳野川柳川柳藤井寺入会
平成11年 川柳塔社同人
平成13年 茴香の花賞受賞
平成15年 月間賞永久保持者
平成13年 路郎賞優秀作第二席受賞

受賞者の皆さまおめでとう

小島 蘭 幸

平成25年度の六賞を受賞される皆さまに、心からお喜びを申し上げます。

猛暑の中、今年も8月12日に、川柳塔社事務所で第一次選考を行いました。第一次選考委員6名が、それぞれ、路郎賞、川柳塔賞の応募作品の中から佳句をチェック、その作品の中から佳句のチェックの多い順に私が最終の15名を選んで第二次選考の皆さまにお願い致しました。

路郎賞の山岡富美子さんは、路郎賞候補に常に選ばれていた好作家で、その自選の力は素晴らしいです。準賞のお二人は各地の大会でも常に上位に入選されている実力者です。

川柳塔賞は、川柳家族として知られる真島久美子さんです。準賞のお二人も好作家です。

愛染帖賞の工藤千代子さん、檸檬賞の守田啓子さん、一路賞の福田好文さん、各地柳壇賞の太田扶美代さん、おめでとございます。

今回の六賞は女性の活躍が顕著でした。地域的には九州から東北と幅広く選ばれていました。そして何よりも新しい風を喜びました。第一次選考をして一番感じたことは、もっとと多くの人に自選を楽しんで頂きたい。選句力を磨いて欲しいということでした。

受賞者の皆さまおめでとう。

二賞選考経緯

木本 朱夏

連日猛暑の続く八月十二日、第一次選考委員（蘭幸主幹・楓楽理事長・大輪副主幹・完司副主幹・月子副理長と木本）が事務所に集合。路郎賞には一四六名、川柳塔賞には七七名の応募があった。

六名が選考した中から主幹が最終で十五名を決定。各地の一名の選考委員に郵送した。一九日に選考結果が揃ったところで集計。蘭幸主幹に結果をお知らせした。

路郎賞に輝いた山岡富美子さんは例年候補にあげりながら、惜しくも賞を逃していたが、このたび見事に栄誉を手に入れた。水煙抄は川柳塔の誌友歴が一年の真島久美子さん。家族全員が川柳をたしなみ、久美子さんも子供の頃から575と指折っていたという。こんごの川柳界を背負ってゆく逸材。川柳塔にも新しい風を送ってくださることを期待したい。

毎回思う事は自選力の大切さである。一年間川柳塔誌に発表した作品の中から、僅か五句を自選することは大変難しい。路郎師も自選の大切さを説いている。

賞だけが絶対ではないが、命ある句を指して日々研鑽を積みみたいものである。

二賞候補者所在地

	1	2	3	4	5	6	7	8	9	10	11	12	13	14	15
路郎賞	河内長野市	尼崎市	犬山市	弘前市	神戸市	大阪府	大阪府	大阪府	鳥取県	篠山市	出雲市	堺市	橿原市	鳥取市	橿原市
川柳塔賞	大洲市	松江市	豊橋市	高槻市	松山市	竹原市	米子市	大阪府	大阪府	備前市	山口市	雲南市	佐賀県	瀬戸内市	富田林市

英語 de Senryu ②②

麻生路郎句集 『旅 人』

英 訳 吉村 侑久代 Kim HORNE

(岐阜保健短期大学)

酒とろりとろり大空のころこかも

taste of Sake

mellow and round

might be a spirit of the heavens

なあちろり これから秋に親しまう

Dear Sake warmer!

let's enjoy drinking

and tastig autumn

～リバーウィローのため息～ (川柳の海外普及の立役者: R.H. ブライスの著書(3))

Edo Satirical Verse Anthologies 『江戸川柳』(北星堂 1961)

ブライスは先月号に紹介した *Japanese Life and Character in Senryu* の出版と同じ年に、312 頁に及ぶ *Edo Satirical Verse Anthologies* 『江戸川柳』を出版しました。ブライスは、この書の中で川柳の根本精神はギリシャの箴言「汝自身を知れ」にあり、川柳は人間の本性が何であるのかを思い起こさせると述べています。西洋思想の土台である「汝自身を知れ」、この精神を川柳の根本精神として記述するブライスの解説によって、英語圏の読者は川柳を容易に受け入れることができたと思います。さらに、ホーマー、シェクスピア、ラテン語の詩、聖書らの西洋古典を、川柳と比較・対照・相似させることで、川柳の内容が西洋の文学の中にも見出されると説明します。この方法は日本の文芸に興味を持った在日外国人の中でも、ブライスを於いて他にはなされていません。

また本書で「シェクスピアが同時期のクリストファー＝マーローに影響を与えたように、芭蕉は鬼貫に、そして『柳樽』は慶紀逸(1694-1761)の『武玉川』を生んだ」と述べ、江戸時代の「古川柳の歴史」と『武玉川』18編18冊からの古川柳英訳とそれらの川柳の解説をしました。その中の一つを紹介しましょう。

うつくしい女房呵るが自慢にて

He is proud/Of rebuking/His pretty wife.

ブライスはこの句を「とても日本的。この夫は自分が素敵な女房を持っているか他人に自慢したいのだが、人も羨む美しい女房を叱咤することで、女房はわがものであると暗に人に悟らせ、女房自慢をしている」と解説します。素直に女房を褒めないのは男の沽券に関わるのでしょうか。窮屈で偏屈な愛情表現ですが、今も案外あちこちに転がっていますね。でもこの感覚を引きずっていると、現代社会では怖い目に合いますよ。

誹風柳多留一二篇研究 4

いでしうか。
小栗 賛。町人。
清 同。

23 さてひろい野だと仕丁らさがす也

細井 龍夫・伊吹 和男
山田 昭夫・石川 道子
小栗 清吾

清 博美

21 太神宮さまへとかぐら奪人来る

細井 伊勢太神樂の講社は七組が現存し、今

も三百六十五日、毎日、どこかで布教活動をし

ている。太神樂は獅子舞と放下芸（曲芸）

で構成されており、行く先々で悪魔祓い、悪

霊退散、五穀豊穡、海上安全、大漁祈願、飲

びの舞い何でもござれ。各戸歴訪の門口で

は獅子の独り舞で済ますことが多く、舞終わ

ると応分の初穂を受け取り、お札を授与する。

また、獅子に囃んで貰うと御利益があるとか。

神社の境内などでは獅子舞の他に放下舞の他

に放下芸の妙義の数々を披露し、獅子舞も夫

婦舞をしたり、猿田彦を登場させたりもする。

太神宮を引つれて御しゆつ立ッ

二〇二〇

清 賛。

22 おれを大名にしたらとすけんいひ

細井 懐中が淋しいのです見物を余儀なくさ

れている浅黄裏のやるせない願望。「俺を大

名にしてくれたら、あの三分女郎どころか、

総揚げにしてやるのになあ」とぼやくこと頻

り。吉原での情景。

おれが大名たとアノ芸者コノ娘 一一〇四

心でハあいつをなあと見た斗り 明元松 4

山田 賛。但し、浅黄裏はどうでしょうか。

石川 同右。浅黄裏よりは町人の言葉ではな

太神宮さまとし、がものをい、 安八天
大神樂獅子をたくるハ仕廻なり 三八一〇
太神樂仕廻ふとし、をメころし 安五仁一

細井 「伊勢物語」第六談に題材を採った句。
後に清和天皇の后（二条の后）になる藤原高
子を在原業平が芥川（大阪府高槻市を流れる
淀川の支流）の方へ連れて逃げて行ったので
仕丁（雑役夫）らが「それにしても、だだっ
広い野原だ。これでは見つけるのが大変だな」
とぼやきながら探している。

芥川草をわけてのせんぎ者 八二六

御后を芥の中でさがし出し 二四二三

助兵衛ときさを原でとかまへる 安八梅 4

山田 南得二氏は、那須野での玉藻の前の句
とされています（『武王軍談』）。検討の余地
なきや。

小栗 「広い野」にこだわつて「玉藻の前」
に左袒。芥川の方は、あまり野ッ原という感

じがない。なお、「史伝」では同じ「伊勢
物語」の（十二武蔵野）に分類されている。

武蔵野は広い野にびったり（特に川柳の題材
としては）なのだが、「武蔵野」の話の内容

は「仕丁がさがす」には少し遠い気がする。
「江戸砂子」は「芥川」に分類しておられる。
清 玉藻だと思ふ。

24 百出すとれい人シつかへ手をかける

細井 神社の神楽堂で奉納する神子舞は通常は十二文のおひねりを投げるが、百文出すと、錫だけでなく、特別に剣の舞を奉納してくれる。百文出した時に、麗人——神子が刀の柄に手をかけ、舞の準備をする、その仕草をとらえた。

神楽堂下タにハ置カぬ美しさ

明四礼5

百やると荒事をする神楽堂

八24

小栗 賛。但し、川柳で「レイジン」は、ほぼ全て「伶人」のように思える。伶人は「音楽を奏する人。特に、雅楽を奏する官吏。楽人」(「日」)であるから、厳密には神子は伶人ではない。しかし、その辺はアバウトに考えてもいいように思う。少なくとも私には「麗人」という字は落着かない。

清 「れい人柄へ手をかける」は文句取ではないかと、気にかかるフレーズだ。なお「麗人」は比較的新しい言葉(明治時代力)ではないかと思っている。詳しく調べたわけではないので、何ともいえないが……。

25 そはへ寄るまいぞとみゝのあかをとり

細井 簪で耳掃除をしている乳母が、「危ないから、まといつかないで。いい子だから、あつちへ行つて」と幼児を追いやっている図。

御ひあきだそうなとかりて耳をはり

明五礼3

目を細くする簪の耳くじり

嘉三風22

かんさしをなめて娘ハ耳をかき

宝九梅

清 乳母と幼児に限定せずとも。

26 いゝ月夜やつたらしつたものにあひ

細井 いい月夜といえば八月十五夜。月に浮かれてふらふらと、足の向く先は言わずと知れた新吉原。日本堤まで来たなれば、居るわ、居るわ、何人もの知り合いに逢うことに。はてめつらしいたいめんと土手でいひ

やはなこととこへ御出と土手でいひ

一三三

山田 賛。でも吉原までは考えない。

一四二

小栗 同右。吉原を示す措辞がないように思う。なお、月の紋日は、月に浮かれてふらふ

ら来るものではなく、せつかれた挙句に来るものである。
清 同。

27 おいこむと後生を願ふよしの丸

細井 吉野丸は最大級の屋形船で、向島の桜見や川開きの納涼などの隅田川での派手な船遊びが終わると、一転して施餓鬼船としても使われる。それを、老込む、後生を願う、と表現したもの。

御寺にも御てんにもなるよしの丸

安五礼1

あわれにもおもしろいにもよしの丸

天四満1

あつたら船に坊主だのば、あだの 二14
山田 礎でもよいと思いますが、元気な頃は吉野丸で遊山したものが、老込むと同じ吉野丸でも後生を願うようになるとは考えられませんか。

小栗 山田説、理路整然としているが、吉野丸の句の約束からみて、「後生を願ふ」(施餓鬼)の関りで「老い込む」を使っただけ、と考える方が素直と思う。

清 季節による船そのものの移り変わり。

まま事で遊ぶ

小栗清吾

江戸時代の育児書「小児必用養育草」という本に、「女の童二三歳よりは、炊事といふ戯れをなす、これ土座に延をしまして、おなじ歳ごろの小児あつまりて、食炊くまねをすることなり」とあります。江戸時代から、まま事は子供、とくに女の子の好きな遊びだったようです。

まま事のかかさんになるおちゃっぴい

五〇一四

まま事を中心人物であるお母さん役は、おちゃっぴいの担当です。どうかすると大人をいいまかすようなませた女の子ですから、お母さん役にはびつたりです。

しかし、所詮まだ幼児です。危ないことをしないか、母親は心配でなりません。

まま事の鉋丁母の気を削り

一五九六

小刀を鉋丁に見立てて、草を刻んだりする

と、神経がすり減ります。

その点、乳母が付いていれば安心です。

まま事の傍で御乳母は足袋を刺し 明二礼6

乳母は、傍で足袋の繕いなどしながら、見守っていますが、時には、

まま事の献立乳母が申し上げ 七四三

「その草をこの泥で和え物にしたら」などと一緒に遊んでやったりします。

女の子がおしゃまなの比べて、男の子は年の割に幼いものです。

まま事の亭主も客もがんぜなし 七二〇

まま事はどぶへ入った子がお客 拾九七

女房の言いなりになる亭主役や、路地に見立てた乾いたどぶをやってくるお客さん役をやらされます。

本物の家庭がそうであるように、楽しいまま事にも事件が発生します。

まま事の店立てをする大屋の子 五〇一四

「店立て」は、大屋が借家人を追いつくことです。大屋の子が、まま事をして子供

たちに意地悪をして追いつくというのです。それを「店立て」と表現したのが可笑しい句です。そうなれば、

まま事の店替えするしよ引き一六五七

まま事道具を乗せた庭をずるずると引つ

張って移動することになります。

まま事の店立てをする俄雨 一二三別14

こちらは意地悪ではなくて俄雨ですから、どうしようありません。

さて、仲良く遊んでいたまま事も、時にはもめごとのあることがあります。

杯盤狼藉まま事にもめが出来 一〇八三

「杯盤狼藉」は、酒宴の後、杯や皿鉢などが席上に散乱しているさまをいう成語です。

「もう、あんたとは遊ばない！」などと言って、おもちゃのお皿などを投げ散らかして喧嘩をしたのです。

まま事の喧嘩家財を没収され 五九二〇

そうなれば「ほらほら、喧嘩するなら、もうお終いにしなさい」と、お母さんにまま事道具を取り上げられてしまします。

このように、江戸川柳にはまま事を詠んだ句がたくさんありますが、やはり名句と言えはこの句でしょう。

まま事の世帯崩しが甘えて来 初4

「世帯崩し」は、夫婦喧嘩などで離婚することです。まま事でしつかりした女房役をやっていた女の子が、亭主役の男の子と喧嘩、とたんに幼い子供に戻って、母親に甘えてくるといふ可愛い光景です。



追悼のことば

吉村一風さんを偲んで

初山 隆盛

あのお元氣だった吉村一風さんが、七月十六日ころと逝きはった。謹んでご冥福をお祈り致します。

八尾市在住同士で川柳わたの花、八尾市民川柳会と同席した。故高杉鬼遊先生以下、宮崎シマ子さん、故山下美津留さん、故片上英一さん、村上ミツ子さん、大内朝子さんと研修に励みました。

(わたの花の句から)

脱サラの決心妻に煽られる

渡り鳥ラストから子の安否見る

冗談と分り遅れて笑う母

みごもって母の情けを教えられ

猫にまだ引越すことは言うてない

バランスよく野菜と魚食べてます

通り過ぎた足音きくと福の神

八尾市民川柳会には毎回知名の作家の交流会を得て共共お手伝いに専念しました。

故大路美幸さん、土田欣之さん、頭師隆・

律子ご夫妻、故入口とみおさん、故久保田元紀さんら懐かしい想い出です。

(八尾市民の句)

コマ^{コマ}シヤル流し宣戦布告する

お逮夜の市なつかしい古着買う

うれしさへ顔いっぱい歯が笑う

からくりの歯車音の音がする

ものいわぬ人だがきつといふし銀

神様も絵馬は先着順にする

嫁ぐ娘に家族と結ぶ紐持たす

損得を言うから誰も頼らない

好きなこと言うて夫婦で頼り合い

てのひらを開けば愛の字がいつぱい

時計の針止ってほしい嬉しい日

すて石がずばり当って日の目見る

よく笑う妻に健康もろてます

木綿針母になつてよく動く

傷心を包んで光るくにの海

枯葉舞い虚しさよる竹藪

練ったはずの言い訳うまく出てこない
レンズ通すと地球あちこち泣いている
一風さんは戦後松下電器の要職を辞し、
八尾市でインテリア業を旗上げされた。人
一倍の努力と時代にマッチして大成功を収
められた。よく「一風さんもう十年早くス
タートしてたら商社山善クラスに成ってる
よ」と言ったものでした。

それだけ商才に長けた努力家でした。若
かった二人はよくお酒を飲み、デイスカッ
ションの繰り返しでした。

お若い一時期川柳をされていた。フアウ
スト誌も見たことがある。だが仕事のため
中断された。平成元年頃に復活され、知り
合ったのもその頃でした。川柳塔同人になっ
たのも二人は同期です。

平成二十二年 路郎賞に輝く

湧き水の神の祈りの手を洗う

知らん顔しとこう老いの地獄耳

美しく生きるよなんてむずかしい

子を叱る己を叱咤するように

生き恥をいつぱい食べてバネになる

川柳の一番でかい花を咲かせた一風さん

永久に枯れません。

ご冥福をお祈りします。 隆盛

愛染帖

新家 完司 選

シドニー

坂上のり子

お金にはいつも大雑把でいたい

(評) 浪費ではない。価値観の中心からお金を外し鷹揚且つ自由に動く。それが理想。財政に余裕がなければできないことだが…。

青森県

松山 芳生

蚯蚓にも蛇にもなれるDNA

(評) その人の性格など、芯の部分は遺伝子が司っている。が、そこからどのように伸びて行くかは、各々の努力にかかっている。

佐賀県

真島久美子

コロツケになつてしまった男たち

(評) 菌ごたえも強烈なスパイスもないお子様向きの甘口コロツケ。増殖を続ける肉食系女子にとっては、いささか物足りない。

大阪府

藤原千恵子

「買え」「買わぬ」大泣きの子に負けぬ母

(評) 父さんならすぐに負けるだろう。爺ちゃんなら二つ返事でホイホイ買うだろう。だが、強い母は子の将来を考えて妥協しない。

神戸市 山口 光久

二番手でいいと思えばだれてくる

(評) 負けてたまるかという闘志が緊張感を生み成績に繋がる。「二番手でいい」という生ぬるい気持ちでは、三番手にもなれない。

河内長野市

穂口 正子

鏡見てこれが私と言ひ聞かす

(評) いくら言いかせても納得し難いであろうが…。それが現実なら「世界で唯一無二の私だ!」と、開き直って堂々と行こう。

八尾市

高杉 千歩

余命など知る術もなしルージユ買う

(評) 明日のことさえ分からないのに、あと何年生きておれるかなど誰にも分からない。ならば、今を楽しく過ごそうではないか。

鳥取市

岸本 宏章

長生きをしようと言われたことはない

(評) 奥様としては、夫がまだ元気なので、「わざわざ言う必要はない」と思っているのだろう。と、良い方に解釈しておこう。

豊中市

荒巻 夢

白髪と杖でほとんど許される

(評) 黄門さまの印籠よりも絶大な効き目がある「白髪」と「杖」。これさえあれば天下無敵。何処へ行っても丁重に扱ってくれる。

奈良市

岩本 浩二

羅針盤正確ですか日本丸

(評) 先の参院選で大勝利独走態勢を固めた

与党。さて、進む方向に誤りはないか。国民全員がしっかりと監視しなければならぬ。

大阪府

栃尾 奏子

あなたから好きだと言ったのは事実

お嫁さんになってと言ったのもあなた

豊中市

水野 黒兎

宇宙では体重計は役立たず

万障を繰り合わずに義理を欠く

豊中市

松尾美智代

水不足だけど私は水ぶくれ

優先座席七十歳はいいですか

三田市

福田 好文

刈り終えてこれでどうだと聞く床屋

一匹で鰻井四つ作る妻

橿原市

居谷真理子

正直に生きておりますすれすれで

食卓に今日もおんなじ顔の人

八尾市

田邊 浩三

目指す箇所なかなか指さぬ体重計

喜寿迎えわが人生も八合目

鳥取市

有沢せつ子

寝るための読書だんだん目が冴える

道掃けば手伝いたがる五歳の子

大阪府

江島谷勝弘

反論へ間合いを図る深呼吸

階段でよろけるほどの酒はダメ

和歌山市

武本 碧

笑うという手軽なアンチエイジング

岡山市 丹下 凱夫
ムシアツイムシアツイと蝉鳴いている

大阪市 古今堂蕉子
暑い暑い言いつつ飲むわ食べはるわ

高槻市 片山かずお
汗をかく行です盆の墓掃除

三田市 上垣キヨミ
娘らに説くいつかお世話になるお盆

茨木市 藤井 正雄
兎追いし里に定年後は戻る

大阪府 米澤 淑子
何たつて律儀な足袋の右左

不揃いの野菜大盛り無人店
紀の川市 辻内 次根

CDの一枚分の昼寝する
河内長野市 谷 久美子

独り者お茶はボトルの二リットル
高瀬 霜石

気短になった夫を奉る
弘前市 高瀬 霜石

幽霊はいないが亡者たんといる
堺市 矢倉 五月

父さんの威厳ででんと瓶ビール
三田市 堀 正和

大切なお客様には瓶ビール
三田市 堀 正和

真ん中の席で中座をあきらめる
三田市 堀 正和

夕方は重そうになる付け睫毛
三田市 堀 正和

十八時禁酒タイムは過ぎました
三田市 堀 正和

江南市 脇田 雅美
上見れば切りが無くて上を見る

大阪市 藤田 武人
狭いとこ狙い大きな尻が来る

鳥取県 斉尾くにこ
乾杯の音もきれいなコップ

堺市 村上 玄也
円陣を組んだら打てる訳でない

弘前市 今 愁女
都市破綻どころなことと考える

海田市 小谷 小雪
本年度ゴーヤ作りへ努力賞

蝉しぐれやかましいなど申すまい
札幌市 三浦 強一

忘れてることを忘れて能天気
岡山市 工藤千代子

デバ地下は妻のルートについて行く
岡山市 工藤千代子

じつくりと見れば美人じゃない私
篠山市 遠山 可住

他人から見れば息子も良い息子
京都市 高島 啓子

川柳塔読んでたんです焦げ臭い
京都市 高島 啓子

自動車は洗うが所持ととせず
京都市 高島 啓子

色白にあこがれていたマイケルも
京都市 高島 啓子

養生訓忘れておこうバイキング
京都市 高島 啓子

近くときを定年と決め立つ厨
京都市 高島 啓子

三田市 北野 哲男
さえずりが聞こえぬスマホイヤホン

倉吉市 岡崎美知江
愚痴はみな猫にこぼして穏やかに

堺市 大和 峯二
ガンとボケこの心配でしゃんとなる

羽曳野市 宇都宮ちづる
日焼け止めも日傘も効かぬらしいシミ

鳥取市 土橋 螢
血圧も脈拍も胃も大丈夫

奈良市 大久保眞澄
ピンク着てよけい老人くさくなる

神戸市 山崎 武彦
納まりのいい骨を選ぶ竹の箸

岡山市 藤成 操江
お返しのお返しぐるる行き詰まる

寝屋川市 岡本 勲
腹割って話し合ったらまた喧嘩

鳥取市 吉田 弘子
長生きの相に加えて不美人で

大阪市 高杉 力
得意先の社食で済ます昼ごはん

海田市 堂上 泰女
日曜のデバ地下イクメンに負ける

松江市 石橋 芳山
日本中どこを掘っても出る古墳

鳥取市 西川 和子
豪邸の隣で兎小屋に住む

鳥取市 西川 和子
豪邸の隣で兎小屋に住む

香芝市 大内 朝子
ぐつときてはつとしたけど余所の夫

堺市 加島 由一

川向こうの花火のような恋ばかり

三田市 上田ひとみ

別れ際あなたが好きと気がついた

枚方市 寺川 弘一

無味無臭だから毎日飲める水

藤井寺市 鴨谷瑠美子

今もまだ一つ違いのまま夫婦

豊中市 藤井 則彦

もう少しなのに覗けぬ袋綴し

藤井寺市 太田扶美代

コラム欄ときどき落ちている真珠

倉吉市 中村 毅

神様が棚の埃に顔顰め

大阪府 畑中 節子

わたくしを守る角度にある菜園

松江市 三島 淞丘

まだやる気あるぞと握る鉄亜鈴

寝屋川市 籠島 恵子

拝啓と書く人もなしましてやかしこ

河内長野市 坂上 淳司

税払い人目を忍ぶホタル族

藤井寺市 若松 雅枝

人波で迷惑顔の富士の山

大阪市 田浦 實

年金で夫婦の縁をつないでる

休日で家族が揃い窮屈だ

鳥取市 池澤 大鯨

颯爽と渡ってみたい交差点

大阪市 谷口 義

ゆるキャラやアニメと飯の世に暮らす

米子市 生田 和之

エンピツを握ったままで寝てしまふ

和歌山市 古久保和子

年金もボーナス支給願います

唐津市 山口 高明

誰からも恋人以下で好かれてる

松山市 神野きつこ

歳がでる後ろ姿に気をつかう

橋本市 石田 隆彦

肥満体汗腺人の倍はある

鳥取市 岸本 孝子

節電に灯火管制試みる

豊橋市 藤田 千休

モヤモヤを太鼓の音が吹っ飛ばす

岡山県 田中 恵

ゴーヤよりカボチャで試す日よけ棚

弘前市 稲見 則彦

バス降りて一人も会わず炎天下

和歌山市 楠見 章子

熱中症か血圧とるか悩む塩

明石市 桃谷 和郎

熱中症避けてダラダラ元氣です

羽曳野市 徳山みつこ

立秋ときいて律儀な赤とんぼ

西宮市 牧渕富喜子

損をしたような気がする腹八分

広島市 岸本 清

角張った看板出して警察署

大阪市 大川 桃花

夫婦では有り難うとは言いがたい

鳥取市 夏目 一粋

平等に受ける日射しと年輪と

大阪府 野田 栄呼

末っ子のカッパル気楽そうに見え

河内長野市 梶原 弘光

デバ地下にあった私の小宇宙

和歌山市 福井 菜摘

カラオケで唄う曲目メモってる

大阪府 初山 隆盛

安物の化粧品でも化けられる

大阪市 津村志華子

ゴミ狙うカラスも明日を生きるため

富田林市 山野 寿之

染みついたものが拭けずにいる日記

和歌山市 北原 昭枝

残ってるファイトにチャンスこぬようだ

四條畷市 吉岡 修

コーヒーと緑茶静かに向かい合い

奈良市 尾畑なを江

女子会を真似て楽しい爺の会

奈良市 辻内げんえい

富山市 有澤 嘉晃
行く予定ないが信号青になる

大阪市 笠嶋 惠美
ケチくさいそんな自分が許せない

羽曳野市 吉村久仁雄
ふわふわと生きて味方も敵もいず

和歌山県 森下よりこ
ハングリーだった思い出すべて糧

鳥取県 平木 公子
バスツアー名刺代わりのアメ配る

大阪市 佐藤 忠昭
成果主義脳味噌よりもオベンチャラ

紀の川市 楠原 富香
あつさり味恋しくなってきた同居

つくば市 嶋本 喬
バーゲンだ先行く妻の影追えず

奈良県 渡辺 富子
我が家ではスマホ三匹飼っている

鳥取県 岩崎 和子
次男から病氣も癒えたい電話

高槻市 富田 美義
長寿など不向きと見切り尊厳死

奈良市 加門 萌子
御近所に貰ってもらう夏野菜

枚方市 松原 保
浮動票風に吹かれて右左

神戸市 山根 弘子
嫁ぐ娘に母の心をトッピング

東かがわ市 川崎ひかり
断捨離の決断試す土用干し

大阪市 柴本ばつは
もう丸でお花畑だブラ売り場

八尾市 前田 紀雄
麻生さん枚挙に遑ない暴言

岸和田市 雪本 珠子
格好よく生きる為には見栄も張る

鳥取市 谷口回春子
降らなけりや降れ降れ降れと人のエゴ

高槻市 富田 保子
バーゲンの衣装で決める若作り

和泉市 横山 捷也
暑さ過ぎればと言って母を見る

河内長野市 水谷 正子
鳥谷を木塚と言って馬鹿にされ

堺市 増田わこう
高齢者早く近けよという政治

鳥取県 西谷 悦子
心配はのら猫来なくなったこと

米子市 中原 章子
喉渴く前にお茶のむ古い二人

和歌山県 喜田 准一
疑問符を絡ませながら聞く話

和歌山県 上田 紀子
テレバシー届くあたりにいい仲間

鳥取市 大前 安子
すんなりと覚悟したのは入院日

堺市 近藤 治子
災害のニュースでふえる非常食

倉吉市 松島 恭子
病床で諦めた句に線路有り

姫路市 古川 奮水
子が来ると上り電車の切符買う

西宮市 緒方美津子
箆の中少ない方へ並ぶレジ

八尾市 村上ミツ子
遊んでるお金があれば旅に出る

和歌山県 平田 元三
妻の味亡母に仕えていた証

三田市 辻 開子
薄味になれて外食遠くなる

高槻市 原 洋志
聞く耳をどこかで忘れキレている

米子市 後藤美恵子
深い溝やつと架かった橋渡る

三田市 足立つな子
負けません貧乏性にも病にも

高知県 小澤 幸泉
廃絶の折り届かぬ原爆忌

尼崎市 小池 幸子
目覚ましにたよらぬ日日の自由人

神戸市 大島まさる
一人居がお掃除ロボに追われている

三田市 尾崎 一子
よく食べ寝るすべては一人生きる道

共選欄

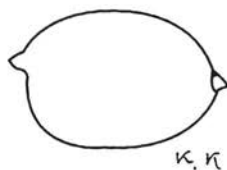
檸檬

檬

抄

(薫風書、カットとも)

(投句 724句)



「渋い」 竹治 ちかし 選

渋柿と書いて吊した枝の先
小田原評定だんだん渋いお茶が出る
河内長野市 三田市 上垣キヨミ
住職の渋い読経にだけ惚れる
堺市 矢倉 五月
大坂市 神夏磯典子
豊中市 水野 黒兎
四條畷市 吉岡 修
生きざまが覗いて見える渋い趣味
渋団扇ばたばた鰻生き返る
田辺市 岡本 昇
渋皮を剥けば意外と癒し系
奈良市 岩本 浩二
和歌山市 北原 昭枝
神戸市 井上 忠貞
唐津市 仁部 四郎
羽曳野市 永田 章司
鳥取県 西谷 悦子
枚方市 寺川 弘一
長野県 丸山 健三
歳月が甘い渋いを選び分ける

「渋い」 大内 朝子 選

渋うちわ昔の風がふわり来る
ごゆつくりと言われたけれど渋いお茶
いぶし銀なのにリモコンされている
美味そうな色にさそわれ食べた柿
ブランドー独り静かにかたむける
飲む前に渋い話は聴かせとく
年金の未来だんだん渋くなる
渋くんは何を言うても読まれてる
笑ったら損するような渋い顔
渋柿と書いて吊した枝の先
三幕目渋い男が光り出す
渋くなる友情に酒ふりかける
桑の実の渋さ味わうジャムの菓子
少しずつ渋を溶かしているふたり
ひらめいた渋い一手が覆す
京都府 都倉 求芽
高槻市 片山かずお
西宮市 片山 忠
大坂市 平嶋美智子
松原市 森松まつお
八尾市 高杉 千歩
宇都市 平田 実男
大坂市 江島谷勝弘
大山市 金子美千代
三田市 上垣キヨミ
富田林市 山野 寿之
松江市 松本 文子
姫路市 古川 奮水
神戸市 山崎 武彦
大阪市 川端 一步

渋皮を剥いて世間を広くする
 あの渋さ私のハートから抜けぬ
 年金の未来だんだん渋くなる
 黒ビール昭和が香る渋い店
 渋い顔忘れてしもた日本人
 男なら渋い位で丁度いい
 渋い顔している人がコメディアン
 泥臭く渋く男はそれで良い
 あの世まで持っていけないのに渋る
 影法師渋い顔してついでくる
 渋皮を剥くとノッペラボウになる
 渋柿も男も干せば甘くなる
 いぶし銀の男の背なに惚れました
 渋い顔見せては底値まで値切る
 飲む前に渋い話は聴かせとく
 渋ちんで溜めて手ぶらで逝くあの世
 渋皮を剥けばなんでもない男
 ドンブリが渋い老舗のラーメン屋
 渋ちんでええねんお金貯まるもん
 三幕目渋い男が光り出す
 秋ですな嵯峨野あたりを袖着て
 渋い顔で渋い返事を持ち帰る
 減反をまたもしぶしぶお受けする

大阪府	内田志津子	大阪府	内田志津子
八尾市	田邊 浩三	八尾市	田邊 浩三
宇都市	平田 実男	宇都市	平田 実男
大阪市	高杉 力	大阪市	高杉 力
羽曳野市	徳山みつこ	羽曳野市	徳山みつこ
鳥取市	竹口 清信	鳥取市	竹口 清信
大阪府	神野千恵子	大阪府	神野千恵子
田辺市	大峠 可動	田辺市	大峠 可動
川西市	西内 朋月	川西市	西内 朋月
紀の川市	宇野 幹子	紀の川市	宇野 幹子
紀の川市	辻内 次根	紀の川市	辻内 次根
寝屋川市	荒川 鈍甲	寝屋川市	荒川 鈍甲
奈良県	渡辺 富子	奈良県	渡辺 富子
鳥取市	福西 茶子	鳥取市	福西 茶子
八尾市	高杉 千歩	八尾市	高杉 千歩
大阪府	米澤 俣子	大阪府	米澤 俣子
和歌山市	古久保和子	和歌山市	古久保和子
弘前市	福士 慕情	弘前市	福士 慕情
堺市	澤井 敏治	堺市	澤井 敏治
富田林市	山野 寿之	富田林市	山野 寿之
大阪市	柴本ばつは	大阪市	柴本ばつは
佐賀県	真島久美子	佐賀県	真島久美子
鳥取市	平尾 菜美	鳥取市	平尾 菜美

うれしさを表わせなくて渋い顔
 割り勘の端数かぶった渋い顔
 渋いなあ言われましても地味なだけ
 あの世まで持っていけないのに渋る
 本題にかかると渋い顔される
 花街の渋い格子戸から舞子
 落ち込んだ日に渋すぎるアドバイス
 先代の茶渋は落とせない急須
 渋ちんの噂打ち消すすごい寄付
 渋い柄着られた時は若かった
 オレオレに渋い親父が何故かかる
 老後考えると渋くなる財布
 何と渋い羽織の裏の柄を見る
 先着順渋渋妻について行く
 刺刺の心治める渋いお茶
 失恋のショック渋柿噛んで吐く
 仁王づら選挙になると恵比寿顔
 渋いのど猫に聞かせている平和
 渋チンがエコ名人によき時代
 渋皮を剥けば意外と癒し系
 男なら渋い位で丁度いい
 あと口に渋みが残るほめ言葉
 切碇琢磨いっしか渋い貌にする

箕面市	大浦 初音	箕面市	大浦 初音
東大阪市	北村 賢子	東大阪市	北村 賢子
寝屋川市	籠島 恵子	寝屋川市	籠島 恵子
川西市	西内 朋月	川西市	西内 朋月
堺市	奥 時雄	堺市	奥 時雄
三田市	北野 哲男	三田市	北野 哲男
大阪市	古今堂蕉子	大阪市	古今堂蕉子
唐津市	坂本 蜂朗	唐津市	坂本 蜂朗
八尾市	内海 幸生	八尾市	内海 幸生
鳥取市	岸本 孝子	鳥取市	岸本 孝子
大阪市	奥村 五月	大阪市	奥村 五月
堺市	村上 玄也	堺市	村上 玄也
鳥取県	岩崎 和子	鳥取県	岩崎 和子
大阪市	大西 晴雄	大阪市	大西 晴雄
神戸市	能勢 利子	神戸市	能勢 利子
札幌市	小沢 淳	札幌市	小沢 淳
寝屋川市	岡本 勲	寝屋川市	岡本 勲
大洲市	花岡 順子	大洲市	花岡 順子
京都市	榎本 宏子	京都市	榎本 宏子
奈良市	岩本 浩二	奈良市	岩本 浩二
鳥取市	竹口 清信	鳥取市	竹口 清信
和歌山市	古久保和子	和歌山市	古久保和子
西宮市	山本 義子	西宮市	山本 義子

切磋琢磨いつしか渋い貌にする
 年金に見合うしぶちんして生きる
 お互いに色染め合つて渋い仲
 渋ちんな友とは飲みに行きませぬ
 欠けていく渋み男も果物も
 税務署に渋い話を聞きに行く
 渋いねえ骨とう品が趣味らしい
 渋い味出して人間深くなる
 渋くなる友情に酒ふりかける
 不本意に渋を抜かれるつるし柿
 中年の渋さに恋したのは昔
 ただ酒を飲んで渋々ひきうける
 何と渋い羽織の裏の柄を見る
 花街の渋い格子戸から舞子
 渋皮がとれてつまらぬ人となる
 サツチモに痺れさぶちゃんにも痺れ
 渋るわけではないけれど金がない
 落ち込んだ日に渋すぎるアドバイス
 渋いおとこが渋いおんなを連れている

秀句

西宮市	山本	義子
北九州市	岡田	幸生
高槻市	富田	保子
倉吉市	田中紀美恵	
堺市	加島	由一
倉吉市	牧野	芳光
大阪市	太田としお	
鳥取市	中村	金祥
松江市	松本	文子
池田市	栗田	久子
和歌山県	森下よりこ	
羽曳野市	三好	専平
鳥取県	岩崎	和子
三田市	北野	哲男
大阪市	升成	好
河内長野市	村上	直樹
倉吉市	岡崎美知江	
大阪市	古今堂蕉子	
大洲市	中居	善信

渋抜きをしたら私が消えちゃった
 追伸に渋い意見が書いてある
 侘び寂の渋さを知らぬ人と居る

鳥取市 倉益 一瑤
 和歌山市 福井 菜摘
 藤井寺市 太田扶美代

理屈屋に渋味のお茶の効果あり
 核心に触れると眉間渋くなる
 喋るまで渋い二枚目だったのに
 渋い顔するなと真夏のお日さま
 四度目は渋い顔され引き下がる
 長男に嫁ぐを渋る気は解る
 渋抜きができて陽気な好好爺
 主役には陰で支える燻し銀
 渋い顔痛いところをつかれたか
 恩師の文渋い本音が並んでる
 干されても甘くなれない意地っ張り
 渋皮を剥いて大人になってゆく
 金の要る話は渋るいわし雲
 年を経て渋い思い出甘くなる
 波引いて苦渋を残す死んだ町
 父さんは無言……許すとぼつり言う
 渋皮をはがすと恋は桃色に
 渋柿も同じに熟れて秋の色
 孤独死を考え虫の声拾う

秀句

三田市	久保田千代
和歌山市	武本 碧
茨木市	島田 誠一
豊中市	江見 見清
四條畷市	吉岡 修
堺市	大隅 克博
神戸市	山口 光久
川西市	日野岡和之
八尾市	村上ミツ子
大阪市	岩崎 公誠
大阪市	栃尾 奏子
弘前市	福士 慕情
吹田市	須磨 活恵
豊中市	水野 黒兎
奈良県	中原比呂志
弘前市	高瀬 霜石
生駒市	飛永ふりこ
大阪市	神夏磯典子
青森県	松山 芳生

煩惱を捨てて作務衣と渋いお茶
 見栄張った彩はふところ渋くする
 辛抱が大事渋柿味がつく

田辺市 岡本 昇
 八尾市 宮西 弥生
 唐津市 仁部 四郎

「経 験」

江 見 見 清 選



失敗のたびポケットが重くなる
昔とった杵柄雑巾が縫える
お見合いというのを一度しなかった
語りべも祖父の経験逆らわず
経験が無くてもパソコン頼る嫁
経験が豊か話がすぐ逸れる
甘酸っぱい夏の経験波の音
経験を今のところは隠してる
ロボットには恋の経験役立たず
六掛けで体験談を聴いてみる
いい経験したと苦勞を口にせず
猫の手になってリングの摘花する
ひもじさの経験知らぬ養殖魚
経験の無いことだから楽しめる
経験を持ち出す人でまともらず
生活の知恵は持つてゐる高齢者
無縁仏経験談はあるだろに
経験をどう活かすのか問う閻魔
浅い傷君を大人にしてくれず
トラウマが邪魔して一歩踏み出せず

大阪市 伏見 雅明
奈良市 大久保眞澄
堺市 矢倉 五月
姫路市 古川 奮水
吹田市 木下 敏子
高槻市 島田千鶴子
京都市 三宅 満子
米子市 後藤 宏之
京都市 榎本 宏子
豊橋市 藤田 千休
茨木市 藤井 正雄
弘前市 福士 慕情
貝塚市 石田ひろ子
大阪市 坂 裕之
大山市 関本かつ子
高槻市 片山かずお
鳥取市 大前 安子
富田林市 中井 アキ
橿原市 居谷真理子
河内長野市 穂口 正子

経験など無縁十代アスリート
経験を受け継ぐ絆秋まつり
経験を博物館へ寄贈する
屈辱の度に一度剥けてゆく
ぼろんちゃん言われたことが宝もの
未経験の豪雨が降るといふ予報
若年の医師にあずけている不安
戦争の経験だけはもう御免
不器用に生きて経験だけ豊かな
貧乏があつて賢沢身に沁みる
失敗の経験笑顔深くする
戦争を多く語らぬ帰還兵

佳

大阪市 古今堂蕉子
三田市 上垣キヨミ
香南市 桑名 孝雄
松江市 三島 崧丘
堺市 内藤 憲彦
橋本市 石田 隆彦
大阪市 野田 栄呼
米子市 中原 章子
八尾市 宮西 弥生
堺市 奥 時雄
大阪市 原田すみ子
大阪市 太田としお
高知県 小澤 幸泉
高槻市 原 洋志
海南市 堂上 泰女
藤井寺市 鈴木いさお
堺市 羽田野洋介
三田市 尾崎 一子
河内長野市 山岡富美子
富田林市 山野 寿之

もう一度育ててみたい子沢山
地
経験が軽くなした机上論
天
経験を飾にかけてする自戒
軸
失敗の経験語り合える友

「敷く」

大石 あすなろ 選



尻に敷くつもりは毛頭ありません
ご主人が尻に敷かれてお気の毒
ゴザ敷いてママになつて三歳児
親の敷くレールに乗らぬ子の自立
ゴミ出しと布団敷くのは俺の役
平然と妻は私を尻に敷く
新聞紙大きくひろげ爪を切る
それからをしつかりと敷く守備範囲
ざまあ見ろ思い上がり尻に敷く
熱帯夜妻と離れて布団敷く
新聞紙敷いてツバメの帰り待つ
激安のホテル朝から布団敷く
戒厳令敷いて待つて朝帰り
鍋敷きの気持がわかる婿養子
ハンカチを敷いて私の席つくる
政治家は大風呂敷が好きらしい
宝くじ一億敷けば涼しかろ
尻に敷く妻のパワーに手が出せぬ
簾を敷き風鈴吊す夏は来ぬ
わたくしを飾る言葉を敷き詰める

神戸市	松井	文香
三田市	石原	歳子
松山市	神野	きつこ
奈良県	渡辺	富子
大阪市	高杉	力
鳥取市	春木圭一	郎
姫路市	古川	奮水
紀の川市	宇野	幹子
鳥取市	夏目	一粹
奈良市	米田	恭昌
東大阪市	北村	賢子
三田市	福田	好文
出雲市	竹治	かし
豊橋市	藤田	千休
西宮市	片山	忠
大阪市	太田としお	
篠山市	遠山	可住
鳥取市	谷口回春子	
大阪市	古今堂蕉子	
佐賀県	真島久美子	

女房の敷いた路線にグーも出ず
親が敷くレールに乗らぬ反抗期
背水の陣を敷いたがまた負けた
座ぶとんが嬉しい冬の無人駅
敷き詰めた論吉の上で寝てみたい
石畳歩けばローマ蘇る
風呂敷の結び目を解く母が来る
ハンカチを敷けばふたりの丘になる
下敷が冤罪を生むカンニング
世界地図子供の頃の敷布団
懸命に敷いたレールに子は乗らず
子への愛無冠の父の敷く轍
佳

鳥取市	山下	凱柳
三田市	上垣キヨミ	
三田市	堀	正和
鳥取市	岸本	宏章
香芝市	大内	朝子
枚方市	寺川	弘一
和泉市	横山	捷也
藤井寺市	太田扶美代	
堺市	澤井	敏治
河内長野市	谷	久美子
堺市	矢倉	五月
鳥取市	奥谷	彩子
弘前市	稲見	則彦
堺市	村上	玄也
倉吉市	中村	毅
豊中市	松尾美智代	
羽曳野市	徳山みつこ	
八尾市	村上ミツ子	
弘前市	福士	慕情
明石市	梶谷	和郎

「がつちり」

近 藤 正 選



がつちりと閉めてる財布朝のうち
九条をスクラム組んで守りたい
がつちりと心も閉ざす鍵の束
金メダルがつちりハグでたたえ合う
原発のゼロをめざしてがつちりと
がつちりと議席得る党失くす党
がつちり屋どちらか言えば嫌われる
がつちりと平和憲法護らねば
がつちりと贈収賄が握手する
きつく抱く君の鋳型をとるように
がつちりとスクラム組んで基地撤去
傘寿でも四つに組めます痴話げんか
がつちりの亡父懐かしい肩車
がつちりと組めば言いたい事が言え
鎖からはずれられない太い棒
並肉の家族でみんな骨太よ
がつちり岩掴む木の根が頼もしい
ガッチリと貯めてうっかり死なはった

堺市 増田わこう
奈良市 渡辺 富子
紀の川市 宇野 幹子
鳥取市 永原 昌鼓
堺市 大和 峯二
米子市 生田 和之
大阪市 江島谷勝弘
札幌市 三浦 強一
堺市 澤井 敏治
高槻市 原 洋志
藤井寺市 鈴木いさお
西宮市 緒方美津子
香芝市 大内 朝子
大阪市 神夏磯典子
鳥取市 池澤 大鯨
大阪市 柴本ばつは
西予市 黒田 茂代
大阪市 古今堂蕉子

がつちりとした彼連れて孫がくる
妻のあと黙って蛇口締め直す
貧しくもがつちり結ばれた絆
復興へ足場がつちりヘルメット
年金をがつちり掴む消費税
遠い国とばかりがつちり握手する
TPP農家ががつちり組む構え
逃げ道は確保してます末席で
小遣い上げて欲しいと父と子が
寝たきりが妥協をしない認め印

佳

世の波にがつちり乗って手は抜かぬ
がつちりと構えた門にある歴史
電子カルテにがつちり余名握られる
二度の職見つけましたと胸を張る
過労死の上にながつちりビルが立つ

人

手離せぬしあわせが今ここにある

地

がつちりと手が組めないこぼれ水

天

一歩ずつ進むしかないわたしは歩

軸

アメリカに掴まれている首ねっこ

唐津市 吉富 節子
唐津市 坂本 蜂朗
東大阪市 北村 賢子
大阪市 津村志華子
塩竈市 木田比呂朗
河内長野市 梶原 弘光
犬山市 関本かつ子
三田市 堀 正和
弘前市 稲見 則彦
横浜市 菊池 政勝
四條畷市 吉岡 修
シドニー市 坂上のり子
明石市 梶谷 和郎
大阪市 榎本日の出
橿原市 居谷真理子
和歌山市 柏原 夕胡
八尾市 宮崎シマ子
弘前市 高瀬 霜石

『麻生路郎読本』 余滴 (17)

「再び半文錢君に與ふ」を読む ④

葉 原 道 夫

* (1) 愚雜な我々の爲めに路郎君の自己を引下げさせるやうなことがあつては路郎君に氣の毒だが、幸か不幸か路郎君は自己の藝術の完成には特別の努力を拂つて日夜絶へず物を讀み、想を練り、可成り苦心して一句を残さうと努力して居られる、その爲めには近頃は神經衰弱にまでなられたくらいである。毎月良い句ばかりが出来ればそれに越したことはないが、人間といふものは機械でないから、さう佳句ばかりを吐けるものぢやない、然るに偶ま即興的に旅先で書きなぐつた句の欠點を指摘し「友人をこきおろすが如き筆鋒（筆者註——筆鋒の誤り）も亦友情の現れである」ととんだ友情の押賣りをされては路郎君も助からぬ話だと思ふ。

□ * (2) 「黨のため海鼠になつたおそろしさ」
「俺は彼を莫迦にしてやらう」路郎君の此

の二句は「實の句を現はしたままでその實には詩が伴はない憾みがある」と君は言つてゐるが、こうした感情を表現するのに君の言ふ詩（詩の意味は所謂普通の詩と解して）が伴はなくても僕は差支へがないと思つてゐる、一見頗る平凡な句である、然しちつと味はつてゐるといふんな問題を提出されてゐるのに驚ろく、比喩が少し大き過ぎるかも知れないが良寛上人の書は一見子供の書いた様な拙さで誰も良い字だとは思はない然し、それをちつと見詰めてゐると何となしに惹きつけられて所謂無技巧の技巧のうまさに頭を下げしめられる。つまりけんらんの境地を一度通過して今や枯淡の域に入らんとしつ、ある路郎君の最近の句の傾向が君には分らないのだと思ふ。それでなければ

* (3) お父さんはやはり川柳々と云つてゐる

よ
お父さんの神經衰弱がわかるかい
信心をはじめたおツ母さんも可哀さうだ

の三句に對して「幼なき靈に對する童謠的構成法であつて、この内容には路郎君自身の自嘲と自己憐愍はほのめいても主觀の報告に過ぎない」「詩の要素に乏しい」と君が言ふ筈がないと思ふ。* (4) 童謠的構成法とはどんなことを言はれるのか（文字通りに解釋すると句が童謠のやうに組立てられてゐると解するのほかはないが）僕には一寸理解に苦しむこの三句から童謠なんてことがどこに考へられるのであらうそれよりも僕は古句の「南無女房乳を吞ませに化けて來い」の境地を聯想させられる。君は「路郎君の句風であれば日記の中でも多く書き得る程度の自己の感情であり、之を詩論に照らしてみれば僕等の惧る、小主觀の作風に近い」と斷定されてゐるが右の三句が小主觀だなどと言へるだらうか君は子供を死なした経験が無いからそんなことを言つて居られるのだ、自分の長男、而かも最も望みをかけてゐた子供を九つまで大きくしてやつと學校へ行つたばかりに取られて了つ

た親の嘆きは、何かにつけて出ずには居ないその親の心の苦惱を咏んだ句として僕は涙なしには此句に接することが出来ないのだ、僕は君がロンドン君をよく知つてゐる、蔑乃女史も知つてゐる、そうした路郎君の家族に關係した句を例證として掲げることが、若し君にして一片の友情あり、一掬の涙があるならば他の何人よりもその句に打たれるに違ひないと思つて以上の三句を出した、然るに君には此の句から僕が感じるほどの感嘆（筆者註―感銘の誤り）を受けず「實生活の報告」で「眞の意味の詩生活の記録ではない」と片づけられてゐるが、僕は句は實生活の報告でいゝと思つてゐる。その報告が讀者に共鳴と同感を起さしめる力があれば、それは心から心へうつたへる生きた句であり、詩であると思ふ

* (1) 「川柳雑誌」（昭和3年7月号）の三好が書いた「半文銭君に與ふ」に、
（君は路郎君は「川柳雑誌」の刊行と共に殆ど愚雑な連中を糾合した結果、經濟的に妥協して遂に自分の藝術の路を失ふに到つた」と書いてゐるが、こんなことは友人として君の口から世間に發表出来ることかどうかと思ふ（中略）

假に君が我々を愚雑と見たのならば、それは仕方がないとしても、川柳家である君が、川柳家を愚雑な連中と罵倒することは川柳家自からを、卑しめるものではないか年不惑の君が、卵の殻を尻にくつつけてゐる雛つ子のやうなことを書くとは、餘りに輕卒ではないか」とある。

* (2) この二句は、「川柳雑誌」昭和3年1月号に「近作」として發表されたもの。全八句を挙げておく。
お元日坐るところへ坐らされ

□
老婆をいたはる汽車がつきにけり
黨のため海鼠になつたおそろしさ
俺は彼を莫迦にしてやらう

自嘲（二句）

入齒の金をおごらされたおかしさ

□
中谷秀一君を悼む

時雨れてゐるよ 君はなぜ黙つてゐる

戸張孤雁氏逝く

裸女の線にも悲しみのただよへり

「お元日」「黨のため」「俺は彼を」「入齒の金を」の四句は、句集「旅人」

に収録された。

「黨のため」「俺は彼を」の二句について、三好革郎は、「一見頗る平凡な句である、然しちつと味はつてゐるといふんな問題を提出されてゐるのに驚ろく」と述べているが、筆者には理解できない。半文銭の「實の句を現はしたまででその實には詩が伴はない憾みがある」という言葉通りだと思ふ。

「黨のため」の句は時事吟なので、今となつてはその具体的な内容を理解しがたい。昭和2年は3月に金融恐慌・南京事件が起こり、若槻礼次郎内閣から田中義一内閣に変わった。海鼠は、どちらが頭やら尻尾やら分らないので、黨のために主義主張を殺すことになつてしまったことを風刺した句だと思ふが、どのような事件を詠んだものかは未調査である。

* (3) この三句は、「川柳雑誌」昭和三年三月号に「ロンドンの一周忌に」として發表されたもの。全七句を挙げておく。

お父さんはやはり 川柳々と云つて
るよ

お前がゐたらと思ひ出すと 煙草ばかり吸ふ

お父さんは不 覺束なくも生きてゐる日あたりのいゝうちだが物足りなさに變りない

信心をはじめたおツ母さんも可哀さうだ

お父さんの神經衰弱がわかるかい
湯ざめするまでお前と話を 夢に來よ

七句のうち、「信心を」は、句集『旅人』に未収録。「日あたりの」以外の五句は、「ロンドンの一周忌に」の前書きで収録。「日あたりの」は別のページに収録。「お父さんは」の句は、『旅人』には、「川柳々々」との「と」を省いて収録。

*⁽⁴⁾「童謠的構成法」とはどんなものか
理解に苦しむと三好は述べているが、半文銭は、「幼なき靈に對する童謠的構成法」だと述べている。「童謠的構成法」とは、子供に語りかけるようなスタイルを言っているのだと思われる。
大正10年「金の船」に発表された野口雨情作詞の「七つの子」を見てみよう。
「鳥なぜ啼くの／鳥は山に／可愛い七

つの子があるからよ／可愛可愛と／鳥は啼くの／可愛可愛と／啼くんだよ／山の古巢へ／行つて見て御覽／丸い眼をした／いい子だよ」

三好は、「この三句から童謠なんてことがどこに考へられるのであらう」と述べている。半文銭は、「童謠的構成法」とは言っているが、「童謠」とは言っていない。

筆者は、半文銭の「路郎君自身の自嘲と自己憐愍はほのめいても主觀の報告に過ぎない」という評語に同感する。また、「ロンドンの一周忌に」という前書きを付したこれらの句は、前書きがあつて初めて深く鑑賞できる句であるところにも問題がある。一句としての独立性に欠けていると思うのだ。

*茄子に明け豆腐に暮れて行く身也
住の江の紛演は淋し泣ぐひり

(紛は多分粉の誤植ならん)

これは君の句である。之は實生活の報告でもあり眞の意味の詩生活の記録なんですうが僕には君の達者な技巧の方が先に眼を射つてさうですかそれはお困りでせうなと

か淋しいでせうなアと言へる位で眞に共鳴することが出来ない。この二句の如きは詩生活の記録なんですうが僕には「實生活の報告に過ぎない」と思はれる。人のことを兎や角と言はれる暇に御自分の頭の上の蠅でもお追ひになる方がお得ではないかと申上げたい。

*「茄子に明け」の句は、『半文銭句集』(昭和8年7月10日発行)に収録。「住之江の」の句の「泣ぐひり」が分らない。「泣き曇り」(潮氣のために海上が曇ること)の誤植か。当時、半文銭は粉浜に住んでいた。

この二句に対しての、三好の「實生活の報告に過ぎない」という評語には、筆者も同感である。

□「君見たまへほうれんさうは伸てゐる」といふ路郎君の舊作が新たに組上りのほされてゐる、苟しくも他人の句を評する時には原句を忠實に見て特に注意を拂つて貰ひたいものである。原句は川柳雜誌第一卷十一號に掲載されてあるから、も一度見直して貰ひたい「君見たまへ蒔萩草が伸びてゐる」である。*(1)「は」と「が」では句

の意味が全く違つて了ふ、こうした誤まりは君が書いた「信心をはじたおつ母さんも可哀さうだ」にもある。「はじめた」と「はじた」とでは全然句の意味が違つて了ふではないか、*⁽²⁾之は單なる「二十年」が「三十年」になつた誤植と同一には扱へない。苟しくもその人の句を攻撃しようといふのであれば誤植の無いやうに十分注意して頂きたいものである。

□君は前記の「君見たまへ」の句に對してよろしくほうれんさうそれ自体に就いて自己の「伸てゐる」といふ驚異を思想的に發見すべきで「君見たまへ——」と逃げられる位置ではないと思ふ。なぜにほうれんさうによつて天地を三寸縮めたとか地核を破つたとか其他の思索系を辿らないのか」と攻撃し詩人は「ある暗示と生命を傳へなければならぬ」と喝破して居られるが、路郎君が鳴尾時代に裏の畑に出て蒔草草があの弱々しい葉を以て固い地核を破つて出て來たその大きな力を見て、君見たまへと思はず叫んだのであると僕は思ふ。自己の體驗から見脱してゐる小さな草の中に天地の精靈を感じ、偉大なる自然の力に打たれて、蒔草草を借りてある暗示と生命を讀者に傳

へてゐる。それが感じられないのは眞珠を見せられても豚は何とも思はないのと同じで君は都會生活を長くしてゐて、田園生活を營む者が感じる自然の力に打たれるといふ感激を味はふことが出来ないから「君見たまへ」だけでは分らないのだと思ふ。

*⁽¹⁾「は」の意味・用法を『広辞苑』では、次のように説明している。(説明しようとする物事を取りあげて示す。取りあげるのは既に話題となるなど自明な内容で、その点に、事実の描写などで新たな話題を示す)「が」の違ひがあるとされる。要するに、「は」の前には既知の内容がきて、「が」の前には未知の内容がくる。次のような問いと答を思い浮かべると分かりやすい。

蒔草草はどうしたか。

蒔草草は伸びている。

「蒔草草」が既知の内容で、「どうしたか」「伸びている」が未知の内容である。同様に「が」の例を見てみよう。

何が伸びているか。

蒔草草が伸びている。

「何」「蒔草草」が未知の内容であ

り、「伸びているか」「伸びている」が既知の内容であることが分かる。

路郎のこの句は、「が」であるからこそ、伸びている蒔草草に気づいた感動が表現されるのである。

*⁽²⁾「川柳雑誌」(昭和3年7月号)の「半文錢君に與ふ」に、(次に「柳樽縦横」の中に「久良岐と路郎」と題して「川柳三昧」の記念特輯號に「久良岐翁の川柳生活が二十五年で、路郎君のが三十幾年であつたのは少こし意外だつた。恐らく三は二の誤植だらうと思ふが、若しそうでないとしてみれば、路郎君は久良岐翁や鰻花坊氏からも大先輩に當るわけだ呵々」と書いてゐるが、君が四十歳で、路郎君が四十一歳であることはよもや君が知らない筈はない(中略)三は二の誤植であることは誰が見ても首肯出来ることではないか然るに「若しそうでないとしてみれば、路郎君は久良岐翁や鰻花坊氏からも大先輩に當るわけだ呵々」とは故意にいやがらせを書かれたものと解するのほかはない、昔の君はこんな男ではなかつた」とある。(次回に続く)

民族の詩歌 (16)

―義一語録

三 好 專 平

ギッチャンと呼んでいた。私立浪速高校で同級だった。しばらくお付き合いのほど。亡くなつてから彼・藤本義一の死を悼む

特集が『上方芸能・2013・6』（木津川計発行）や『たる・2013・2』（高山恵太郎編集・発行）で編まれた。

どちらも、関西文化の担い手として六十年の長きに亘って活躍してきた軌跡を多くの人たちが語っている。特に、大衆芸能を中心とする、大阪独特のお笑いの発展に尽した功績の大きさに驚くばかりである。〔笑いの会〕など）

その人の本質は、何気ない片言隻句やつぶやきや洒落に現れるという。論語や聖書は、孔子やキリストのことばを聞いた弟子

の聞き書きであることを思い起こすだけで十分であろう。そこで、義一のそういう言葉をすこし。

そのままで川柳にもなりそうだ。

・蟻一匹、炎天下

（蟻とはもちろん彼自身のこと、生涯にわたる生きる覚悟を述べた言葉とする）

・笑芸のアイウエオ

アはアイデア。イはインタレスト。ウはウオーク。エはエキサイト。（ウオークとは行動のこと、生涯彼は精力的に世界を駆け巡った。

「中国にはロールの紙がないんやで」

・人生は一幕の劇

（文学や演劇の中に身を置いた彼らしい。「鬼の詩」は一人の落語家の鬼気迫る物語）

・トタンの穴は星のよう

（魚の獲れなくなった漁民の悲哀）

・商は笑なり

・本当の生き方は憲法九条にある

（戦後のどさくさを生き抜いた軍国少年の気概。『めっちゃええやん！憲法九条』井上ひさしの対談）

・映画産業の落日を予感する

（脚本家としての実践的直感であろう。『上方芸能』に彼の略年譜があり、詳細に紹介されている）

・草が化けるから花になる

（言葉遊びも彼の楽しみの一つであった）

・死ぬなら板の上

（関西芸術座の河東けいさんに贈った色紙）

・安^{あは}呆^はこそが文化を創造してゆく基点

（シェークスピア研究家のチャールズ・ラムと同じことを説く）

・文化の^{あいくち}匕首^{しほ}を持つ

（文化の滅びるところ国も亡びる）

「鴛鴦の足あと」

石谷 忠良 著

石谷 美恵子 著

◆ 句集紹介 ◆

「ダイヤモンド婚」を記念しての、句集「鴛鴦の足あと」ご上梓、まことにおめでとございます。お話を聞いた時嬉しくて嬉しくて、電話口で思わず拍手をしてしまいました。以前よりお二人が句集発刊されますことをとても望んでいましたので心よりのお喜びを申し上げます。

ご夫婦は私が尊敬する大先輩でとても可愛がつて頂き仲良くもしていただいています。若輩者の私がこの句集の紹介をさせていただくには恐れ多い事と大変躊躇したのですが、勇気を振り絞ってペンを取らせていただきました。

ご夫婦は良きライバルでもあり、良き理解者で、お二人共に秀句を発表されています。忠良さんの真面目で誠実な人柄が作品の随所に散りばめられています。

頑なにルール守って出世せず
偉人伝読んでも蟻は蟻である

倉益 一 瑤

無を悟る丸が、一氣にまだ書けぬ
空財布愛は降るほど入れてある
恥多き人間ら寝てスズムシが鳴く
そして妻への感謝とやさしさが溢れた
作品も数多く見られます。

食事療法妻がブレーキ踏んでくれ
晩年のシーソー妻に負けてやる
ボロボロの幕を繕う妻がいる
ゆれる灯を庇い夫婦の歳重ね
大笑いできる小さな家が待つ
しかし忠良作品にはパンチのきいた句
もあり着想の豊かさに感心させられます。

介錯は要らぬおとこの寒椿
火を吹かんばかりムンクの絵が叫ぶ
やるだけはやった男の鎧脱ぐ
最高の笑顔で毒を盛っている
テーブルを叩いて去った確かな目
一本芯の通った男をここに見ました。
もう一つの趣味、絵筆を握る忠良さん

ならではの一句。

莫山とおんなじ筆を買ってみる

美恵子さんには穏当で母として妻として夫を助け家を守ってきた優しい作品が多く心打たれます。

まだ死ぬ炊事のできぬ夫という

淋しさを隠す悲しい大笑い

運のない汗を夫婦で慰める

お喋りは好きだがスピーチは苦手

泣きながら女はおかず考える

喧嘩中なのにうっかり返事した

輪になればトップもビリもない温さ

空想から覚めると洗う物のやま

妻母女わたしはオール3どころ

美恵子さんの作品は女として共感を呼び心に響くものがたくさんあります。そして次の三作品から美恵子さんが、いかに家族に見守られお幸せな日々を送っているのかがわかります。

風邪引くな転ぶな娘等がやかましい
わたくしの川もこのごろおだやかだ
いい顔で帰ろうあかりついている

この句集がお二人のそしてご家族の宝物になるとともに、私達後輩の大きな道しるべになるものと信じます。いつまでもご健康に留意され私達後輩の先導者となつていただきますようお願いしています。

初歩教室

題一箱・箱

太田 昭

川柳塔七月号の最終頁初歩教室の課題予告欄に、誤って「籍」と掲載し、八月号の作品募集欄で「箱」と掲載致しましたので、本月は「籍」と「箱」の双方を課題と致します。

「うがちと風刺」

「役人の子はにぎにぎをよく覚え」

役人は賄賂を貰うのが好きだから、役人の子は、赤子の時から掌を握る動作であるにぎにぎをよく覚えると言う意味のこの古川柳は当時の世相を痛烈に風刺した句として有名であるが、本当に役人の子が他の子よりも早くにぎにぎを覚える筈がないから、この句の内容は皮肉であり作者の作り事である。

昔から、ユーモア・軽みと共に川柳の三要素と言われている「うがち」と言うのは、このような「皮肉」とは別のものである。

【少しの修正で良くなる句】

原除籍されるより辞任して得る名誉 のり子

添除籍より辞任で名誉維持をする	原趣味の社に籍置きました翔んでます	原読み会の社に籍移し替え弾みだす	原読まずして書籍の山が高くなり	添積ん読の書籍が部屋で山となり	原籍置いた会社へ汗を流した日	添籍置いた会社で汗を流す日々	原いつの日か黄泉に籍入れ友に会う	添黄泉の地に籍を移して友に会う	原この想い箱詰めにして宅急便	添想い出を箱詰めにして送る友	原下駄箱でハイヒール様眠らせる	添下駄箱で眠らせているハイヒール	原少年の思い出詰めたお菓子箱	添少年の想い出詰めた玩具箱	原日の丸の弁当箱で育ちたり	添日の丸の弁当箱で育てられ	原捨て切れず箱にしまった文がある	添捨て切れず箱にしまったラブレター	原老いの坂救急箱の出番ふえ	添老いる毎に救急箱の世話になり	原木箱入りカステラ囲み目を皿に	添木箱入りカステラ孫の目が覗く	原しゃれた箱断捨離の危機生き残る	添断捨離の危機すり抜けたしゃれた箱	原開けちゃ駄目と言われた箱をまず開ける	添開けるなど言われた箱だから開ける	原箱庭の菜園トマト茄子胡瓜	添箱庭で育てた胡瓜茄子トマト	原値上げなし箱を小さく質も下げ	添質を下げ箱も小さく値上げせず	原盆供養箱入り並ぶご仏前	添箱入り娘仏間に座り盆供養	原当りクジ何時も後ろの人が引く	添籤箱を後ろの人が当たり籤	原玩具箱隅に隠した宝今	添断捨離で隅に隠した玩具箱	原きれいだとしておいては捨てる箱	添きれいでいつかは捨てる洒落た箱	原ブタ箱は金のいらぬホテルだ	添ブタ箱は金の要らないホテル並み	原箱の中捨て犬が吠え振り返る	添捨て犬に未練残した箱の中	原まだ女化粧箱には未練あり	添化粧箱に未練残してまだ女	原下駄箱は思い詰まった玉手箱	添下駄箱は思い詰まった宝物	原会えばすぐ籍入れたがる一目惚れ	添会えばすぐ籍入れたがる惚れっぱさ	友子	秋星	勝治	冷子	修	史郎	亜希子	紀美恵	とも湖	比佐恵	ボン吉	元三
-----------------	-------------------	------------------	-----------------	-----------------	----------------	----------------	------------------	-----------------	----------------	----------------	-----------------	------------------	----------------	---------------	---------------	---------------	------------------	-------------------	---------------	-----------------	-----------------	-----------------	------------------	-------------------	---------------------	-------------------	---------------	----------------	-----------------	-----------------	--------------	---------------	-----------------	---------------	-------------	---------------	------------------	------------------	----------------	------------------	----------------	---------------	---------------	---------------	----------------	---------------	------------------	-------------------	----	----	----	----	---	----	-----	-----	-----	-----	-----	----

原箱椅子にゆかた姿で父涼み (山)久子

添箱椅子にゆかた姿で夕涼み

原人よりも箱が大事な安倍総理 一文

添人よりも箱を大事にする総理

原秋の香を箱詰めにして産地から 忠貞

添秋の香を箱詰めにして郷土から

原下駄箱に汗と涙の靴が有る 紀雄

添下駄箱に汗と涙の跡がある

原旅土産あげ床知ってのお買い上げ 開子

添上げ底と知って買って旅土産

原箱入り娘何時になつたら箱抜ける 律子

添何時になつたら箱入り娘籍を抜く

原貯金箱祖母が来れば重くなり 洋一

添祖母が来て重くなつた貯金箱

原うらみつらみしまった箱が揺れ出した 大子

添うらみつらみ詰まった箱が揺れ動く

原箱書で値打ちを下げた古道具 惠

添箱書で値打ちを下げる古物商

【添削】

原大学に籍置き忙しアルバイト (畑)節子

添籍は大学昼はバイトで忙し過ぎ

原葉箱我が家の主治医棚の上 (見)温子

添我が家の主治医納戸の中の葉箱

原箱入りはどんなものでも高く見せ 回春子

添寸志でも箱入りにして高く見せ

原捨てられず箱に入れては古着溜め こずえ

添断捨離でも箱の古着は捨てられず

原りんご箱そこから進む長い道 (富)恵子

添りんご箱のそこから覗く古い過去

原まあいいか箱入り娘おめでた婚 (徳)正子

添箱入り娘おめでた婚で奪われる

原日々の記事箱詰自慢笑う友 ミヨノ

添箱詰めを自慢している日々の記事

【入選句】

ゴルドの棺でもまだ望まない

アメリカに箱入りだった娘住む

その昔膳に使つたリンゴ箱

箱入りの人と同居の五十年

重箱の隅をつついて議事が採め

亡き母の遺品が詰まる宝箱

亡夫の箱に古く黄ばんだラブレター

4Bを詰めた私のおもちゃ箱

想像力豊かに伸ばすおもちゃ箱

箱火鉢あの日の祖母の丸い背な

おもちゃ箱夢の続きが甦る

重箱の隅をつついて世界旅

ゴミ箱の中で貧富が入り交じる

遠い日に夢詰め込んだ玩具箱

重箱の隅に笑顔を置いてある

下駄箱で幅を利かせるスニーカー

【佳句】

骨董商まずは箱書自慢する

本箱が僕の知識を解き明かす

校庭に箱庭あつた疎開先

【今月の推せん句】

子から来た荷物の箱は着払い

可愛い子からの宅配便が着払いで送られて来る、母親は何とも思わず嬉しうに荷を解く。温かな親子の情を感じる。

本箱で百科事典が泣いている 山下凱柳

加齢とともに難しい本は読まなくなり、自然に勉強も怠るようになってしまふ。使い慣れていた百科事典で事を調べることも無くなつてしまつて何か寂しげである。

母と子が繋がつていた桐の箱 高岡弥生

母は子供のへその緒を切りの箱に納めて取つておいてくれる。腹を痛めて生んだわが子と自分を繋ぎ合わせていたへその緒は、他の何よりも大切であるに違いない。

【選を終えて】

取り上げなかった作品の中に、何を詠もうとしていたのか解釈のし難い句が多く見受けられました。作品が出来たら、何回も読み返し、自分自身で納得がゆくか否か、推敲をし下下さい。

克三

英男

妙子

磯部義雄

川柳塔鑑賞

同人吟 山岡 富美子

— 9月号から —

旅が続いて帰巢本能疼く

山本 希久子

日常から抜けた「ときめき」もせいぜい十日、あとは主婦業ならあれこれ留守宅が気になり、バリのイケメンも、世界遺産もどうでもよくなる。

その昔私も赤い渦だった

そして炎はやがてやがての西の空

中井 アキ

情熱が燃えていた頃、私が渦の中心であつた頃、その華やかな時もいつか終わりを告げ、やがてゆつくりと西の空へ。

治癒しないうちに老化に追い越され

村上 玄也

病院へ行く煩わしさを考えると、多少のことならと大抵我慢をしてしまう。代謝がゆつくりになる高年齢は病氣も駆け足では進まない。そのうち本体の老化がもっと進むという皮肉。

ネプタ終え初秋の風に励む業

岡本 花匠

三十六度の気温に喘いでいる大阪をよそに、弘前はもう秋の気配、祭りが終わったあとの寂寥感を感じる。同じ東北でも青森では「ねぶた」だそう。

目は伏せぬ鏡に何が映ろうと

居谷 真理子

鏡に何を見たのであろうか。私なら即座に目を伏せるであらうことに真理子さんは無垢な好奇心でまじまじと見つめる、と思わせるものがある。想像力をかき立てる句。

わたくしが暮らしています無人駅

斉尾 くにこ

私の最寄り駅もご同様。鉄道会社が開発した住宅団地の最寄り駅を無人化するという話で、採めているとの報道もある。単なる合理化の問題ではない。

ワンバタン貫きとおす朝ごはん

高瀬 霜石

思わず笑った。日本中、いや恐らく世界中の「朝ごはん」はきつとワンバタンであらう。用意する側から言えば超忙しい時間帯はシンブルイズベスト。

楽しかったデコボコ人生だったけど

松本文子

でこぼこでない人生はないであらう。今や一世紀生きること珍しくない時代、文子さん、まだまだ先に楽しみが待っておりますよ。

近づけばあなたを妬むことになる

遠き人へ七夕の笹揺れやまず

木本 朱夏

人との関係は微妙だ。至近距離になると排気ガスが出ることもある。しかし、遠きひとへ揺れる心はせつなくも美しい。銭湯の富士も遺産の貌になる

大内 朝子

夏の富士山は登山者で溢れんばかり。山頂の立錐の余地もないという光景には違和感を覚える。しかし銭湯に浸かってのびのびと見る富士山には酷暑もきつと癒されるであらう。沢山あつた富士山の代表句。

どうしても片減りになる僕の靴

福士慕情

姿勢が悪いとか、足癖が悪いなどという問題ではない。譲れないものを抱えている、ただそれだけのことなのだ。

ブライドはないが行けぬ立ち食いソバ

星野育子

かつて高度成長を支えた戦士達は、駅の立ち食いソバをそそくさとかき込み、その双肩に社を国を家計を担った。今も多忙な人達の食生活は似たようなものであるが、立って食するというのはブライドとか美意識に関係なく、馴染まない世代なのだ。

つば広の帽子に忍び寄る晩夏

島 ひかる

初秋というとうとふつと爽やかな風が抜けるが、晩夏には哀感が漂う。思ひ出を紡いだお洒落な帽子も退場のときなのだ。

人間の鼻を時々折る自然

金子 美千代

今夏の猛暑はもはや災害と言われる。局所的に降れば豪雨になる。被災地や天候に左右される多くの職業の方々のご苦勞を思う。

思ひ出を毀したくないから会わぬ

早川 遯行

かつての職場に長身瘦躯の「出来る」イケメンがいた。密かに憧れたが同僚の美女とさつさと結婚。その彼女と再会した時に見た何十年か後の彼の写真に、私は深く傷ついたままだ。

残塁の数なら負けておりません

升 成 好

私もこれは張り合える。野球なら戦術の不備を問いたいが、人生の残塁はいつか熟成、芳香を放つと信じたい。

心にも投棄くれる良き主治医

矢倉 五月

いまだき珍しい良き主治医に巡り合えた五月さんが心底羨ましい。高齢者には、切れ者の名医もさることながら、話をよく聞いて下さるアナログ系に救われることもあるのだ。

時空超え千年杉の動かさる

村上 直樹

大樹の存在感にかなうものはない。注連縄を巻いて神様にしてしまう気持ちがよく分かる。目先の些事でおろしている自分が恥ずかしい。

ひと言で仲間の輪から弾かれる

片山 かずお

じゃんけんに勝ち過ぎて、負けすぎてもかごめの輪では浮く。まして余計な一言はタブー。「かごめの輪」はナーバスなのだ。

八月に約束があるカブト虫

鴨谷 瑠美子

正解が無いかもしれぬから難儀

西内 朋月

極楽があるとわかってから逝こう

夏目 一 粹

効くような効かないような薬飲む

川本 畔

思えば人の暮らしは、効くような効かないようなものを追いかけて、汗をかいている。正解のない答案用紙にあくせくしているのだ。極楽へ行きたく、善行を重ねる努力もするが、それとて約束されているものではない。八月も後半に入り歳時記はゆつくりと巡る。

猛暑に緩んだ頭と感性ながら、千五百

を超える秀句を楽しく鑑賞させて頂いた。

感想はあくまで私の心に映った風景。

見当外れはどうかお許し下さい。

水煙抄鑑賞

— 9月号から

升成好

神様の死角で赤い実をかじる

栃尾奏子

赤い実は、禁断の木の実か。食べてしまわずに、かじるに止められたところが、慎ましやかで軽妙。

熟れ過ぎの葡萄は如何オホホホ

若年幸子

熟れ過ぎと、謙遜しておられるが、実は密かに満を持しておられるかも。洒脱でユーモアの句。

失意の日風の背中を見えています

中前幸子

失意落胆を必死に隠そうとしても、うしろには目がない。まして音のない風。ここは、明日に向って切り替えよう。

雲ひとつない空思考停止する

神野千恵子

座禅ひとつさえ、ままならぬように、

思考停止を日常にとり入れることは、容易ではない。空を見てのこの所作潔し。

検査時はたしなむ程と言っておく

寺本実

酒飲みは、酒の害を百も承知。でも止められずドクターストップが怖い。隠そうとする心理痛い程よく分かります。

頭上からけんが売ってる日の光

山崎早苗

この時期、三十五度超が続く列島。大自然から売られたこの喧嘩、買っても勝ち目なし。高気圧の後退を待つのみ。

うやむやに丸くおさめるのもヒト科

森下よりこ

この処世術、とりわけ日本人が得意。波風を立てずに、何よりも和を保つことを優先させた日本人の生活訓。

楽しそうきつと夫婦じゃないだろう

木村忠義

穿ちの句。戦前生れの男は総じて夫婦が外で腕組んだり、手をつないだり、ご法度のように守り抜いている。こうした夫婦像も程なく過去のものになりそう。

外れても外れても買う宝くじ

山下凱柳

リフレインが、リズムよく生かされ、若しかしたらという人間の欲望、切なさが滲み出た佳句。

新米に思いを寄せる生たまご

木田比呂朗

何とも卵かけご飯は旨い。秋風が立つ頃、待望の新米が出まわる。この出会いを待つ日本人は、少なくない。

失せしもの不思議な場所に現れる

梅里南天

置く場所を決めてないから、探し物が絶えない、と教えられているが、これが守れない。「不思議」の表現が斬新。

人よりも猫は激しい恋をする

太田としお

恋猫のあの甲高い鳴声には、うんざり。しかし人間が激しいと感じているだけで猫族の間では、ありふれたプロポーズなのかも知れない。

お願いねあつさり言つて妻は旅

谷川憲

世の奥様方は、旅行、女子会、趣味の会と日々ご多忙。当然のこととして留守番は亭主。お願いねは、もはや奥様の常套句。この言葉に、男は脆い。



不快な言葉

次の短歌は数ヶ月前、某新聞の文芸欄に載っていたものです。少しドキッとしたのでノートに控えていました。

かわいそうと言われることには慣れていない

殻付ピーナツ剥く剥く剥く剥く 藤田美香

作者のことは知らないのですが、「剥く剥く剥く剥く」という大胆な表現から推定すればまだ若い人なのでしょう。

この作品を読んで、作者の気持ちに大いに共感しました。そして、「かわいそうと言われることに慣れていない人なんていないのではないか」と思いました。この言葉は、「相手を思い遣る同情心から生じたもの」かもしれません。しかし「かわいそう」と言われた当人は、「憐れんでいる」と感じるのではないのでしょうか。いや、それでは僻み過ぎかもしれません。が、赤の他人から同情されることなど、誰しも受け入れ難いことでしょう。自分が「かわいそう」と言われたらどのよう感じるか？それを考えるとすぐに分かることです。

私がこの短歌に注目したのは、拙宅にとどき立ち寄る年配のご婦人が、他人の噂話をしては「かわいそうになあ」と言うことがあります、そのたびに不愉快になっていたからです。この言葉が不快なのは、相手を思い遣っているという同情心を装いながら、密かに自らの優位性を示しているからです。いわば偽善です。もちろん、そのご婦人にそこまでの考えは

なく、ただ単純に口癖のように言っているだけでしょうが、言われた当人（噂話では当人はいませんが）の心情を考えていない、デリカシーのない言葉に違いありません。

不遇な状況に陥っている人に対してどのように接するかは極めて難しいことですが、薄っぺらな同情の言葉より、相手のブライドを傷つけないように何気なく手助けをするとか、あるいは、本人が気付かないようなところでバックアップすることがベストなのかもしれません。

右の例は、個人に対して配慮したい言葉ですが、次の川柳は、乱れている日本語を指摘したものです。

日本語を壊すテレビのオバカキャラ 山口 高明

うざい きもい これが日本語なのです か 田中 みね

ヤバイ・マジなどは拒否する老いの辞書 宮川 真澄

ラジオの時代には、美しくゆかしい日本語が守られていたように思いますが、テレビの馬鹿騒ぎの中で使われている言葉には耳を塞ぎたくなるようなものがあります。このような不快な言葉も慣れてくると次第に違和感が薄れてきて、あれほど嫌ったギャル語ポロリ出る

荻田飛遊夢

というようになってしまいます。初めて耳にしたときに「イヤだなあ」と感じたりするのはまだ言葉に敏感だということです。その正常な感覚を失くさないようにしてください。

私たちが取り組んでいる川柳は「言葉」と「文字」で表現していますので言葉に鈍感ではいけません。作品においては、流行語を安易に採り入れないこと。そして、対人関係では、「自分が言われたら不快であろう」と思われる言葉は使用しないこと、等々を自戒したいものです。

九月六日(金)午後一時
アウイーナ大 阪

記録的猛暑がやつと影を潜め朝夕に秋の気配を感じる中、九月旬会は百二十名（投句七名）の参加で開催。初参加は中里はこべさん（大阪市）。

今月のお話は水野黒兔氏。「ヨーロッパ・高野山」と題し、高野山合祀祭へのお誘いを兼ね、ヨーロッパ旅行の句を川柳塔同人欄から抽出。ドイツに駐在されていたという黒兔氏の、ドイツ語の乾杯の歌が会場を大いに湧かせた。

足腰の軋まぬうちにヨーロッパ
レマン湖の風は5月のカフェテラス
ローマに通ず道は迷路で凸凹で
うつぶせたままの時間がボンベイに
ミュンヘンの私も飲めた大ジヨツキ
人形像白夜に乳房恥じらいぬ

月間賞は、立蔵信子さん（大阪市）

(司会―蕉子・かずお) (協取―真理子・賢子)
(受付―理恵・敏治) (清記―勝弘)

長浜 美籠選

父ちゃんは偉い人やと言ひ含め
景氣上向き庶民も含まれてますか
被災地に汚染水まで付け回し
速答せず含んでおくと父母が言う
含むところあつてしんねり飲んでい
休肝日にノンアルコール飲む辛さ
効能に若さと元氣美肌まで
消費税含んでなくてこの値段
巢立つ子に咬んで含めていきかす
含む所あり丁寧語が続く
平均寿命引き上げながらまだ元氣
それとなく含むもたせて叱る母
喜びとせつなさ含む子の門出
にっこりと含むもたされじれつたい
女性遍歴に家内は含まない
含み笑ひされて誤解の花が咲く
検問でノンアルコール胸を張り
飲み仲間私を含め楽天家
富士山も原発もあるジャパニーズ
バイキング全部おなか詰めたし袋
お祝ひの氣持ち含めてのし袋
スーパの中國産に思案する
咳ばらい含むところがありそうだ
平穩に見えるが憂ひ含む海
トレードに親族含む會議室

弘光 六點 保州 シマ子 朱夏 武臣 玄也 欣子 ふりこ 哲子 能子 久美子 葉子 いさお 靖鬼 耕治 善純 保州 ひとみ かずお 由一 隆彦 宏子

飲み込めず出せず含んだないしょ口
 含むことあつてか横に座らない
 そのところ含んでおいてと袖の下
 本命を含むと動き出す妬心
 いたわりのサブリを含む秋の風
 へそくりも含んだ預金帳がある
 意味ありげな目付き試しているらしい
 含むところあつて胸底熱うなる
 念押して言うたがすでに漏れていた
 ひん曲がつた胡瓜は意地を含んでる
 含まれているけどいつも以下同文
 何もかも含んで静か秋が好き

佳
 おこるのしあながとても好きだから
 ふくらんだ豆ほど効かぬ美人の湯
 答辞には悔し涙も含まれる
 含むところあつて夫を太らせる
 何も彼も含んでくれた母の胸

人
 含むことあるのかややこしく喋る
 地
 イクサにはこりこり仲間にはなれぬ
 天
 夢希望みんな含んでいる蕾

軸
 八割が体脂肪ですこの私

はこべ
 朋月
 理恵
 あきこ
 完司
 唯教
 美花
 義子
 月子
 和夫
 黒兎
 よしみ
 ひとみ
 哲男
 アキ
 楓葉
 寿之
 かずお
 見清
 朝子

兼題「服」 長井 善純選

ファッションに消えてしまった季節感 遠野
働いた汗を知ってる作業服 久美子
バーゲンの服嫌がって着ない犬 六点
誘われて場違いだったタキシード 柳弘
セーラー服の頃から妻と決めていた いさお
子の喪服私の為に作ります 欣子
今年の猛暑三度も着た喪服 (矢) 五月
母となる日を持ち侘びるマタニティー 美龍
さよならを言うために着る服がある 義
空腹時だけビツタリになるズボン 奏子
制服が初恋の味おぼえてる 紀華
ブランドが歩いてるよで顔が無い すみ子
あの頃にもう戻れないワンピース 扶美代
いい事があつた日の服今日も着る 美智代
宇宙服予約は月にしておこう 日の出
恥ずかしい派手すぎるやろベアルック 克己
乳母車服着た犬が乗ってます 耕治
姉ちゃんがタンスの肥やし増やしてる 弘風
再婚のドレスはうすい水色に 朱夏
二十年前の服でもびつたりだ 月子
マネキンの服は私に似合わない 久美子
夏休み終えて制服乱れ出す 宣子
正装で呑むと酔うのに暇がいり 見清
着痩せする服を求めて三千里 蕉子
バーゲンで趣味でないのに掴む服 千恵子

物的証拠ついているわよこの服に 由一
豊作を願ひ案山子にバーバリー 武彦
作業衣に着替えて自分らしくなる 茂
飼い主とベアルックのブルドッグ 隆彦
よれよれの服の帰宅は二十五時 敏治
和服には様にならない白マスク 富子
デイスーパービス母はいそいそ一張羅 まつお
どちらかと言えば好きですチャイナ服 光久
金婚式少し派手だがベアルック 扶美代
派手で結構悔しかったら着てごらん 千枝子
流行が去って着る気になった服 恵美
同窓会出席通知服次第 みつ子
お転婆も今日はすましている和服 佳
九条に迷彩服を着せたがり 耕治
ドレスアップしてたこ焼買つてはる 瑠美子
新調の背広歩幅を広げさせ 正雄
旅に出る服は十歳若くする 大子
黒を着る少し背筋がシャンとする 見清
人
子や孫に軍服だけは着せやせぬ たもつ
地
見て見ない着るまで待つてする介護 加お里
天
哀しいな軍服似合っている遺影 恭昌
軸
私より高い服着てますベッ ト

兼題「ためらう」 小林 わこ選

天候にためらいは無い父の靴 遠野
原発をためらい豊かさもほしい 唯教
幕が開くまだためらっている私 いさお
ためらいもみせずに妻は脱皮する 理恵
ためらった忠告 言えぬまま終る 見清
一言をためらう部下のおもいやり シマ子
ドナードためらい無いと書いておく (矢) 五月
エイまよ裏か表で決めてやる 勝弘
同人誌やためらう古紙に出す 弘一
吊り橋を渡る渡れぬ恐怖心 久美子
助詞ひとつなおもためらう締切日 黒兎
胡瓜一本みんな手にしてまだ迷い たもつ
延命をためらうことの無いベッド 朋月
ためらわず貴方とならば何処までも 紀雄
ためらっている間にチャンス逃げてゆく 光久
青い日のためらい傷のある手首 淳司
リストカット悔いを残した青い疵 寿之
グルメツァー決め兼ねている和洋中 久美子
断捨離へ思い出さえもためらわず 武臣
子に臓器母にためらいありません 一歩
九条あつて何故にためらう平和論 弘一
ためらいを見せ自由は手離さぬ 葉子
妻悪いためらいながら本音言う 忠昭
もう一軒寄るかそれとも孫の顔 茂
ためらいの背中をボンと母が押す 能子

踏ん切りを付けると叱る稲びかり

ためらいの奥にゆかしい薔薇の香が
今更に何をためらう花の喜寿

ためらうとお目が高いと寄ってくる

長生きをためらう増税が攻める

ためらいの疵を刑事見逃さず

ためらわず諭吉にします心付け

遅刻して気後れのする前の席

後添いの話ためらう三回忌

ためらわず海外へ出る土まず

澄み切った空はためらいなど持たぬ
ためらいを見兼ねて妻はさつと決め

峠から秋がためらいながら来る

ためらいもみせずゴキブリ一騎打

一瞬ためらいボール股を抜け

ためらわず明日にむかつて立ち上がる

ありがとうだけはためらいなくいえる
長生きをためらう母を叱りつけ

ためらわず大きい方を取りました

体罰と愛のムチとに揺れている

ためらわぬ半沢直樹倍返す

ためらいの横で笑うの天邪鬼

ためらいの横で笑うの天邪鬼

ためらいの横で笑うの天邪鬼

ためらいの横で笑うの天邪鬼

武彦

哲子

日の出

希久子

靖鬼

武臣

敏治

保州

宏子

武彦

完司

山久

哲男

朝子

五月

保州

朱夏

紀雄

宏造

宏造

宏造

宏造

兼題 「くるくる」

米田 恭昌選

包帯を巻けと言ひ張るかすり傷

ボール際くるくる回るジャッジの手

不意の客くるくる妻がまわり出す

熱風に顔をしかめて風車

新品のペンくるくると試し書き

くるくると気転利がなくなってきた

くるくると変るワンマンの思いつき

くるくるとフォークダンスの花になる

煩惱とくるくる回る万華鏡

使い廻してきたのか滑らかなお世辞

くるくると働く蟻の冬支度

風見鶏くるくる風を読み損ね

くるくるとネットが世間広くする

酷暑終え枯葉くるくる風の乱

赤糸でくるくる巻きたい君

ブチ家出ご近所一周して帰る

くるくると回つてくれぬ脳細胞

すこし派手かしらクルクル赤い靴

くるくるとタンゴに酔った赤い靴

目ん玉をくるくるさせて聞き上手

その手には乗りたくない赤とんぼ

耳掃除くるくる妻のなすがまま

くるくるとコンビ二回る妻のす

日傘くるくる妻はひらりと魔女になる

夕焼けに溶け込むメリーゴーランド

風ぐるま遠き日偲ぶ子守唄

孫が来る爺は朝から独楽ねずみ

バトンガール夢見て鉛筆まわして

ほお赤き少女の腰のフラフラブ

ドレスと彼お出かけの度かえてます

思惑を見透かされてる風車

事も無げに妻くるくると脱皮する

同じ場所くるくる地下街で迷子

思い出くるくる涙も宝石だ

秘めて持つ野心とぐるを巻いている

フラフラ昔のように回せない

こまねずみのごとかあさんの割烹着

中トロが干からびていた四周目

走馬灯に映す昭和のあれやこれ

くるくると姉妹仲良く亡母の帯

童巻まで連れてきました乱気流

くるくるの包帯うれし三歳児

かざぐるまくるくる回る水子の忌

老妻はまだ八十路男のネジを巻く

富子

菜々子

美智代

敏治

求芽

由一

六点

柳弘

理恵

克己

希久子

正雄

弘光

賢子

茂

いさお

恵美

善純

たもつ

楓楽

楓楽

楓楽

楓楽

楓楽

おどけおどけ

毎月24日締切・35句以内厳守
掲載は原稿到着順となります。
楷書で誤字のないようにお願いします。
編集部

川柳ねがわ(大阪)(前月分)籠島 恵子報

自家菜園身体に元氣植えてます
夢を見る腕枕で寝た若い頃
ヒビ割れの青磁の壺に領収書
会釈した女は誰やろサングラス
シリコンのバストを詐欺で訴える
子育ての癩癩玉を訴訟され
歌謡詩にヒント貰って作句する
両腕を回して愛を深くする
買い替える毎に分厚くなる眼鏡
歳月へ三猿になり一つ屋根
手を合わす亡母の残した大師像
ロボットもその内きつとする訴訟
両腕にすっかり家族守られる
老人会いっえ同窓会ですよ
プランター色気ちよっぴりブチトマト
痴漢訴訟やっとな罪を粘り勝ち

忠央 麗 恵子 博 弘風 秀雄 博泉 仁 美智子 弘一 賢子 朝子 祥昭 ルイ子 さち子

川柳塔すみよし(大阪) 森松まつお報

荒れた世に心しずかにどう生きる
荒れ狂うシベリヤおろし春を待つ
失恋の荒れるハートに酒流す
荒野にも分け隔てなく日は昇る
荒れた字だ友に何かが起つて
荒れ狂う海にも晴れる明日がある
よく荒れる夫婦もいつか五十年
荒れた頃母はだまっつ花を活性
東北の荒れ地にひまわりの笑顔
波瀾万丈おくびも見せず咲いている
荒れる子に体を張って諭す母
家庭不和あんな良い子がそれてゆく
さりげなく痛いとこつく負け惜しみ
コンテストまさか子供に負けるとは
負け組になるまい呼吸整える
舌代はカード払いと時価の寿司
得意顔あとで恥かく二枚舌

美江 銀杏 三郎 鈍甲 亜成 恵子 洋 美つ子 安昭 重信 裕之 シマ子 ゆみ子 五月 典子 朝子 和代 安代 温子 かりん 公平 美龍 公誠 美和子

和歌山三幸川柳会 武本 碧報

逆立ちが常識してる歯磨き粉
招待状六月四日歯医者から
あどけない少女が噛んだ金メダル
歯が立たぬ洒落にストロー噛んでいる
運命の曲を聴かせる歯科医院
食いしばる歯があるうちは良しとする
下駄の歯がちびても踊る盆踊り
歯ざしりを宥めなだめている奥歯

きく よしこ 町子 章子 義泰 みね イセ 幹子

閻魔さん知らない人の二枚舌
出せと言うから舌を出す医者の前
とにかくも謝罪しといて舌を出す
政治家の舌は恐らく無尽蔵
上品に言おうとすれば舌を噛む
舌たらず誤解を生んでいる会話
落ち着いた今子育てが懐かしい
紆余曲折やつと目的辿り着く
わたしより先に着いてる土産物
旨い酒果てに行き着く梅茶漬
銀河鉄道深夜便のせ君のもと
再会を約し二人の着地点
世界遺産着いたらそこはゴミの山
着払いチャッカリしてる子の荷物
妻からのメールがいつも酔い醒める
海岸に得体の知れぬ物が着く
着く頃が食べ時ですの思いやり

妙子 五月 勝弘 桃花 日の出 直子 満知子 舞夢 美世子 篤子 靖子 柳弘 昌紀 克己 善純 芳香 志津子

耳栓を持参してます歯の治療
奥歯から徐々に本音がこぼれ出す
切歯扼腕ぐつとこらえる宮仕え
抜けた歯を屋根に投げたは還か夢
紆余曲折水に流して現在地
蓼食う虫あつてわたしも売れていく
さまざま意見へ議長ラッパ吹く
さまざま語句を操る五七五
どの角度から見ても尻尾が見当らぬ
さまざま過去ふつと夜の底
下積みをさまざまという自信
さまざまを諦めさせる多数決
さまざま事件で揺れている地球
指揮棒に吸い寄せられてゆく音符
子ら果立ち小さくなった朝の音
瞑想をすると雑音良く聞こえ
靴音が今日の成果を物語る
晴れる日へ耐えねばならぬ雨の音
秒針の音とつき合う不眠症
静けさは水琴窟の一半

雑音に慣れて口笛吹いている
気持よく鼓膜をゆらさる応援歌
心音で胎児がママにラブコール
歌楽器ミュージーズに見放された僕
物忘れ防ぐつもりの一万歩
全力で防いでくれる妻と居る
脳に酒注いで退化を防ぎます

義雄
起世子

川柳塔打吹(鳥取)

野口

節子報

山田耕治選

准一 幸子 和子 純子 眞智子 高夫 碧 菜摘 美羽 元三 孝子 保州 俣子 彦弘 富子 昭枝 当代 昇 絹子 次根 ひろ子 弘子 美花 智三 愿

任せられ気張った後は運次第
鏡よ鏡お任せします試着室
飛行機を計器に任せたら落ちた
任せたと云った裏から指図する
任せると言われてからの長い鬱
転びそうはらはらさせる夫の足
許容量越した地球が水浸し
ハラハラと散る為少しダイエット
はらはらとさせる夫は認知症
再稼働はらはらと出す認可証
無花果の葉っぱくらいで隠せない
白杖がホームの端を探り当て
一億が活断層の上にいる
納まりの良い枕だと首が言う
子の成長見届け高くなる枕
枕にする一寸拝借ぬいぐるみ
盗人に母がぶつけた木の枕
眠れると高価な枕買わされた
抱き枕彼女のかわりギュット抱く
お気に入りの枕で君の夢をみる
枕からクレオパトラやモンローや
同じ夢見ていた頃の膝枕
懐かしい人のおいがする枕
願い事まだまだ足りぬ流星群
流れ星願ひ途中で消えないで

たけ代 玲子 照彦 耕治 くにこ 和子 三津子 道子 滋 芳光 紀の治 泰山 公恵 美代子 龍枝 重忠 悦子 貴恵 美佐枝 石花菜 美ツ千 美知江 野蒜 紀美恵

佳句地十選

(9月号から)

瀬戸 まさよ 選

愛燦燦受粉のりんご良く実る
古典的なマンガで読んで文学部
周平を読む黄昏の味がする
流れ星望み一つも言う間なし
もぎ立てのトマトのよつな少女達
中心をずらして本音さぐりだす
うろうろしてるばかりの蟻もいる
ソプラノの話し声する花の径
ネクタイを結び新たな顔になる
耳よりな話雑談から拾う

花匠 好文 一弘 貞子 かりん 蜂朗 千華 典雄 庸佑

音楽の流れる野外コンサート
上等なモモが流れてきたバブル
好きですと流れる雲に言ってみる
血を流す平和を願うピラミッド
流れ星きつと嬉しい知らせだよ
靴底が減って一日流れ去る
ヤシの実の流れ着く先読んでない
日記には時の流れが止めてある
歳月の流れに溶けたわだかまり

高知川柳社

小川てるみ報

頭の芯を針で突つつく二日酔い
突き抜けた釘に迷いはなかったか
今がチャンス女神が軽く背を押す
ふるりの味を突き出す心太
手応えは確かにあった槍の先
とまどっている間に突き指を犯す

川柳塔みちのく(青森) 小寺 花峯報

勝 憲 重 利 芙 美 子 清 久 芽 代 完 司 義 人 玲 坊 節 子 圭 二 美 香 三 郎 美 子 和 広 吞 舟 つとむ きよし 初 枝 柳 子 ひとし 美 鈴 洋 子

単純に足してできない母の味
キラキラとくれた青春のミラーボール
農いのちリンゴと会話しています
単純な風邪じゃなかったレントゲン
単純に生きて明るい絆の輪
安らぎは妻の鈍感力にある
梅雨明けぬ空からうつを浴びている
毎日の熱燭燭を軽くする
浴びるほど飲んで銘酒にしてやられ
荒れる日も風の日もない水中花
この土の道しか知らぬ土に生き
単純な男を両のポケットに

竹原川柳会(広島)

古田 太虚報

まだ残る三歩さがって歩くクセ
石段も一歩一歩と寺参り
影法師いつもわたしの歩と語る
歩いて歩いてやっと夫婦の味になり
真っ直ぐに歩いて生きた君が好き
老いの坂美意識だけは持ちつづけ
無料ですたつぷりどうぞ自然の美
心の美仏さまから教えられ
美しく老いることなど夢の夢
美しい願いを笹のてっぺんに
青い空恋しい人はもういない
恋ならばしんみりして猫に言う
やめられないカーブに恋して15年

則 彦 芳 生 一 吞 井 蛙 花 匠 黙 人 隆 樹 花 峯 一 花 慕 情 五 楽 庵 半 德 規 代 寛 幸 子 敬 子 汎 美 比 呂 子 年 子 栄 恵 蘭 幸 房 子 慶 子 步 美

富 柳 会(大阪)

古田 千華報

恋は愛愛は情へ五十年
色眼鏡恋の噂はおもしろい
猫の恋なんと辛抱強いこと
熟年の恋の味です梅らつきよ
初恋は妻でなかったのはたしか
もう恋も一人の旅も夢のゆめ
明日がある今日はここまで筆を置く
期間限定まんまと術中にはまる
ど真ん中置いてもらっている私
蛸がノスタルジックに鳴く夕陽
誉められてどんどん湧いてくるやる気
二十四時間何と長い日短い日

輝 恵 淑 子 笑 子 千 代 美 静 風 力 栄 香 あ ゆ み 厚 子 史 子 千 枝 一 路 千 華 彦 次 寿 之 登 子 和 子 未 知 高 鷺 晴 美 伸 雄 信 子 文 重 柳 子 武 人

今が好き幸も不幸も丁度よい
運不運小なことは気にしない
不都合を隠すネットも新聞も
谷間へ命を配る小商人

母の掌は勿体ないが都合よい
この世からあの世の時間まで走る
今日はいいい日一年分の笑い皺
飲む都合だけはすんなり決まります

自分史の落丁埋めている都合
平穩を守り通したい笑い顔
振り向けば今来た道が笑つてる
身の丈に合うた小々な旅が好き

さい銭の割には多い願い事
うす墨の枯れ山水に似たいのち
緻密さが勝つて小細工儘ならぬ
忘れたい胸に刺さった小さいとげ

そのままにしてよ舞台は今佳境

川柳塔鹿野みか月(鳥取)福西

今日から明日へ微妙な綱渡り

次々とまさか起きて鍛えられ

靈魂に姿だぶらせ手を合わす

ご先祖の足音がする盆の夜

左脇何時も私の指定席

天才を自負した蔓の驕り癖

盆暮れに無沙汰無礼の詫入れる

胡麻を播る天才的な気働き

静子

奏子

深雪

欣之

恵

よし

正治

清

アキ

華

千恵

より子

常男

紅紫朗

壽峰

七朗

森子

茶子報

螢

鈴

弘子

盛桜

(酉)和子

茶子

すみれ

いさを

何歳でもみんなまさかで死出の旅

天才に敗けない汗をかいている

触れないで微妙にちがう傷と傷

へそくりはまさかに備え亡母の遺品

微妙は苦手それでいつつも損をする

浮世の変遷まさかを生きて百二年

我乍らまさか卒寿を生きたとは

児が巣立ち開けたこぶしに何も無い

最近の世相まさかが多過ぎる

天才とはちがう大臣七光り

微妙にゆれて蝶の孵化美しい

暖味が微妙な変化きづかない

嘘だらう裾を後ろで踏む味方

同じ手で漬けて微妙な梅の味

驚きまでまさか津波は来ないだろう

南大阪川柳会

津守

柳伸報

背丈より気高さ誇る富士の山

高いから自己満足をする鰻

九条の狼煙は高く高く上げ

原発は結局単価高くつく

神の怒りいつかは触れる高い塔

脱いだ靴子供は狭垣間見る

靴下を脱いでと謎をかけられる

殻脱いだセミは短い恋に鳴く

脱ぎなさいあなたも楽になりなさい

清

なぎさ

志華子

一歩

たもつ

庸佑

郁夫

あさ子

ダン吉

照彦

はるお

八重

実満

孔美子

惣子

露子

彩子

(酉)和子

くに子

富久江

かおる

満

美代子

蟹郎

しがらみを脱いで久遠の旅に出る

ダイエツトするする言うて食べてはる

三食で飽も管めないダイエツト

樞担ぐ人の身になりダイエツト

ビールさえ飲まなきやでるダイエツト

ダイエツトベジタリアンに徹してる

夏冷麺冬はやつぱり鍋料理

自己流の料理で夫飼いならす

チンしてと妻は今夜も趣味はしこ

毒少し混ぜて料理が旨くなる

目で食べる料理貴船の蟬しぐれ

花火見る料理へハモが踊ってる

著名人徹子の部屋で料理され

亡き父母も団欒に来る祭すし

源内を怨む鰻の最悪日

平凡に生きた幸せ気がつかず

花道の最後もやはり向かい風

蟬しぐれコンダクターはどこにいる

直子

集一

更紗

正春

楓楽

克己

典子

柳伸

昌紀

栄子

あや子

和雄

弘子

勝弘

忠昭

タカ子

修

祥昭

まみ子

遡行

幸子

雅美

百合

美千代

かつ子

かつ子

川柳茶ばしら(愛知)

関本かつ子報

消費税あがらぬうちに門を買い

入門の頃は親切だったのに

陽の目見た着物に母のしつけ糸

マネキンの上手い勧めに試食する

謙遜をしつつ披露の武勇伝

色褪せて見える入魂した没句

座ブトンで生き嫁入りの掛布団

まみ子

遡行

幸子

雅美

百合

美千代

かつ子

かつ子

岩美川柳会(鳥取)

石谷美恵子報

勉強がしたい国の子地球の子

夫婦でも明かしてならぬ嘘がある

下積みも勉強でかい夢がある

夏休み勉強よりもカブトムシ

がむしゃらに生きて女の香がない

嘘も方便人間なんてひきよう者

見舞う度嘘がだんだんうまくなる

嘘泣きを信じて押した保証印

嘘をつく心の奥が痛みます

全力を尽くし神仏祈るだけ

ひたすらに西へ歩いてる命

いい酒だひたすら心なごみます

ひたすらに母の面影忍びます

ひたすらに生きる愚かと言われても

手術台ひたすら医師を信じつつ

がむしゃらに生き可愛い妻になり損ね

松露川柳会(鳥取)

山本

正光報

製氷器ふる回転の夏休み

恋の熱氷枕で下がらない

蜂蜜かけ汗もふつとびかき氷

熱帯夜氷枕で夜をすこす

かち割りもたちまちお湯の甲子園

氷砂糖はおばり喉の機嫌とる

氷山も崩れ始める温暖化

白熊も水もらって元気でる
宇治抹茶ミルク金時八百円
氷屋が汗をかくほどよく売れる

川柳クラブわたの花(大阪)寺川はじむ報

青雲の志抱き道半ば

頂上を目指すは日本一の山

ふり向かぬ目指すは前に只前に

捨てられず夫の遺品LP盤

球おかしいと見抜く眼力ホームラン

目指すもの末は博士か大臣か

他国よりサンダル履きの富士登山

無心な孫汚れぬ瞳守りたい

選挙後の議員の良識試される

円満に暮しても減らぬ愚痴

目指すもの持つてゐる人は目が眩し

被災地を巡り気遣う両陛下

目指すもの小さな絆護つて

全没の句会を終えた気の重さ

百歳を目指す趣味を続けてる

職活に参考書より化粧品

川柳塔唐津(佐賀)

仁部

四郎報

車やめバス通勤に路地も見え

連休も日曜もない独り者

給食のメニューでじいの御晩酌

改革がいやでねじれの所為にする

鈴枝
正光
雄々

中味より先ず勝負する包装紙
朝焼けに目をうばわれた午前五時

倉吉川柳会(鳥取)

竹信

照彦報

生かされて祭りも過去の月日見る

宵祭り疲れ果てたる子が重い

ふるりの祭りを見せに夏帰省

過疎の村祭り囃子もカセットで

お祭りがごちそう食べる日であつた

敬えば神も仏も笑いだす

尊敬するアツイアツイと言わぬ人

取りあえず家のカミさん拜んどく

母の背は敬老会のバスの中

敬った人程早くこの世去り

お伊勢さん出雲大社に氏神さん

医者の子はお医者お寺の子は小僧

人が好きいつもすんなり輪に入る

すんなりと姿を鏡は映さない

絶対に俺は百まで生きるのだ

絶対にうちの母ちゃん愚痴言わぬ

絶対に対うそはつくなど教えられ

万人に今日が終わると明日がくる

今度こそ絶対やめると言う煙草

子々孫々忘れてならぬ八月忌

勘当と言つたが我が子に世話になり

戦争は絶対しない国になる

エンマ様高い戒名付けました

蜂朗
實

恭子

萩江

雄大

悠子

瑞子

康子

完司

鬼一

光

英子

醉美蓉

石花菜

和子

祐子

重忠

貞子

美代子

次男

由紀子

茶子

日出子

智恵子

照彦

川柳ふうもん吟社(鳥取)夏目

一粹報

もちろんだ妻より先に逝くつもり
好奇心燃えて五感を漲らせ
三途の川アツプこいたら何処へ行く
消しゴムが違うちがうと身を削る
美しい花はピークを知って散る
しあわせの中に漲る子の笑顔
ファスナーの反抗老いが持て余す
欲張りや欲を出し過ぎアツプこき
当てる時だけ腕を組みたがる
もちろんさ我人生の糧は妻
うなぎ食い若さ漲るとないしよ
絶頂の椅子で忘れている初心
背伸びした暮らし長くは続かない
もちろんよ二つ返事で会いに行く
才能におぼれてアツプこいて行く
漲った夢を燃やしている若さ
うぶ声に漲る生きてゆく力
浮気くらいもちろんあるよ二つ三つ
アツプこく汚れを知らぬ淑女です
上手口いずればアツプこくだろう
何事もピーク過ぎるの早すぎる
夏の海漲る若さ水しぶき
牙をむく闘志みなぎる狼のボス
先生は握手ももちろん僕は素手
老いてなお大志を抱く書に出合う

洋々 一瑤 金祥 美恵子 清信 節子 綴 回春子 雅女 弘康 振作 無限 昌鼓 美佐枝 蟹郎 地佳平 みゆき 凱柳 とも湖 妻子 主一郎 薫 重忠 善夫 文香

人と畑ニツコリ笑う雨のあと
見た目では漲る闘志見抜けない
みなぎる愛だんだん彼を束縛す
漲ってハリキリ過ぎて相手ない
育てたい花はかれても草は増え
余生にも反抗期あり老夫婦
聞き合わせピーク過ぎればバタと止み
もちろんと言えぬ政治が要るのです
自分史にピークの頃の事ばかり
もちろんだ今でも好きと言つてやる

城北川柳会(大阪)

近藤

弁解の口をまつ赤にかき水
贅沢の余裕は無いが酒は別
煙にまくほど悪事はしていない
米櫃は余裕など無い子沢山
極東の孤児に日本がはまりこむ
魔屋の夾竹桃に亡母しきり
健康法割算上手になりました
損得で動くつもりのない余裕
一合でふわりと酔える嬉しい日
汚染水選挙終えてから洩れる
余裕などないが欠かさぬ義理の酒
女子会に黒一点の俺が居る
冷製のおでんの鍋に迷う箸
腕尽で敵捻じ伏せてからのウツ
鍋敷のような生き方やつて来た

房江 かつよ 由美子 克也 清帆 春名 和子 隆浩 秋月 一粹 正報 洋志 いさお 求芽 五月 正 志華子 典子 義昭 堅坊 一步 和夫 弘風 公子 縣仁 作

あとうんのタイミンクです五十年
気まずさが残る催促貸した金
キュービッドいつもちよこつと遅いのだ
断わった会の幹事と隣り席
平均寿命またのびましたお月さま
一步引き気まずくならぬ友の中
野の花を一輪生けてみる余裕
一步引く余裕がつくる笑い皺
蟬までも熱中症かト長調
タイミンクいい日旅立ちフルムーン
気まずさの訳聞く勇氣から和解
茶柱に気まずい空気癒される
サンセット影が重なるタイミンク
五人目になると子育てにも余裕
反論をしないブラック企業たち
神さまのいたずら狂ったタイミンク
すき焼きは猛暑びつたし今でしょう
成し遂げた充実感にある余裕

川柳大阪

森松まつお報

そないもこないもあつてたまらんわ
そないまでしてタイジメに胸痛む
そないしな虫にも命あるんやで
私にそない言いなや無理なこと
くじけないこころ養うみつをの詩
ジイジ等の面倒見ると孫二歳
根っからの大阪弁に養われ

千恵子 榮子 修 実 たもつ ルイ子 杵香 郁夫 直樹 あさ子 朝子 集一 賢子 克己 勝弘 倫子 武彦 柳弘 勝弘 善純 かよこ 美世子 由一 珠生 笑風

養殖の鯛なら放射能はない
八十路坂英氣養う昼寝あり
錆ついた脳に養う筆と紙
定年後世帯主が入れ替わる
情操を養う幼児期の絵本
欲出した宝くじにも見捨てられ
生きる欲それがすべての人の欲
産声が未来の夢を握りしめ
欲望の風が五感をとき澄ます
欲望をはなれば僕は仏さん
イントロの長さに渴く欲の皮
食欲は無いと言いつつ酒は飲む
欲かいた結果が裏目やけ酒だ
限りなき欲が動かす世の仕組み
無欲ではやっぱり掴めない勝利
野暮なりに楽しく歩む趣味の道
野暮なこと古い日記に書いてある
肩ぐらい抱いてと思う星月夜
戦争ダメ新たな誓い原爆忌
近代化記録記録のものの作り
失望すアベノミクスの外交感

あかつき川柳会(大阪) 山本 柳昌報

一步 彦太 万紗子 紀雄 朝子 喜楽 川童 鉄心 柳昌 和 柳弘 五月 公平 元 堅坊 芳香 まつお 照月 司功

不都合へ得意の惚けで切り抜ける
父さんの骨は儂い音がした
氣を許し靴を脱いだが最後です
予定表満杯昨日今日明日
人間を消耗品にする戦
人とひとつなぐゆるキャラの得意
予定なしゆつくり母の相手する
足許を僕がすくうぞ安倍総理
また飲もうあれが最後になるなんて
バラ色に染めたい自分史の余白
孫植えたトマト鈴成りVサイン
足許に私の殻と蟬の殻
暗い世の足許照らす十字の灯
今年ほど九条重い八月忌
儂くも愛し二つと無い命
上を向き過ぎて足許がらんど
柳友の呼名も今は無き計報
不得意を得意に変えた褒め上手
足もとで客の値踏をする女将
八月のカレンダー赤丸二つ
足許を固めてからは真つしぐら
終章へ足許だけは掃いておく
生きている明日はよいこと一つする
足許にマグマが走る町に住む
思惑を見透かされてる日向水
これからは日にち薬という我慢
夫への笑顔日に一度がやと

秀夫 瑠美子 奏子 六点 克己 朝子 穩夫 堅坊 篤 隆昭 哲男 廣子 敏治 たもつ 祥昭 紀乃 壽峰 桃花 高鷺 信二 能子 のぶ久 わこ 忠昭 柳弘 直子 見清

試合するたびに砂減る甲子園
南方で日本恋しとしゃれこうべ
結婚記念日普段通りで変わらない
足許が軽いいいことあったらし

川柳同友会みらい(鳥取)吉田 陽子報

蜘蛛の罫に何時かはかかる悪い人
更新にメガネ使用の文字消える
神棚をまだ降りて来ぬ願いごと
よい匂いどこかでユリが咲いている
客待ちの花に優しく迎えられ
ひっそりと出したクイズが当たたり
採め事を黙って見てる金魚たち
本年も無事に見納む花吹雪
CTの結果に元氣透けて見え
病むたびに身のまわり品整理する
不肖の子へ未練残して母は逝く
子の肩に親の描いた夢重い
出稼ぎの父のお陰で今があり
杖となり母への感謝少しでも
リラックスの中で答えが丸くなる
強かに噂の蔓は延びるもの
汚染水に混ぜれば怖くない
細やかな心配りが美を保つ
次世代に渡す家風を細やかに
学ぶのに無駄なことなど何もない
雲つかむ話大好き耳そうじ

義泰 たかこ 敏子 千代 陽子 純宏 和之 陽子 由里 一聴 あゆみ 葵 茂子 みどり 温子 章子 美恵子 信子 理子 嘉子 敦子 みち子 紫音 澄子 薫 安子

— 122 —

里帰り待ったあの日の上野駅
里がえり角を曲がればもう走る

和代
水正子

川柳ささやま(兵庫) 北澤 桐民報

久子

笑み交わし今日を感謝の散歩道
まだ少し画く血の騒ぐ長春バラ

美緒子

盆踊り浴衣姿は遠い過去
原発の事故には謎が多過ぎる

美紗子

貯まるのはドリンクの瓶ビール缶
やがて逝くあの世のことは謎ばかり

純子

火花見る約束浴衣縫い急ぐ
さらさらと小川裏切ることなし

真由

本心は謎の彼方へ友は逝く
診察後薬の土産重くなる

多美子

熱中症に負けずにビール飲んでます
あと何年謎の人生不安です

開子

雨の度背伸びの草に疲れ果て
裏山の小鳥の声に耳すます

可住

針の無い時計に時間教えられ
亡き夫とも一度飲みたいあのビール

かほる

照代

美智子

美智子

西宮北口川柳会(兵庫) 藤井 宏造報

勝弘

熱煙も湯割りも旨いビール党
今もなお流れ出ている汚染水

盛夫

半額のビールに今日も誘われる
底流に貧しい暮しある民話

正和

骨相が良いと誉められ照れている
終戦日父は黙ってビール飲む

哲男

無限

無限

写経する筆に祈りを込めながら
自信がないんだな語尾が流れてる

千賀子

骨惜しみしない介護の手が温い
お迎え火兄かも知れぬ流れ星

宏造

ビールしか飲まぬ昭和の石頭
列島に誤報流れた地震予知

折杭

乾杯のビールが好き日本人
平凡に暮せる日々を掌を合わせ

美龍

ひたすらに祈る憎しみ溶けてゆく
北新地ビールと思えない値段

忠

寒い日もよく売れている缶ビール
魚好き模型のような骨残す

キヨミ

あふれ出る汗へお疲れさんと泡
錠剤を祈る気持ちでのむ日課

淑子

一心寺よその遺骨に手を合わせ
ああなんていい風だろう君と居る

千代

まあまあ妻だと思ってお茶の味
ルイヴィトン質に預けて六ヶ月

秋果

夏祭り浴衣のきみに照れていた
優しさをもたらして生きているドラマ

章子

世論には流されまいと肘を張る
なにかも水に流そう流したい

順子

骨があると云われた手前やせ我慢
体調のバロメーターにしている酒

光久

ビール飲み甘えてみたい下戸である
散骨は太平洋のと真ん中

嘉代子

ひまわりも注意しなさい熱中症
一瞬に感喜流れる呱呱の声

武臣

一瞬に感喜流れる呱呱の声

ひとみ

一瞬に感喜流れる呱呱の声

武彦

終章を笑顔で閉じた父の骨

比ろ志

六甲川柳会(兵庫)

伊勢田 毅報

にぎやかにビール三十三回忌
ビール酒ならべ女子会盛りあがる

いわゑ

噴水が猛暑に抗うように噴く
そこそこの波もかぶって耐えてきた

みつ子

伊勢神宮千年杉がそそり立つ
別格だ今年の気温・ゲリラ雨

美穂

戦禍知る老母の語りを聞くお盆
別格の威厳漂う床柱

能子

川柳の特別イスに座る夢
別格の三保の松原富士の友

忠貞

九十九の父の泳ぎに血が跳ねる
歌の会腹筋きたえ美声だす

道子

出かけよう養える気持を跳ね上げる
臨月に元氣な足が蹴ってくる

和郎

そこそこ楽しめるまでが長続き
夫婦仲そこそこだから長続き

千賀子

そこそこ言われるまでが一苦労
そこそこで済まぬ受験の子等の日々

邦子

線香より冷えたビールを待つ仏
欲出さず余生そこそこ今が良い

洋次郎

悔やんでも悔やみきれない詐欺にあう
山盛りの愛を残して逝った母

盛夫

心頭を滅却できずかき水
負けそうなチーム応援してしまふ

浩司

心頭を滅却できずかき水

美恵子

心頭を滅却できずかき水

弘子

心頭を滅却できずかき水

利子

没になり選者のせいにする駄作
 シニア券持つてカラオケ梯子する
 ノー・モア被爆者苦しむ友がいる
 まあまあの妻に差し出す感謝状
 痛む胃の裏に心がありそうだ
 お静かに黙祷ですよ蟬時雨
 全没でビールが苦い反省会
 躍動する球児へ拍手甲子園
 愛を盛ることを忘れていた器
 五欲まだ元氣長生きするのかな

はびきの市民川柳会(大阪)永田 章司報

茂 政一 照子 武彦 ひろ 敏夫 穀 光久 無限 楓楽
 あ夏のあの日で時計止まってる
 太陽にアタック向日葵の自信
 被災地の空あおいのに青いのに
 思い切りかぶりつきたいけど入歯
 前二本何でも囁んでみたい孫
 茶柱が立って朝から覇氣もらう
 今日からのかけこえばかりタイエツト
 玄米をゆっくり囁んで目指す百
 今回もリベンジしたい歌謡祭
 イエスマでアタック続く僕の恋
 申年で犬にかまれた過去を持つ
 夜のブルー人魚になって若返る
 若者の友情の糸軽いもの
 納得の空の青さが出ず悩む
 行くところも遺る事もない夏休み
 準備万端あすのスタート待つばかり
 シルク

臍の緒を切ってスタート台に立つ
 現世は色即是空と知る余生
 空耳ではないか再稼働の話
 ゼロからのスタート怖いものはない
 腕組んで空を見上げて策がない
 アタックの初心忘れぬチャンピオン
 岸和田川柳会(大阪) 佐藤 幸子報
 神様の爪跡を見る土砂崩れ
 コンビニは淋しい子らの誘蛾灯
 トリックと知らずに嫁になりました
 世の仕組欲望の渦を巻く
 表裏裏があつての世の仕組み
 じれったい女の私から誘う
 頭下げ溝板歩く選挙戦
 追えば逃げ追わねばそんな目で誘う
 自死三万淋しさに爪噛んだのか
 トリックを見て見逃す子の手品
 仕組まれた話に乗れと言いますか
 ゴルフには誘いたくない雨男
 爪赤く塗って生き方変えて見る
 釣り玉は投げぬエースの心意気
 粗品くれて最後はフトン買わされる
 密約は行間にある契約書
 爪一つ切れずに人の世話になり
 同居の仕組息子五十でやつと飲む
 特撮の妙今はCGあじけなし
 トリックの最たるものは多数決

高 鷲 久仁子 いさお 奏子 扶美代 章司
 蛙城 昭 いさお イツ子 香代 清 和美 愿 信二 幸子 丹吉 隆昭 珠子 武志 忠太 遠野 檜代 弘子 英夫 保州

付け爪を外して帰る市場籠
 守るものなくて気楽な夜爪切る
 複雑な仕組みの中で生かされる
 歩くのをやめたら元の猿になる
 核の平和は修辭トリック
 大山滝句座(鳥取) 新家 完司報
 暑くって飛び乗ったのが救急車
 生ビール枝豆それに扇風機
 裏山の蟬がお経を詠んでいる
 頭の中で湯豆腐が出来上がる
 卓袱台をなぜかひっくり返せない
 頭から生まれて頭から転ぶ
 見てくれに西瓜の味は無関係
 適当に息できるからありがたい
 クラス会マドンナ囲み輪ができる
 適当に生きて行くのもむづかしい
 年金の暮らしにもある淡い虹
 適当にあしらっておく三歳児
 饒舌もワイフの前には止まる口
 どうしても喜ばません歳をとる
 嘘ひとつ言って病人喜ばせ
 頭垂れ不戦を誓う八月忌
 独り居で生きる勉強しています
 盆の客外食にして切り抜ける
 良い人であらうとすれば損をする
 ぶきつちよに見えて器用な左利き
 丑の日になきを食べる赤い爪

ひろ子 みつ江 美籠 康信 義泰 照彦 紀の治 石花菜 芳光 芳山 くにこ 大鯰 麦青 幹啓 忠良 美恵子 蟹郎 雄大 けいこ 由紀子 風露 重忠 鈴野 久子 すみゑ 仁美

この俺が高齢者とは腑に落ちぬ

京都塔の会 樹本 宏子報

弁解の舌が却って信を欠く
気配りはあつさりするがいらしい
ためらつていたらあつさりいい返事
よく喋るのに褒めるのは舌足らず
あつさりは表の顔で悩みぐせ
分つて陰で操るいやな奴
選挙戦世論操る甘い罠
一本だけ操る糸を緩めとく
日本語も巻舌になる帰国子女
世界中にイクメン王子知れわたる
夢の中駱駝に乗って消えました
操られたことなど知らず追い風に
二枚目の舌はいつもは畳んでる
ジジババを操りに来る夏休み
欲深い人があつさり逝きはつた
我が家にはひげのはえてる王子いる
二歳児が回らぬ舌で譲らない
うちの王子今日はどちらへ行かれたか
舌先のミスに維新の底が抜け
あつさりへあつさりへ向く迷い箸
あつさりと交わした言葉に思いやり
あつさりときぎつ事を言うおひと
あつさりと本音洩らした肚の虫
テレビドラマ孫あつさと謎を解く
振り込めの二枚舌にはご用心

完司
義昭
弘子
求芽
啓子
宏子
泰夫
さゆり
弘之
英旺
満子
みどり
文代
かずお
公子
則彦
めぐ
葉子
益子
牛延
欣之
弥生
朝子
比ろ志
福子
ふりこ

豊中もくせい川柳会(大阪)藤井 則彦報

貧乏なくせに舌だけ肥えている
舌先で丸め込まれて口惜しがる
あいまいは監視カメラがあばき出す
樽太鼓気取るマイクの音頭取り
膝の傷泣かなかつたと見せにくる
ライバルの悩みを聞いているゆとり
あいまいにするそのうち時が答え出す
災害が住めば都の地を襲う
凶星らしい黙って膳の酒を注ぐ
あいまいで幅も深さも計れない
この猛暑耐えれば妻に耐えられる
人怖いもののけまでが怯えてる
不意の客レモン一滴足しておく
傷口に塩塗る鬼もいる世間
あいまいさうまく残して座をおさむ
まだやれる事がだんだん減っていく
お悔みの語尾はむにゃむにゃ不明瞭
気取らない友と嬉しい縄のれん
それとなく後は濁してお開きに
八十路まだ殻が脱げない蟬である
あいまいな目配せもしやラブゲーム
若さ溢れ闊歩しているハイヒール
責任をあいまいにするピラミッド
戦争で亡くした息子離れない
出来栄えは満足意図からはずれる
図画・工作じいちゃん出番夏休み

五月
庸佑

川柳藤井寺(大阪) 鴨谷瑠美子報

ためらつて手首に残る古い傷
美容液ぬつても消えぬ面の皮
底辺の風はそんなに気取らない
傷ついた分だけ優しい人になり
未来図を描くと心も晴れてくる
古傷もやがては想い出にかわる
気取らない町でほつこり暮してる
日記帳火花散らした恋も秘め
抱いてきた火花が胸に点火する
クラス会お久しぶりと火花散る
福知山火花が火花吹きとばし
カチカチと無事に帰れと母祈る
なやましい火花をあげさせた妬心
断層でマグマを抱いている女神
反骨が火花の中で仁王立ち
深読みをして下さって有難う
幸せは深い眠りと目覚め良さ
深い意味なんて無かった赤いバラ
新盆の悲しみ深く蟬時雨
火の女風の男の深い愛
罪深い人ほど浅く座るミサ
八月忌深い思いが甦る
この暑さ深呼吸して出かれます
被災の子心に深い深い傷
その幕を開ければわが罪が踊る
どこにでも黒幕もどき居て困る

武臣
紀華
雀舎
千代
則彦
美龍
美智代

まつお
扶美代
キーキ
清之
武人
奏子
美代子
龍一
みつこ
絹枝
光男
雅枝
悦子
信二
喜代子
アヤ子
いさお
森子
勝弘

内幕を知ったかぶりの人の口
二幕目はひたすら励む好きな道
台風が涼を引き連れ夏に暮
人生の幕ぎわで会う男運
運命を変える幕開けかも知れぬ

川柳塔わかやま吟社 川上 大輪報

渾身の力できみに泳ぎ着く
泳がないことも一つの策である
暗闇の中を泳いできた昭和
落ち零れでしよるか哀し流れ星
母さんは煌めく星になりました
冗談と言いつつ図星突いてくる
流れ星目を凝らしてた幼い日
ふところの螢は星になりました
流星が丸ごと願ひ包み込む
黒星の数は忘れたことにする
見切品きよろきよろ探す女偏
大物はきよろきよろせずの時を待つ
金髪の前をきよろきよろみる田舎
I.T.に老いがきよろきよろするばかり
後始末いつも悪いと叱る母
手本など何もなかった後始末
戦後六十年未だに消えぬ後始末
後始末何時も手を貸すボランティア
手切れ金頭悩ます後始末
言葉より金がもの言う後始末
遺品整理温もりがまだ捨てられぬ

六点
瑠美子
紀雄
弥生
あかり

あきこ
保州
紀久子
富美子
ほのか
准一
秀子
小雪
寿子
大輪
和香
よしこ
徑子
めぐみ
由紀子
紀子
智三
美子
佐一
千賀子
夕胡

結局は惚れた弱みの後始末

川柳あまがさき(兵庫) 加川 靖鬼報

土用の日おかずの端にウナギのる
波と節人より多くありました
ささやかに生きた夫婦に波立たず
四十で産んだ子ですが亡母のくせ
携帯から地震の知らせ騒ぎ立ち
好きですと胸の芯迄うずく声
潮騒がテトラポットに折れ曲る
仕事終え仲間と騒ぐ縄のれん
カロリが何だとはやくダイエット
お盆には帰ってこいと国訛り
カロリ計算表のおかげで明日がある
ささやかな幸せで良い夕散歩
生きるとは自然体ですセミの声
カロリのるつぽにはまるチョコレート
トロばかり遠慮も知らぬ孫五人
カロリも刺激も足らず昼寝中
サーファーの夢北斎の波頭
五十年妻にはじめてフチダイヤ
午前様隣りの犬に騒がれる
優先席に年寄り顔をして坐る
よく騒ぐ彼が一番淋しがり
暑気払いうちわ片手に遠花火
猛暑にもへこたれてない百日紅
何から話そうより先に肩を抱く
今からは貴殿になっていく臓器

克子
富夫
洋子
千代子
初音
雪菜
寛十郎
幸香
柳明
紀乃
野薫
あかり
和子
ひとみ
よしひさ
五月
菜々子
靖鬼
祐康
耕治
かずお
哲男
勝巳
朋月
美籠
奮水

わたつみの声とも思う波の音

川柳さんだ(兵庫) 堀 正和報

今日も又選者と合性悪かった
小賢しいヒントをくれるママと酒
飛ぶ前の蟬に宿貸す老い桜
我慢することは私の得意技
さっぱりと諦めさせるシュレッター
天災もギツクリ腰も不意にくる
さりげない会話の中にあるヒント
我慢しようもう先がない君とボク
振り向かぬ覚悟右足から一歩
妬みなまことしやかなデマが飛ぶ
口下手の妻がときどきいいヒント
被災地の挨拶いつも頑張ろう
戦前を知るや知らずや恋しがる
発想を変えればセミも応援歌
柔らかくただ美しい母でした
ネコパンチ決断力のその早さ
ごめんねを聞けば可愛くなってくる
酒タバコ止めて長生き嫌がられ
美味なれど姿醜いオニオコゼ
監督に耳打ちされて打てました
パソコンのさっぱり分からんカタカナ語
切れそうでさっぱり切れぬ腐れ縁
スマホ持ちショートパンツが街を行く
蛭追う浴衣姿が絵のようだ
雲退いて世界遺産の富士の山

比ろ志
哲男
忠
章子
歳子
キヨミ
一子
淑子
順子
美龍
光久
武彦
一泉
健二
雅尚
ひとみ
ちあき
茂山
廣子
つな子
野薫
祐康
和雄
雅司
富夫
俊昭

甘んじて受けてみたいな美人税
飛びつき暑くていいの夏だもの
取説を何度読んでも動かない

見
好文
正和

孫が来る小遣い追加が欲しい月
取り分を山分けしてるお役人
病院の前に真新しいポスト

弘風
秀雄
恵子

川柳ねやがわ(大阪) 籠島 恵子報

翠洋会(大阪) 太田 昭報

昭報

難解を平たく解いて冷奴

欣之

ポケットにニトロ忍ばせひとり旅
同窓会あの人だけがなぜ若い

浩二

大ジョッキ追加で凌ぐ猛暑の日

祥昭

若輩となめてかかつてとる不覚
手の中の幸気付かぬうちに過ぎて

捷也

ソプラノもアルトに変わった更年期

麗

暑氣払い年に一度の饅頭う
モノリザの笑み永遠の謎でよい

弘子

美味しそうこれもと追加した土産

美江

塩なめて暑い砂漠を生き残る

楓楽

怒っているらしいご飯に手が伸びず

かすみ

幽霊も思案している熱帯夜

舞夢

卒業はしても心はまだ女

郁夫

おばちゃんは常にけいたいしてる餡
生かされているから猛暑にも耐える

富子

試供品だけで間に合う妻熟女

柳弘

おばあちゃん裁縫上手でリサイクル

すみ子

未練ですか飛行機雲をのいたまま

修

猛暑日が続き脳天干涸びる

千歩

怒られてひと山越えた竹トンボ

洋

走馬灯わが半生の速いこと

公平

更年期いえない女盛りです

仁清

低金利なのに通帳花模様

満作

脈を取る主治医の仕草ご臨終

忠央

マラソンを笑顔はれやかゴールイン

正雄

争うでないぞと仁王さんの怒氣

茜

よく溜まるお金じゃなくて体脂肪

みつ子

ひまわりの笑いころげている平和

朝子

抱いた子にそとと押される車椅子

紀子

とって見て味見してから少し買い

博泉

けいたい指ケイタイにまでこけにされ

日の出

怒るのは体に悪い笑つとこ

さち子

老いの指ケイタイにまでこけにされ

桃花

ヒトラの髭を欲しがらるならず者

鈍甲

息子より頼りにしてるケイタイだ

善之

血圧が高いビールで薄めよう

清

老いの指ケイタイにまでこけにされ

恭昌

染みついた心の汚れ取る掃除

亜成

息子より頼りにしてるケイタイだ

蕉子

ドナーカードから追加の命譲り受け

仁

息子より頼りにしてるケイタイだ

希久子

あなたが取ったわたしの心返してよ

弘一

物陰のケイタイ一寸秘密めく

志華子

国民の借金追加する予算

美智子

天神さん何処が本社と辞書をみる 知之

ローズ川柳会(兵庫) 木村貴代子報

哀しみも遠くになればなつかしい
遠くても盆正月の墓まいり いわゑ

頼んだらつめてはくれる若い人
はつらつと皆弾んでた速い夏 貴代子

フライパンでかりかりに炒る速い日々
青い空なんと遠くへ来たもんだ 哲子

乗り継ぎも夜行も古里遠くない
じつくりと語り合いたい遠い人 義子

毎月、の投句用紙にお名前前の記入漏れが、
増えております。 年代表

封筒に記名されていても開封して、課題
毎に仕分けした後では、もうどうしよう てる

もありません。 みつ子

それだけの投句用紙には全てフルネー
ムを記入して下さい。川柳塔用箋には単

に雅号となっておりますが、この場合も
フルネームが正解です。

事務所処理する毎月の郵便物は二千
通近くになります。事情をご賢察の上

もう一度お名前前の記入漏れがないか、封
をする前のご確認をお願い致します。

(山岡富美子)

事務所便り

毎月、の投句用紙にお名前前の記入漏れが、
増えております。

封筒に記名されていても開封して、課題
毎に仕分けした後では、もうどうしよう

もありません。

それだけの投句用紙には全てフルネー
ムを記入して下さい。川柳塔用箋には単

に雅号となっておりますが、この場合も
フルネームが正解です。

事務所処理する毎月の郵便物は二千
通近くになります。事情をご賢察の上

もう一度お名前前の記入漏れがないか、封
をする前のご確認をお願い致します。

句 会 名	日 時 と 題	会 場 と 投 句 先
川 柳 塔 みちのく	19日(土) 16時開場 足音・がたがた・荒れる	弘前市榎屋町4-7 居酒屋とんぼ 1階「川柳道場」 〒036-0161 平川市杉館宮元53-1 小寺花峯
川 柳 ねやがわ	20日(日) 14時締切 謝る・仲間・カード・自由吟	寝屋川市立総合センター 4階 第1研修室 京阪寝屋川市駅からバス 〒572-0063 寝屋川市春日町9-9 高田博泉
川 柳 藤 井 寺	20日(日) 14時締切 船・地下・席題は共選	藤井寺市立生涯学習センター・シュラホール 3F 近鉄南大阪線藤井寺下車南徒歩10分 〒583-0023 藤井寺市さくら町2-2-201 高田美代子
岬川柳会	20日(日) 13時開場 呑気・天才・ベンチ	淡輪17区集会所 南海みさき公園駅・徒歩6分 〒599-0301 大阪府泉南郡岬町淡輪3592 八十田洞庵
川 柳 塔 わかやま 吟 社	20日(日) 14時10分締切 兼 題 = 謎・そろそろ・上品 課題吟 = 汁・スープ	和歌山ビッグ愛 〒640-8319 和歌山市手平2-1-2 兼 題 〒640-8453 和歌山市木ノ本890-12 宮口克子 課題吟 〒592-8349 堺市西区浜寺諏訪森町2-208-5 桑原道夫
豊 中 もくせい 川 柳 会	21日(月) 13時40分締切 つかまる・美容・すでに 自由吟	豊中市中央公民館 4F 阪急曽根駅南東・徒歩5分 〒561-0801 豊中市曽根西町2-8-4 江見見清
川柳クラブ わたの花	25日(金) 10時開場 躍動・決め手・湧く・自由吟	八尾市生涯学習センター 〒581-0012 八尾市小阪合町1-4-8 西川義明
川 柳 塔 すみよし	吟 行 26日(土) コラム・ほどほど・当り	パノラマスカイレストラン 地下鉄 大阪ビジネスパーク駅 改札口 11時半集合
和 歌 山 三 幸 会 川 柳 会	26日(土) 12時30分開場 読む・似る・飢える	和歌山商工会議所 4階 第2会議室 〒640-8570 和歌山市南中間町20番地 ニュース和歌山編集部「和歌山三幸川柳会」
はびきの 市 民 会 川 柳 会	27日(日) 14時締切 月・選ぶ・乱す・ギャグ	綾南の森 公民館 近鉄高鷺駅北東・徒歩10分 〒583-0882 羽曳野市高鷺8-31-11 塩満 敏
川 柳 ふうもん 吟 社	27日(日) 13時30分開場 マヒ・活路・訳けあり	開発ビル 2F ホール 鳥取市片原1-107 〒689-0202 鳥取市美萩野2-171-3 中村金祥
南 大 阪 川 柳 会	28日(月) 18時開場 残念・プラン・愛しい・走る	大阪市立住まい情報センター 5F 研修室 地下鉄谷町線・堺筋線天神橋6丁目駅③号出口 〒540-0004 大阪市中央区玉造1-16-13-304 前たもつ
京 都 塔 の 会	28日(月) 14時締切 ひそひそ・難・怪しい	京都ハートピア 地下鉄丸太町駅⑤出口すぐ 〒600-8428 京都市下京区諏訪町通松原下ル 弁財天町328-202 都倉求芽
松 露 川 柳 会	28日(月) 19時30分締切 星・野心・雑詠	溝口五区集会所 〒689-4201 鳥取県西伯郡伯耆町溝口1294-2 山本正光

★日時・会場などが変更になる場合は、本社事務所 (06-6779-3490) へご連絡ください。

10月各地句会案内

(開催日順)

句会名	日時と題	会場と投句先
川柳塔 な	3日(木) 14時締切 任す・鏡・諸手	奈良市立中部公民館 4F 近鉄奈良駅④番出口・徒歩5分 〒634-0812 橿原市今井町2-1-24-901 安土理恵
城北 川柳会	5日(土) 13時開場 角度・合図・うかうか・自由吟	旭区老人福祉センター 3F 地下鉄千林大宮③番出口 〒535-0002 大阪市旭区大宮4-10-18 神夏磯典子
川柳塔 まつえ	5日(土) 13時45分締切 嘘・切符・操る・はらはら	松江市雑賀町 雑賀公民館 〒690-0056 松江市雑賀町366 錦織禮子
富柳会	5日(土) 14時締切 数・世話・自由吟	富田林市中央公民館 近鉄南大阪線富田林駅下車南へ200m 〒584-0043 富田林市南大伴町4-1-10 TEL 0721-25-0603 池 森子
倉吉 川柳会	5日(土) 14時締切 やんわり・緩む・マスク	倉吉市 明倫公民館 〒689-2221 鳥取県東伯郡北栄町由良宿2072-17 谷口次男
川柳塔 さかい	8日(火) 13時開場 メンタル・感じる 折り句=すすき	堺市総合福祉会館 〒590-0016 堺市堺区中田出井町3-4-31 村上玄也
川柳 あまがさき	8日(火) 14時締切 くらべる・紅・そっと・自由吟	尼崎女性センター トレビエ 阪急武庫之荘駅南へ200m 〒661-0953 尼崎市東園田町2-45-8 山田耕治
ほたる 川柳 同好会	8日(火) 13時30分締切 漬物・断つ・嬉しいこと (詠み込み不可)	豊中市立蛭池公民館 阪急・モノレール 蛭池駅駅前ビル 5F 〒561-0813 豊中市小曾根2-4-1 水野黒鬼
あかつき 川柳会	11日(金) 14時締切 鳴る・皺・収穫・時事吟	大阪保育運動センター(新谷町第1ビル 2階) 地下鉄「谷町6丁目」駅③番出口から3分・道路向い側 〒599-0232 阪南市箱作1586-14-102 森村美花
川柳塔 打吹	12日(土) 14時締切 月・ほくろ・実る	倉吉市上灘町9 上灘公民館 〒682-0034 倉吉市大原637-3 牧野芳光
八尾市民 川柳会	13日(日) 14時締切 伝説・賞・流す・雑詠	八尾神社内 西郷会館 3F 近鉄八尾駅西口・徒歩5分 〒581-0831 八尾市山本町北5-9-3 土谷耀一
西宮北口 川柳会	14日(月) 14時締切 体育・熱れる・やはり・自由吟	西宮市立中央公民館 阪急西宮北口駅南出口歩3分 プレラにしのみや 〒662-0062 西宮市木津山町3-15 亀岡哲子
川柳 さんだ	さんだ川柳大会 15日(火) ホテル・手ごたえ・自然 都会・わざわざ・自由吟	三田ホテル 〒669-1546 三田市弥生が丘5-2-4 堀 正和
岸和田 川柳会	市民川柳大会 20日(日) 9月号 P.121 参照	岸和田市立福祉総合センター 〒596-0076 岸和田市野田町2丁目13-19 中岡香代
川柳大阪	19日(土) 14時締切 優しい・罨・全力	地下鉄・長堀鶴見緑地線 京橋駅「研修室」 〒533-0004 大阪市東淀川区小松1-18-24-14 長井善純

柳界展望

★柳都65周年全国川柳大会は7月7日、新潟グラインドホテルで開催。同人特選次の通り。

破と書いた鬼の形相だった。小島 蘭幸

★13尼崎川柳大会は8月24日、兵庫県立ビッコロシアターで開催。参加者134人。同人成績次の通り。

吐き終えてしばらく眠る藪の中 矢倉 五月
横道に反れて大樹の芽を掴む 奥村 五月
遊ぶ子を一番星が帰らせる 上垣キヨミ

★川柳信濃川納涼誌上大会。同人成績次の通り。

四位 高瀬 霜石
次世代へ渡すバトン

拭いている 九位 山崎 武彦

幸福にすると思つた始 発駅

☆八木千代さん(参与・米子市)は、俳誌「船団」98号に「今日の川柳一稜線で逢う」と題して紹介された。

▽柳界動向△

◇くろぼこ川柳会(鳥取市)は会長を鈴木公弘氏から稲村遊子さんに交代。

▽ご芳志御礼△

○高田美代子さん(参与・藤井寺市)からご厚志を拝受しました。

▽新誌友紹介△

山鹿市 前田 幸子
紹介者 三谷 直男
松山市 西本 幸子

▽お詫びして訂正△

▼9月号P90下段5行目、原 反抗期抜けて明るい塾鞆↓反杭期。P91中段6行目、添 家族そろいいつても明るく暮らしてる↓rを取る。P109下段17行目↓懐かしさ君のブルが広がります↓ブルは広がります。常任理事会 9月6日金

新同人紹介

今井 万紗子
楓葉・朱夏・かずお推薦

①川柳塔まつり関連②同人総会関連③新常任理事・新理事④6賞選考結果⑤拡大会議⑥定例確認
次回 9月24日(火) PM13時30分

平成25年度(第25回)

川柳塔碑合祀祭実施要領

本年度川柳塔碑合祀祭を下記の通り行いますので、ご参列賜りますようご案内申し上げます。

合祀祭日 平成25年11月9日(土) 雨天でも行います。

集合場所 南海電車 難波駅 3階中央改札前

集合時間 午前9時30分

(川柳塔の茶色の旗をあげておきます)

乗車時間 特急「高野5号」午前10時発に乗車します。事前申込者には割引周遊券月特急券(サービック)を購入しておきます。

会 費 4,500円(往復乗車券および往きの特急券、昼食費) 帰路の特急券は各自でご購入願います。

合祀祭会場 〒648-0211 和歌山県伊都郡高野町高野山17 高野山霊園内 川柳塔碑前

(奥の院下車 徒歩5分)

大霊園事務所 電話 0736-56-2966

到着後すぐに法要を営みます

(午後12時15分頃より約30分の予定)

合祀予定者(敬称略)

(平成24年8月~25年7月までに逝去された方)

池原 天馬	長谷川 呂万	阿萬 萬的
中宇地 秀四	福岡 末吉	赤川 菊野
中原 諷人	井上 勝視	石田 清泉
志田 千代	吉村 一風	

第33回 川柳塔鹿野みか月川柳大会

日 時 11月24日(日) 午前9時開場
場 所 鹿野町総合福祉センター『和泉荘』

兼 題 (各題2句) 11時30分 締め切り

「景色」 小 島 蘭 幸 選
「奇妙」 新 家 完 司 選
「偉い」 菊 元 誠 忠 選
「加える」 山 本 希久子 選
「温度」 長谷川 博 子 選
「飼う」 政 岡 末延子 選
「臆病」 竹 信 照 彦 選

会 費 2000円(昼食・発表誌呈)

欠席投句 1000円(小為替希望、切手不可)

締め切り 11月2日(必着)

投句先 〒689-0216 鳥取市気高町宝木1561-113
福西 茶子 TEL0857-82-1314

主 催 川柳塔鹿野みか月

第64回 西宮市民文化祭川柳大会

日 時 10月13日(日) 開場 12時
出句締切 13時30分

場 所 西宮市民会館(市役所南隣)4階
会 費 1500円(作品集・小品・呈)

兼 題 (各題2句、欠席投句拝辞)

「大丈夫」 長 川 哲 夫 選
「美味しい」 原 戸 麻 也 選
「サービス」 大 堀 正 明 選
「話す」 渡 辺 信 也 選
「出る」 上 野 多恵子 選
「意味」 小 島 蘭 幸 選
「京阪神」 村 上 氷 筆 選

懇親会 4000円 当日受付

連絡先 寺 杣 富次(電話 0798-49-2162)
〒663-8174 西宮市甲子園4番町6-9

西宮北口川柳会・西宮川柳会
瓦木川柳勉強会・甲子園川柳会

第28回 渡辺銀雨賞 すずむし全国誌上川柳大会

課 題 「窓」

(2句詠で一口 詠み込み・字結び可)

選 者 十六名共選

岡崎 守・千島 鉄男・赤松ますみ
加藤 鯉・浅利猪一郎・渡辺 松風
他

投句料 1000円(郵便小為替)何口でも可
投句用紙 所定用紙・便箋用紙・原稿用紙
住所・氏名(雅号・本名)・郵便番
号・電話明記

賞 大賞(一名)楯・あきたこまち20キロ他
10位まで あきたこまち進呈

締 切 10月31日(消印有効)

投句先・問合せ先

〒018-1724 秋田県南秋田郡五城目町東
磯ノ目1丁目7-11 湖東印刷所内
すずむし全国誌上川柳大会係 宛
TEL 018 (852) 2430

主 催 川柳すずむし吟社

第23回 枚方市民川柳大会

日 時 10月27日(日) 午後12時開場

場 所 枚方市立枚方公園

青少年センター 3F

(京阪 枚方公園駅下車

西へ徒歩3分)

宿 題 「ランク」 藤井満洲夫 選

「調子」 白井 笙子 選

「探す」 吉岡 修 選

「育つ」 松本 柊子 選

「成程」 上野勝比古 選

「だしぬけ」 西 美和子 選

席題なし・各題2句

締 切 午後1時

参加費 1000円(発表誌呈)欠席投句拝辞

連絡先 三村 一子 TEL 072-843-2389

主 催 くらわんか川柳会

編集後記

★鱗雲一枚こぼれ亡母の窓

薫風

★清々しい風、若々しい波と言おうか、今年度の六賞には新しい流れ、うねりが感じられた。愛染帖、檸檬賞ともに受賞者は誌友歴も新しい若手である。また川柳塔賞に至っては三十九歳、川柳は五歳から始めたという若さ。いずれの受賞作も視点も表現も新鮮。これからの川柳塔に大いに寄与してくれることを期待する。押し寄せる若手のバワーに動ぜず、路郎賞に輝いた山岡富美子さんに敬意を表したい。

★知人に送られた『ほとんど人力』（小学館発行）はサブタイトルに「菅原文太と免許皆伝の達人」とあるように対談集である。対談の相手は、俳人

の金子兜太を初め、憲法学者、第五福竜丸乗組員、発展途上国で奉仕する医師・評論家など十七名。

★戦争を語り、原発を語り、食を語り、沖縄を語り、語るだけでなく、怒り、問題提起をし、人間の未来や生き方を考え、模索する一冊。私を最も愕然とさせたのは「食の安全」である。日本の明日を担う子どもたちの未来に、底知れぬ泥沼の淵に佇つ思いがする。

★森中恵美子先生に『水たまり今昔』を戴いた。過去に上梓された『水たまり』『水たまり今昔』『仁王の口』を改めて一冊に纏めたもの。恵美子調と定評のある骨格の確かな本格川柳が一六五五句。『誘惑のあの手この手にくぐり抜け』『水草よ蛸でさえも子を宿す』『母はまだひとりでもたぐ水たまり』…川柳界の名花、

英会話

ひとこと

海外に行く、少しでも自分の言葉で外国の方と話が出来ればもっと楽しくなるだろうと思ひ、七年前からNHKの基礎英語を毎朝六時から聞き始め、今も続けています。

最近では、テキストが無くてでも七十%くらいは聞き取れるようになりましたが、レベルを上げると

聞き取り率は悪くなります。

そこで最近、勇気を奮って英会話教室に月二回通うことにしました。思うことがなかなか言えず歯痒い思いをしています、いつの日か海外を私の英語で妻をガイド出来ればと思っています。「継続は力」頑張ります。

英会話おしゃべりな僕員になる

(山野 寿之)

森中恵美子の人生が脈々と息づく。秋の夜長には紅茶が似合う。アールグレイの香りと共に味わいたい一冊。

★川柳塔まつりが近づいた。梅田のグランフロント大阪、阿倍野のアペナルカスを見学がてら、ぜひお運びください（朱）

○編集の度に悩ましのが地域割ですが、出来るだけ間違いの少ないように話し合った結果、

○並びは郵便番号順で、

※北海道・東北ブロック
（札幌・砂川・黒石・平川・弘前・青森県）※関東ブロック
（さいたま・東京・神奈川・富山・岐阜・愛知）※関西ブロック
（京都・大阪・兵庫・奈良・和歌山）※中国ブロック
（鳥取・島根・岡山・広島・山口）※四国・九州ブロック
（かがわ・愛媛・高知・福岡・佐賀・熊本・シドニー）の5ブロックに分けました。

○川柳塔、水煙抄ともに6句組を除いて同じ回りになります

○投句された方の順番は、これも6句組を除いてはいえお順に組んでおります。ご諒承下さい。（ま）

川柳塔(同人)・水煙抄(誌友)投句用紙

種目「

「発表(12月号)

地名

市都
道府
姓雅号

きりとりせん

◎8句を楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

同人・誌友 マルで囲んでください。

投句先 〒543-0052 大阪市天王寺区大道1丁目14番17号 花野ビル201

檸檬抄投句用紙

「ファイト」(10月15日締切)

12月号発表

大内 朝子 選 — 共選 — 竹治ちかし 選

B

A

B

A

地名

市都
県道
府
姓雅号

地名

市都
県道
府
姓雅号

切らないで下さい

きりとせん

◎楷書で正確に書き、15日までに到着するようお送りください。

左右に同じ句を書いて下さい

作品募集

12月号発表 (10月15日締切)

初歩教室 「ロマン」(3句)	一路集 (3句) 「減る」 「予告」 「はくはく」	檸檬抄 (2句) 「ファイト」	愛染帖 (3句)	水煙抄 (8句)	川柳塔 (8句)
太田昭 田山昭 昭忠 昭忠 昭忠	藤岡賢 村賢子 ヒデコ 子	大内朝 子	新治朝 子	川上完 司	小島蘭 幸
選	選	選	選	選	選

1月号
檸檬抄「書く」
一路集「仕事」「ユニーク」
「一流」
初歩教室「暦」

第32年度 夜市川柳募集

第5回「磨く」岩田明子選
ハガキに3句 10月20日締切
投句先 〒593-8305 堺市西区堀上緑町2-16-3
河内天笑方 川柳塔さかい

定価 八百円 (送料84円)
半年分 五千円 (送料共)
一年分 九千八百円 (同)

二〇一三年(平成二十五年)十月一日発行

発行人 小島和幸
編集人 木本朱夏
印刷所 美研アート

〒543-0052 大阪市天王寺区大道一四一七
花野ビル201号室

発行所 川柳塔社
電話 (06)六七七九一三四九〇番
振替 〇〇九八〇一四二九八四七九番

第65回 大阪川柳大会

日時 12月16日(月) 12時20分開場
場所 大阪市立住まい情報センター
3階ホール TEL.06-6242-1160
地下鉄「天神橋筋6丁目」駅下車③号出口
JR大阪環状線「天満」駅下車 北へ660m

会費 1500円 (発表誌呈)

「蹟く」了味 茶助 選(川柳瓦版の会)
「叶う」黒田 能子 選(川柳塔社)
「こわい」赤松ますみ 選(川柳文学コロキウム)
「蓋」瀬川 幸子 選(番傘川柳本社)
「神秘」板野 美子 選(川柳天守閣)
「渡る」菱木 誠 選(番傘川柳本社)
「代理」鴨谷瑠美子 選(川柳塔社)

出句 各題2句 席題なし 締切 13時20分
主催 番傘川柳本社・川柳塔社
川柳文学コロキウム
川柳天守閣・川柳瓦版の会
後援 大阪市

本社 11月句会

7日(木) 午後1時から

兼題 「画」「免許」「ずけずけ」
「濡れる」「余地」

「川柳塔」への投句について

- (1) 川柳塔欄への投句は同人、水煙抄欄へは誌友(誌代半年分以上前納の定期購読者)に限り、本誌綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (2) 愛染帖・檸檬抄・一路集への投句は、同人・誌友に限ります。初歩教室は誌友のみとします。愛染帖・一路集・初歩教室は川柳塔柳箋(本社事務所取り扱い)、檸檬抄は本紙綴込みの投句用紙を使用してください。
 - (3) 各欄への投句は、必ず氏名と住所(県・市名)を明記してください。
 - (4) 各欄への投句数および投句締切期日の厳守をお願いします。ファックスでの投句は御遠慮下さい。
- 川柳塔本社事務所へのご連絡は、土・日曜、祝日を除く平日の10時から16時までにお願いたします。

杵つき製法の「すりごま」 オニザキの



長い間親しまれてきた
オニザキの「すりごま」は、
名称を変更し、パッケージ
を一新いたしました。

オニザキのすりごまは、
元々すり鉢ですったゴマ
ではなく、杵と臼を使った
杵つき製法で出来た「すり
ごま」です。
今までと変わらぬ、風味
豊かな味わいをご堪能く
ださい。



株式会社 オニザキコーポレーションセルス
〒862-0951 熊本市中央区上水前寺1-6-41 OCOビルディング

TEL 0120-30-5050

信頼され、社会に役立つ製品を作る

高級封筒専業メーカー



コーキ封筒株式会社

本社 富田林市若松町東3丁目7番8号 〒584-0023

TEL 0721-25-7210 FAX 0721-25-9484

東京営業所 東京都中央区日本橋本石町4丁目5番8号 〒103-0021

（日本橋川村ビル4F）

TEL 03-5255-5158 FAX 03-5255-5159

<http://www.koki-envelope.com>